野々市町中南部土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書５

粟田遺跡（第11・13・14次調査）

2010

石川県野々市町教育委員会

野々市町中南部土地区画整理組合

野々市町中南部土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書５

粟（あわ）田（だ）遺跡（第11・13・14次調査）

2010

石川県野々市町教育委員会
野々市町中南部土地区画整理組合

第10・11次調査　全景（南から）

第10・11次調査　全景（東から）

第13次調査　全景（南から）

第13次調査　全景（東から）

第13次調査　AW（13）506～509全景（東から）

第13次調査　AW（13）93・95全景（西から）

第14次調査　全景（南から）

第14次調査　全景（東から）

例　　言

1　本書は粟田遺跡（第11・13・14次）埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　遺跡の所在地は、石川県石川郡野々市町粟田地内である。

3　調査原因は野々市町中南部土地区画整理事業にともなうものである。

4　調査にかかる費用は、野々市町中南部土地区画整理組合が負担した。

5　調査は、野々市町中南部土地区画整理組合からの依頼を受けて野々市町教育委員会が実施した。

6　現地調査は下記のとおり実施した。

平成11年度　粟田遺跡（第11次）　面積1,600㎡
　期　間　平成11年９月30日～平成12年１月14日
　担当者　布尾和史　野々市町教育委員会文化課　主事
　　永野勝章　野々市町教育委員会文化課　主事

平成16年度　粟田遺跡（第13次）　面積2,170㎡
　期　間　平成16年11月22日～平成17年３月17日
　担当者　永野勝章　野々市町教育委員会文化課　主事

平成17年度　粟田遺跡（第14次）　面積1,409㎡
　期　間　平成17年４月４日～５月19日
　　平成17年９月20日～平成18年２月15日
　担当者　永野勝章　野々市町教育委員会文化課　主事

7　出土品整理は平成11・17～21年度に野々市町教育委員会が実施した。

8　報告書の刊行は平成21年度に野々市町教育委員会文化振興課が実施した。担当は永野勝章（野々市町教育委員会文化振興課主事）、図版作成・編集・執筆は布尾幸恵が行った。

9　現地調査から出土品整理、報告書刊行に至るまでには地元の方々をはじめとして下記の機関、個人の協力を得た。

大橋康二、布尾和史、垣内光次郎、藤田邦雄

佐賀県立九州陶磁文化館、㈶石川県埋蔵文化財センター、野々市町中南部土地区画整理組合、野々市町都市計画課、野々市町史編纂室

10　本書についての凡例は下記の通りである。

⑴　方位は座標北を表し、座標は国土交通省告示の平面直角座標第Ⅶ系に準拠している。

⑵　水平基準は海抜高であり、T. P.（東京湾平均海面標高）による。

⑶　挿図の縮尺は図に示す通りである。また、写真図版における遺物の縮尺は統一していない。

11　調査に関する記録と出土遺物は、野々市町教育委員会が一括して保管・管理している。

12　本書で報告する第11・13・14次調査区に隣接する第10次調査区の報告書は［野々市町教委2006］、第12・15次調査区の報告書は［野々市町教委2008］ですでに刊行されている。調査区にまたがって確認された遺構の所属時期について過去の報告書と異なる点がある場合は、この報告書をもって正とする。

目　　次

第１章　調査の経過
第１節　調査の経過 …… 1
第２節　発掘作業の経過 …… 2
第３節　整理作業の経過 …… 2
第４節　調査体制 …… 3

第２章　遺跡の位置と環境
第１節　地理的環境 …… 4
第２節　歴史的環境 …… 4

第３章　調査の成果
第１節　調査と報告の方法 …… 6
第２節　遺跡の概要 …… 7
第３節　遺構 …… 7
⑴　縄文～古墳時代の遺構 …… 7
⑵　古代の遺構 …… 7
⑶　中世の遺構 …… 9
⑷　近世の遺構 …… 10
第４節　遺物 …… 22
第５節　小結 …… 23

第４章　総括
第１節　古代 …… 30
第２節　近世 …… 30

遺物観察表 …… 25
引用・参考文献 …… 35
遺構分布図・実測図 …… 36
遺物実測図 …… 75

第１章　調査の経過

第１節　調査の経過（第１図）

本書に収録する粟田遺跡第11・13・14次調査は野々市町中南部土地区画整理事業に伴うものである。この事業にかかる埋蔵文化財分布調査、発見された埋蔵文化財包蔵地に対する取り扱い、法令手続きについては［野々市町教委2006］に詳しい。

粟田遺跡第11次調査は平成11年に1,600㎡を対象として行われた。

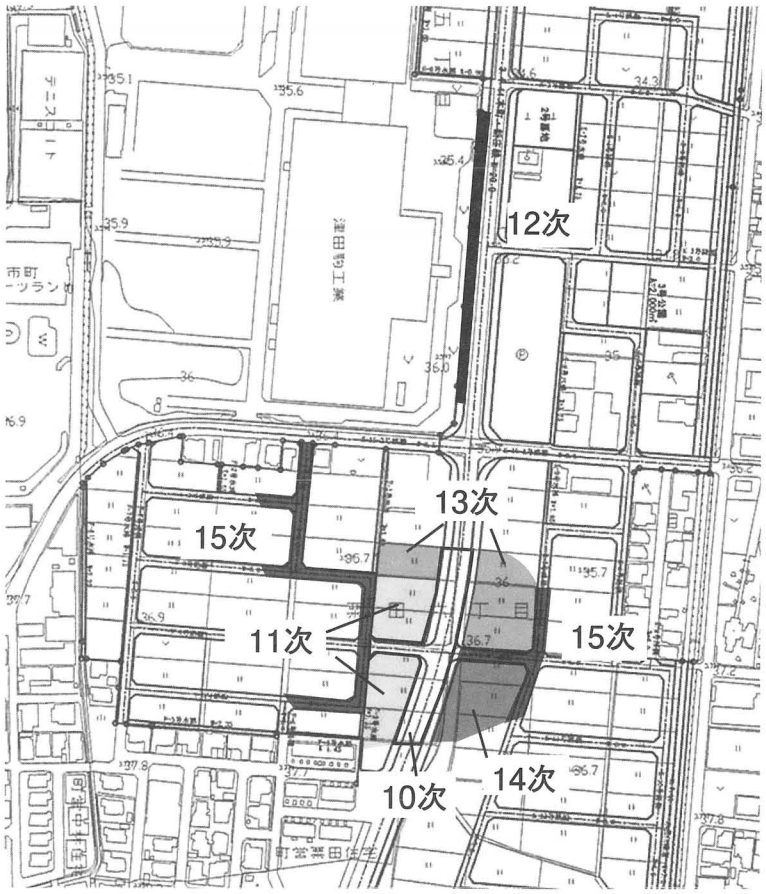
野々市町は平成11年９月２日付け教文第129号で野々市町中南部土地区画整理組合に対して埋蔵文化財発掘調査の実施計画書を提出し、これに基づいて両者は平成11年９月６日付けで委託契約を取り交わした。現地調査は平成11年９月30日～10月８日、同年11月２日～11月24日、同年12月14日～平成12年１月14日にかけて行われた。

第13次調査は平成16年に2,170㎡を対象として行われた。

発掘調査の依頼は平成16年３月31日付けで野々市町中南部土地区画整理組合理事長から野々市町教育委員会教育長あてに出された。野々市町は平成16年４月１日付け教文第17号で野々市町中南部土地区画整理組合に対して埋蔵文化財発掘調査の実施計画書を提出し、これに基づいて両者は同日付けで委託契約を取り交わした。平成16年４月１日付け教文第47号において、埋蔵文化財保護法第58条の２第１項に基づく埋蔵文化財発掘調査報告が野々市町教育委員会教育長から石川県教育委員会に出された。現地調査は平成16年11月22日～平成17年３月17日にかけて行われた。

第14次調査は平成17年に1,409㎡を対象として行われた。

発掘調査依頼書は平成17年４月１日付けで野々市町中南部土地区画整理組合理事長から野々市町長あてに出された。野々市町は同日付け教文第７号で野々市町中南部土地区画整理組合に対して埋蔵文化財発掘調査の実施計画書を提出し、これに基づいて両者は委託契約を取り交わした。文化財保護法第99条第１項の規定にもとづく発掘調査報告が平成17年４月１日付け教文第８号により野々市町教育委員会教育長から石川県教育委員会に出された。現地調査は平成17年４月４日から５月19日と、平成17年９月20日から平成18年２月15日に行った。



第１図　年次別調査区位置図

第２節　発掘作業の経過

第11次調査

９月30日　表土除去開始。10月１日　現場事務所建て上げ。10月４日　作業員による調査開始。10月５日　遺構検出開始。11月４日　遺構検出状況写真撮影。11月10日　遺構番号73掘り下げ。11月15日　設置してあった発電器に車が衝突。11月16日　大雨。11月20日　航測（一回目）。11月22日　北調査区遺構掘り下げ。12月14日　航測（二回目）。12月27日　現場事務所撤収。１月６～14日　現地補足調査。併行して埋め戻し。

第13次調査

11月22日　作業員による調査開始。12月17～20日　遺構番号410掘り下げ。１月12日　積雪。２月８日　遺構番号93・95掘り下げ。３月１日　遺構番号239より網代出土。３月７日　航測。３月10～17日　現地補足調査。

第14次調査

４月４日　南側表土除去開始。４月７日　作業員による調査開始。４月18日　遺構番号12石列検出。５月12日　航測（一回目）。５月19日　現場事務所撤収。９月20日　残土搬出。９月27日　北側表土除去開始。12月１日　作業員による調査開始。12月14～19日　大雪、調査中断。１月12日　中央付近大型土坑群掘り下げ。２月14日　航測（二回目）。２月15日　現地補足調査。

第３節　整理作業の経過

第11次調査

平成11年２月　現場写真整理。同年３月　出土遺物洗浄・記名。平成17年４月　出土遺物実測・写真撮影。平成21年４月～22年３月　図版作成・本文執筆。

第13次調査

平成17年４月　出土遺物洗浄・記名、現場写真整理。同年12月～平成18年２月　出土遺物の実測。平成20年12月　出土遺物写真撮影。平成21年４月～22年３月　図版作成・本文執筆。

第14次調査

平成18年３月　出土遺物洗浄・記名、現場写真整理。平成19年４月・平成20年１月～３月　出土遺物

実測・写真整理。平成21年４月～22年３月　図版作成・本文執筆。

第４節　調査体制

第11次調査

調査主体　野々市町教育委員会（教育長　田村昌俊）
担 当 課　野々市町教育委員会　文化課（課長　高本　実）
調査期間　平成11年９月30日～平成12年１月14日
対象面積　1,600㎡
調査担当　布尾和史（野々市町教育委員会　主事）
　　永野勝章（野々市町教育委員会　主事）

第13次調査

調査主体　野々市町教育委員会（教育長　田村昌俊）
担 当 課　野々市町教育委員会　文化課（課長　中川保夫）
調査期間　平成16年11月22日～平成17年３月17日
対象面積　2,170㎡
調査担当　永野勝章（野々市町教育委員会　主事）

第14次調査

調査主体　野々市町教育委員会（教育長　田中　宣）
担 当 課　野々市町教育委員会　文化振興課（課長　中川保夫）
調査期間　平成17年４月４日～５月19日・平成17年９月20日～平成18年２月15日
対象面積　1,409㎡
調査担当　永野勝章（野々市町教育委員会　主事）

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

野々市町は石川県のほぼ中央に位置する。本書で取り上げる粟田遺跡は野々市町の南部にあたる粟田地区に所在する。粟田地区は手取川扇状地扇央部に立地し、現在は宅地・商業地と水田が広がる平坦な地形であるが、これは近代初頭に行われた耕地整理と近現代の開発によるもので、それ以前は手取川とその支流によって形成された細長い島状の微高地が点在し、その微高地上に集落が展開してきた。このことは各時代における遺跡の立地からも確認できる。

第２節　歴史的環境（第２図）

粟田遺跡は、縄文時代から近世にかけての遺跡である。遺跡周辺は近年、土地区画整理事業等に係る発掘調査事例が増え、諸々の成果が挙がっている。

縄文時代は、粟田遺跡で、手取川によって運ばれた石礫を使用した打製石斧の素材採取場所を検出している。清金アガトウ遺跡では、集落跡は明確ではないものの遺物が確認されている。

弥生・古墳時代に入ると、御経塚遺跡や押野タチナカ遺跡等の扇状地扇端部扇側部で集落が確認される。一方、上林・末松地区では７世紀代の古墳が築造され、古代の扇状地開発を主導していく領主層の存在が明らかになっている。

古代は、粟田遺跡・清金アガトウ遺跡など扇状地扇央部の集落の多くが開始され、扇央部の開発が進んだ時期である。いわゆる法起寺伽藍をもつ末松廃寺は７世紀後半の創建である。この周辺では末松福正寺遺跡、末松ダイカン遺跡など７世紀前半代の集落跡も確認されているが、遺跡数が増えるのは７世紀後半からであり、８世紀になると粟田遺跡の南に位置する上林・新庄遺跡群で集落が拡大する。三納アラミヤ遺跡はこの時期に相当する。この上林・新庄遺跡群は北と南でその様相を異にし、南は製鉄にかかわる竪穴住居と掘立柱建物から成る手工業生産地区、北は溝に区画された計画的な建物配置やその後９世紀後半にかけて機能する大型建物を有し、周辺を掌握する領主層が存在した地区であったことが窺える。

中世は、野々市町南部では13世紀から三納ニシヨサ遺跡・三納トヘイダゴシ遺跡などの集落跡が確認されている。これらは輸入磁器を一定量所持し、溝によって区画された土地に小規模な掘立柱建物を配置するもので、その実態は自作農的な小領主層の集落跡と考えられる。これらの集落は14世紀頃には廃絶し周辺の様相は近世まで明らかでない。なお、野々市町東部には扇が丘ハワイゴク遺跡など居館クラスの遺跡が検出されており、有力武士の居宅と考えられている。野々市町住吉町と扇が丘地内には加賀国の守護であった富樫氏の居館と考えられる富樫館跡が存在する。館の性格を明示できるような成果は上がっていないが、守護城下町の構造に関連づけられる都市構造の一端が判明しつつある。中世後半の集落は三日市Ａ遺跡・長池キタノハシ遺跡・粟田遺跡などで展開することが確認されている。

近世には粟田地区は集落･水田となる。特に粟田集落については、『石川郡誌』に、鎮守神社の西側にあった村を、粟田川の氾濫のため村全部を粟田新保に移した、という伝承が書き留められている。

近代は、大正時代に耕地整理が終了し、水田となっている。三納アラミヤ遺跡では水門跡が確認され、調査区に隣接する現在の水門に繋がる変遷を知ることができる。

第２図　遺跡分布図

野々市町南部地区遺跡地名表

No.	遺　跡　名	No.	遺　跡　名	No.	遺　跡　名
1	粟田遺跡	10	末松Ｂ遺跡	19	末松しりわん遺跡
2	三納トヘイダゴシ遺跡	11	末松廃寺跡	20	下新庄アラチ遺跡
3	三納アラミヤ遺跡	12	古元堂館跡	21	下新庄タナカダ遺跡
4	藤平田ナカシンギジ遺跡	13	末松Ｃ遺跡	22	上林新庄遺跡
5	三納ニシヨサ遺跡	14	末松古墳	23	上林古墳
6	清金アガトウ遺跡	15	末松Ａ遺跡	24	上林テラダ遺跡
7	末松信濃館跡	16	大館館跡	25	上新庄ニシウラ遺跡
8	末松福正寺遺跡	17	末松砦跡	26	上林遺跡
9	末松ダイカン遺跡	18	法福寺跡	27	安養寺遺跡

第３章　調査の成果

第１節　調査と報告の方法

粟田遺跡は昭和63年に実施した分布調査によって発見された遺跡である。その後数次にわたって周辺の開発事業に伴う調査が行われた。平成10年、野々市町中南部土地区画整理事業が実施されることになり、これに先立って同年10月22日～11月６日にかけて分布調査を行った。分布調査は事業区域内に平面１×１ｍの試掘坑を225箇所設定し、地山面が確認される深度まで掘削、平面および土層断面の観察を行った。その結果粟田遺跡に隣接する農地一帯から遺構や古代～近世遺物が検出されたため、この部分を粟田遺跡の一部と判断した。この分布調査の詳細は［野々市町教委2006］に既述した。

区画整理事業に伴う発掘調査は、平成11年度から平成17年度までに第10～15次の６次にわたって実施された。本書では民有地を対象として平成11年度に実施した第11次調査・同16年度に実施した第13次調査・同17年度に実施した第14次調査について報告を行う。

発掘調査では、公共座標に基づく10×10ｍのグリッドを設定し、北西隅の杭番号でその区画を呼称した。遺構の掘削は、基本的に遺構を半裁して断面の観察を行って土色や堆積状況を観察し、必要に応じて写真や図面による記録保存を行った。

報告にあたっては、個々の遺構の名称は各遺構番号の前に粟田遺跡を示すAWと（11）・（13）・（14）といった調査年次を組み合わせ、それぞれ第11次：AW（11）、第13次：AW（13）、第14次：AW（14）とした。遺構の名称は時代・種類・グリッドに関係なく調査年次ごとに１から通しで調査番号を付けているが、第13次調査区のみは西側と東側でそれぞれ１から調査番号を付している。

遺構の説明は本文・図面図版・写真図版を用いる。遺構の種類にはピット・建物跡・溝・土坑・旧河川・流路などがあり、これらについて位置・分類・規模・形状・覆土の堆積状況・出土遺物・重複とその前後関係などを記述した。遺構の規模を示す際、数値のあとに「以上」と付すのは切りあいがあったり遺構の立ち上がりが不明だったりして本来の形状がわからない場合である。特に第13・14次調査区は現地作業の際の写真・図面とも記録が残されていない遺構や、断面図と平面図に矛盾がある遺構が多く、遺構の前後関係などを把握できないケースが多かった。報告者は遺物などから可能な限り推測したが、新旧や覆土など不明なものはその旨を明記、またそういった観察記録も残っておらず遺物も出土しない遺構については記述から外さざるを得なかった。

遺物の総数は、パンケースで、第11次調査６箱、第13次調査35箱、第14次調査27箱である。この中から遺構出土のものを中心に、遺存の良いものや出土例の少ないものを選択して図化した。

遺物図版作成にあたっては個々の遺物を時代・器種・種別毎にレイアウトした。遺物図版の縮尺は原則１／３とし、石製品など大型のものは１／６で掲載した。

遺物の記述は、本文・観察表・図面図版・写真図版でおこなう。

観察表は遺物の種類によって観察項目は異なるが、煩雑を避けるため表は統一の形式を取った。

縄文土器の型式名は『野々市町史　資料編』［吉田2003］で使用しているものを用いた。古代における土器の器種名は、須恵器・土師器とともに、基本的には北陸古代土器研究会で使用するものに準じている。なお、煮炊具に関しては従来使用されてきた「甕」は使用せず、煮炊き機能のイメージから「釜」を使用し、小型を小釜、大型の長胴を釜とした［小松市教委2002］。土器編年・年代観は田嶋明人氏の1988年と1997年発表の文献をもとにしている［田嶋1988、1997］。中世の土器・陶磁器は、名称・時期ともに土師器が藤田邦雄［藤田1997］、珠洲焼が吉岡康暢［吉岡1994］、瀬戸美濃が藤澤良祐［藤澤2008］、輸入青磁は上田秀夫［上田1982］、青花は小野正敏［小野1982］に準じた。近世陶磁器は大半が

肥前陶磁器で、［九州近世陶磁学会2000、2001］に準じている。なお、遺物の器種や時期比定については垣内光次郎氏・藤田邦雄氏に多大なる助言を得た。

第２節　遺跡の概要（第４・５・12・16図）

粟田遺跡第11・13・14調査区は古代・中世・近世を主体とし、他に少量の縄文時代の遺物を出土している。縄文時代と古代は調査区西側に偏在し、中世と近世は第13・14次調査区を中心に全域に分布している。以下、時代ごとにその概要を述べる。

縄文時代はピットや土坑が検出された。遺構・遺物ともに少ない。

古代は外周にピットをもつ竪穴状遺構・土坑・ピット・溝などが検出された。第15次調査でも周囲にピットをもつ竪穴状遺構が確認されている。

中世は竪穴状遺構・土坑・ピットなどを検出した。特に第13・14次調査区では近世の遺構から中世の遺物が出土する例が非常に多いことから、中世と近世の遺構分布はほぼ重複しているものと考えられる。主体となる時期は15～16世紀前半であるが、13～14世紀の遺物も若干出土する。遺物は中世土師器皿、珠洲・瀬戸美濃などを産地とする国産陶器、中国製磁器（青磁・白磁・青花）や、行火・五輪塔・砥石などの石製品が出土している。

近世は石列をもつ土坑・ピット・溝などが検出された。主体となる時期は17～18世紀である。遺物の多くを肥前陶磁器が占める。遺物が出土せず、覆土や他遺構との関係によって近世と判断した遺構もある。調査区全体を通る溝は、耕地整理前の地籍図と合致するところが多い。

また、今回報告する第13・14次調査区は地山に大量の礫が入ることを特徴とする。

第３節　遺構

⑴縄文～古墳時代の遺構

ａ）土坑

AW（11）119（第６図）　D9グリッドに位置し、平面形は不整形である。径392×136cm、深度15～21cmである。出土遺物は打製石斧（１）である。

ｂ）ピット

ピットは調査区全体に点在している。建物等を構成するには至っていない。

AW（11）90（第６図）　C13グリッドに位置し、平面形は楕円形で径60×25cm、深度16cmである。覆土は黒褐色土で、出土遺物はない。

AW（11）125（第６図）　D10グリッドに位置し、平面形は略円形で径34×30cm、深度10cmである。出土遺物は縄文土器（２）である。

AW（11）126（第６図）　B9グリッドに位置し、平面形は略円形で径42×40cm、深度8cmである。弥生土器（３）が出土した。

⑵古代の遺構

ａ）掘立柱建物

AW（11）73（第７・８図）　B12グリッドに位置する、７×２間の側柱建物である。この建物は同一地点で焼土を持つ竪穴状遺構を確認しており、竪穴状遺構の覆土が掘立柱建物の柱穴を切る地点が見られることから、①掘立柱建物を廃棄して竪穴を掘削②当初は掘立柱建物であったところを建て替えて掘立柱建物＋竪穴状遺構として使用③掘立柱建物の内部を竪穴状に掘りくぼめた同時使用、という３通りが考えられる。なお、当遺跡では第15次調査区でも竪穴状遺構を内部にもつ掘立柱建物が確認され、当遺

跡に特徴的な遺構である。

掘立柱建物は、桁行14.5m×梁行5.5m、平面積79.75㎡で建物主軸方位はN－5°－Wである。P1～25で構成されるが、P22～25については内部に存在しており、これと重なる竪穴状遺構に関係する可能性がある。北端のP16とP17、P2とP1の間が他に比べて若干狭いことから、この部分は庇と考えられよう。また、南端のP11とP10、P7とP21の間はかなり広く、同一地点で建物が南に伸びるかたちで建替えられた可能性もある。ピットの平面形は方形または楕円形を呈するものが多く、径50～128cm、深度14～57cmである。また、ピットには掘方と柱痕をもつものが多く、確認された柱痕跡の径は10～38cmである。覆土は黒褐色土を中心とし、掘方部分に暗褐色土や黄褐色土が入る。なお、P10・17では大きめの礫が柱痕跡に置かれたような状態で検出されたが、これらは柱が抜き取られたあとに置かれたものである。

竪穴状遺構は、南側の立ち上がりが不明なものの、遺存径6.4×4.3cm、深度4～10cm、覆土は大きく2層に分けられ、上層が黒褐色土、下層が褐灰色土である。遺構の確認面では焼土跡も検出された。下層は非常にしまりが強く、土間と考えられる。この面の下層には柱の抜き取り痕跡と思われる黒色土部分が見られ、床面を作る際に以前にあった柱を抜いたと考えられる。

出土遺物は須恵器無台杯（6）、土師器釜（7・8）で、主体は9世紀後半である。このほか、縄文土器（4・5）も出土した。

b）ピット

古代に属するピットは第11次調査区南調査区南側・AW（11）73周辺・北調査区西側と大きく三箇所の分布が見られる。建物や柵列を構成しないものをまとめた。遺物が出土しない遺構は、覆土の観察から古代と考えた。

AW（11）47（第6図） B16グリッドに位置し、平面形が不整円形を呈する。径84×75cm、深度31cm、覆土には礫が大量に混入していた。覆土は褐色土を主とする。遺物はない。

AW（11）77（第6図） C12グリッドに位置し、平面形が略円形を呈する。径40×36cm、深度24cm、覆土は黒褐色土である。遺物はない。

AW（11）86（第6図） A11グリッドに位置し、平面形が略方形を呈する。径44×36cm、深度30cm、覆土は黒褐色土である。遺物はない。

AW（11）93（第6図） C14グリッドに位置し、平面形が不整形を呈する。径62×42cm、深度28cmで覆土は黒褐色土である。須恵器甕（11）が出土した。

c）溝

ここでは、畝溝群や道路状遺構に関係するもの以外を取り上げる。

AW（11）16（第9図） A15～B17グリッドにかけて検出された、南東から北西に向かって伸びる全長27.2mの溝である。幅30～50cm、深度10～20cmで、覆土は黒褐色土である。AW（11）16と並行する溝・柵列は検出されていない。遺物はない。

d）その他の遺構

柵列AW（11）71（84～86含む）（第6図） A～C11グリッドに、約10m、幅1.5mにわたって検出された列状のピット群である。第10次調査区において東端が検出されていたものである。平面形が略円形を呈するものが多く、その径は20～50cm、深度20～34cmを測る。覆土は黒褐色土と灰黄褐色土。柱痕跡が確認できたピットは無かった。出土遺物は須恵器有台杯（9）と、AW（11）85から須恵器瓶類（10）が出土している。なお、この柵列は傾きがN－82°－Eであり、後述するAW（11）129と傾きが類似することから、これを意識して作られている可能性が高い。

道路状遺構AW（11）129（第9図） AW（11）21・22を両側溝とし、南西から北東に向かってのびる道路状遺構である。AW（11）22は第10次調査区で確認されたAW（10）22の西側部分である。AW（11）

21はA16～B17グリッドに位置し、全長4.5m、幅3mである。南に向かって湾曲し、終息しており、いずれの溝とも連結しない。幅24～80cm、深度9～10cmを測る。覆土は黒褐色土をベースとし、下層に礫が多量に混入する。遺物はない。AW（11）22は全長25mのA16グリッドから第10次調査区E15グリッドに向かって伸びる溝である。幅40～100cm、深度9～37cmを測る。覆土は灰黄褐色土をベースに、地山土ブロックが若干混入する。縄文時代の打製石斧（13）が出土している。AW129の傾きはN－80°－Eであり、AW（11）71と類似する。

畝溝群AW（11）17・113・115～118ほか（第10・11図）　ここでは、一定の間隔・軸を有して展開する小溝状遺構が集中している箇所を畝溝群として取り上げる。この溝群は密度の差はあるが、調査区の西側ほぼ全域にわたって検出されており、古代の遺物が少ないながら確認されていることとその覆土から、古代として報告する。これらの溝の共通項として、①同一軸・間隔を有する②ほぼ直線を呈する③深度が浅いことが挙げられる。

畝溝群はその方向と溝間隔から４群に分けられ、北からA～D群と呼称する。なお、B・D群の一部は第10次調査区で検出されていたものであり、ここでまとめて検証する。A群はB8～10グリッドにかけて検出され、調査区内で最も溝間が狭いもので、遺構密度も大である。N－10°－Wの傾きをもち、溝間は10～70cmである。AW（11）115で須恵器有台杯（12）が出土した。B群はN－2°－W～N－15°－Eの傾きを持ち、溝間は80～140cmである。このB群のみ若干の屈曲を持つ。C群はN－5°－W～N－1°－Wの傾きを持ち、溝間は150～160cmである。D群はN－15°－Wの傾きを持ち、溝間は50～250cmである。B～D群では遺物は出土していない。これらの畝溝群は、B・C群がAW（11）73と重複せずに掘削されていることから、AW（11）73を意識したものと考えられる。

AW（13）自然河道（第10図）　A～C6・C7グリッドに位置する。検出した長さは16m、幅4.5～7m、深さ10～20cmを測り、覆土は暗褐色土である。この遺構は第10・11次調査区でも検出されているが、上面の遺構を検出するために掘削を行っていない。須恵器（14～18）打製石斧（19）を図示した。

(3)中世の遺構

a）竪穴状遺構・竪穴建物

ここでは、遺構内部に柱穴があるものを竪穴建物、ないものを竪穴状遺構とする。

AW（13）409（第13図）　J9グリッドに位置する。平面形は長方形を呈する。断面図からは東側で重複するAW（13）410より古い。規模は403×164cm、最深で64cmを測る。一度埋没したあとに一部が掘り返されている可能性がある。元祐通寶（20）が出土した。

AW（13）410（第13図）　J8グリッドに位置する。AW（13）409と重複しており、断面図からAW（13）410の方が新しい。AW（13）412との新旧は不明である。平面形はやや歪な方形を呈する。規模は380×340cm、深さ40cmを測る。壁の立ち上がりは比較的なだらかで、床面はほぼ平坦である。四隅のうち3箇所で柱穴と思われるピットを確認している。ピットは濁灰色強粘質土を主とする。大部分が埋没したあとに西側が掘り返されている。釘（21）石臼（22）石櫃？（23）を図示した。他に、珠洲甕・擂鉢砕片も出土している。

AW（14）164（第13図）　H12グリッドに位置する。平面図では東側をAW（15）2414に切られ、西側をAW（14）197に切られるように見える。規模は472×381以上cm、最深で39cmを測る。覆土は暗灰色土を主体とする。輸入青磁碗（24・25）を図示した。

b）土坑

AW（13）297（第14図）　J7グリッドに位置する。AW（15）2202と隣接し、AW（15）2214と重複するが、新旧は不明である。全体の規模は253×121cm、今次調査では253×72cmが検出された。深さは29cmを測る。覆土は黒灰色粘質土である。石製品（26・27）を図示した。中世土師器砕片も出土している。

AW（13）458（第15図） J9グリッドに位置し、北側が調査区外に伸びる。181以上×73cm、深度29cm。覆土は黄褐色粘質土に砂がわずかに混じる。瀬戸美濃瓶類（28）、珠洲片口鉢（29）を図示した。

AW（13）462（第21図） I9グリッドに位置する。134×102cm、深度56cm。覆土は暗褐灰色粘質土を主とする。平面図ではAW（13）459と重複するが、断面図では新旧を確認できない。輸入青磁碗（30・31）を図示した。

AW（13）656（第15図） I9グリッドに位置する。118×114cm、深度４cm。覆土は灰褐色土を主とする。中世土師器皿（32）が出土した。

AW（14）２（第15図） F14・15グリッドに位置する。338×219cm、深度31cm。覆土は黒色土を主とする。中世土師器皿砕片が出土した。

AW（14）202（第15図） G12グリッドに位置する。215×141cm、深度38cm。覆土は暗灰強粘質土。珠洲擂鉢砕片が出土している。

ｃ）溝

AW（13）231（第22図） Ｉ９グリッドに位置する。東側をAW（13）485と重複するが、新旧は不明。最長851cmで幅はほとんど変化せず約110cm、深度17cm。覆土は黒褐色粘土を主とする。15世紀の輸入白磁皿砕片が出土した。

ｄ）埋納遺構

AW（11）15（第15図） B17グリッドに位置する、平面形が略円形の土坑である。径36×24cm、深度26cmである。完形の中世土師器皿（35）が出土した。

(4)近世の遺構

ａ）掘立柱建物

AW（11）128（第17図） C13グリッドに位置する、２×２間の主屋の南側に庇と思われる１×１間が付属した総柱建物である。総平面積25.27㎡で、２×２間の部分は桁行5m×梁行4.52m、平面積22.6㎡、庇は桁行2.3m×梁行1.16m、平面積2.67㎡を測る。建物主軸方位はＮ－6°－Ｅである。建物を構成するピットの平面形は、略円形か不整形を呈する。径28～58cm、深度25～40cm、ピットの覆土は黒褐色粘質土ないし灰黄褐色粘質土である。周囲にピットが多く検出されていることから、建て替えがなされた可能性も否定できない。遺物は、AW（11）69から近世土師器皿（36）が出土している。この掘立柱建物は、近世の建物としては調査区内で唯一検出された。後述する溝AW（11）24・25・75は、この建物を避けるように屈曲・分岐・合流している。

ｂ）竪穴状遺構

ここでは、石列ないし石積をもつ大型の土坑を主として、それに準じる大きさの土坑を竪穴状遺構と呼称する。石列をもつ中世末の竪穴状遺構は長池キタノハシ遺跡［野々市町教委2000b］等で検出され、このような形態のものが中世からあったことが分かっているが、当調査区では遺構から出土する遺物が近世のものが多いことや覆土・周辺遺構との切り合いなどから当該時期とした。いずれの遺構も内部に焼土の記録はない。なおこの遺構については第４章で詳述する。

AW（13）32（第18図） G10グリッドに位置し、東側をAW（13）41と重複するが断面図がないため新旧は不明である。規模は310以上×182cm、深度78cm。覆土は褐灰色土を主とする。肥前陶器碗（37）甕（38）擂鉢（39）、釘（40）を図示した。これ以外に、肥前陶器碗（陶胎染付）片も出土している。

AW（13）40（第18図） G9グリッドに位置する。遺構の規模は390×258cm、深度29cm。灰色強粘質土と、礫の多い暗褐色粘質土を主とする。北東隅以外はほぼ外周に石列Ａ～Ｄを伴う。南辺の石列Ｄは列が若干崩れているが、石列Ａ～Ｃは楕円形の石の短辺を内部にむけてそろえる。石列Ａは全長204cm、石列Ｂは全長144cm、石列Ｃは全長124cm、石列Ｄは全長268cmである。それぞれ２～３段が遺構の壁面に

沿って積まれている。裏込の状況は断ち割っていないので不明である。中世土師器皿（41）、瀬戸美濃天目碗（42）を図示した。肥前陶器皿砕片も出土している。

AW（13）42（第18図） G10グリッドに位置する。北側でAW（13）32・41、西側でAW（13）35と重複する。断面図からAW（13）41より古い。東南隅に石列Ｅが確認された。石列Ｅの全長は68cmである。遺構全体の規模は434×251cm以上、深度15cm。覆土は明褐灰色土を主とする。瀬戸美濃天目碗（44）肥前陶器皿（45）・擂鉢（46）のほか中世土師器皿（43）を図示した。

AW（13）43（第18図） H10グリッドに位置する。南側の立ち上がりは不明である。西南隅に石列Ｆが確認された。石列Ｆの全長は72cmである。遺構全体の規模は310以上×194cm、深度６cm。覆土は暗褐灰色土を主とする。肥前磁器碗（47）・陶器碗（48）を図示した。

なお、石列Ｅ・Ｆについては、石の並べ方として正面が向かい合っているように見えることから、それぞれの遺構に伴う石列と判断した。しかし、断面図ｈラインに切りあいがみられず、現地調査の段階で見落としがあることは残念である。

AW（13）93（第19・20図） H10グリッドに位置する。北側のAW（13）669、南側のAW（13）95との切り合いは不明である。東・南辺に石列Ａ～Ｄを伴い、調査区内では南のAW（13）95と並んで最も幅の広い石列が見られる。石列は他遺構と同様に楕円形の石の短軸をそろえて正面を作っている。東～南辺ではその面がＡ～Ｃの３ライン見られ、後述するAW（13）95の東側石列ラインとほぼ揃う。また、西側で遺構平面が漏斗状にすぼむ部分に石列Ｄが見られるが、こちらは東辺と異なり１ラインのみである。石列Ａ・Ｃはこの石列Ｄを越えて西に伸びているが、後述するAW（13）96の石列Ｅの長さとほぼ同じところで止まり、石列Ｃは北側に折り返しているように見えることから、石列Ｄ西側の掘り込みも同一遺構であるとも考えられる。石列内部の規模は274×256cm、深度41cm。覆土は礫の混じる暗灰色粘質土を主とする。肥前陶器碗（50～53）のほか、中世土師器皿（49）も出土した。

AW（13）95・96（第19・20図） H10グリッドに位置する。前述のAW（13）93と類似した石列を伴う遺構だが、AW（13）93と異なり、四方に石列Ｅ～Ｈが確認できる。東辺はＥ～Ｇラインの３列が見られるが、北・東・南辺はもっとも内側のＥラインのみめぐる。ＨラインはAW（13）96との境に存在する。AW（13）95とAW（13）96間の石列Ｅ・Ｈが途切れて見えるのは調査によるトレンチのためである。断面図ではAW（13）95とAW（13）96の境の線はほぼ垂直に立ち上がるため時期差がない可能性がある。AW（13）95の石列内部の規模は495×273cm、深度45cm、覆土は灰色粘土を主とする。輸入青花皿（55）・碗（56）のほか打製石斧（54）を図示した。ほかに炉縁石片が出土している。

AW（13）96の石列は東辺と北辺のみに確認された。北辺の石列は石列Ｅのつづきで、東辺の石列は石列Ｈである。AW（13）96の遺構の規模は208×188cm、深度44cm。覆土は黒色土を主とする。砥石（57）を図示した。

なお、AW（13）95の南側には深度47cmとかなり深い台形状の遺構が接続するが、その南辺にも石列Ｉが見られる。断面図からはこの部分はAW（13）96の一部を掘り返して作られたものに見える。

AW（13）211・212（第21図） I10グリッドに位置する。両者の切り合いは不明である。遺構の北辺に石列Ａ、遺構の中央付近に石列Ｂがある。全体の規模は256×224cm、深度は石列Ａ・Ｂに挟まれた部分が45cmで、その東側が17cmである。石列はそれぞれ１列で、楕円形の短軸をそろえて正面をつくっている。石列Ａの全長は148cm、石列Ｂは72cm。覆土は褐灰強粘質土と黒灰色粘質土である。縄文土器と近世土師器砕片が出土している。遺構形状は非常に小さいが、石列を伴うためここで記述する。

AW（13）380（第21図） J8グリッドに位置し、東側が調査区外に伸びる。規模は322×283cm以上、深度43cm。検出時は礫が床面に敷き並べたような状況であったが、図面がないため詳細は不明である。覆土は褐灰色土を主とする。越中瀬戸向付（58）、石臼（59）を図示した。

AW（13）459（第21図） J9グリッドに位置する。隣接する第15次調査のAW（15）2149と同一遺構で

ある。第15次調査報告書では中世と報告されているが、当調査区で肥前陶器碗が出土しているため近世と判断した。平面形は方形で、全体の規模は963×565cm、深度33cmである。そのうち今次調査で検出した規模は549×497cmである。上層は大小礫の含む暗褐灰色強粘質土で、下層が灰色強粘質土である。中世土師器皿（60）珠洲擂鉢（61）を図示した。前述のとおり、肥前陶器碗砕片が出土している。

AW（13）609（第22図） I～J10グリッドに位置する。北・東辺に石列Ａ・Ｂを伴う。石列Ａの全長は201cm、石列Ｂの全長は178cmである。石列Ｂでは一部石列が途切れる部分が見られる。この石列Ｂを境に東側にも若干浅い遺構があるが、石列Ａはこの遺構によるラインのずれなど見られないため、この浅い部分も同一の遺構と考えられる。全体の規模は282×278cm、深度41cm。覆土は礫を含む灰色粘質土を主とする。どちらも遺構壁に積まれたものではなく、遺構上面に並べられている。中世土師器皿（65～67）輸入青花皿（68）出土。このほかに肥前磁器碗・京焼系碗の砕片がある。

AW（13）南側土坑群Ａ～Ｃ（第23図） J9グリッドに位置する。遺構番号がないため報告にあたってこのような名称とした。いずれも南側が調査区外に伸びる。それぞれの規模は、土坑Ａが291以上×175cm以上、深度76cm。覆土は黒褐色粘質土を主とする。土坑Ｂは420以上×178cm以上、深度は最深で84cm。覆土は暗灰色強粘質土を主とする。土坑Ｃは351以上×154cm以上、深度は最深で33cm。覆土は褐灰色強粘質土に礫が多い。土坑Ｃは第15次調査区のAW（15）2421・2437に続く遺構である。これらには石列はないが、石列をもつ遺構と同じような規模であることから、ここに報告する。

AW（14）61（第27図） J12グリッドに位置する。遺構の西側の石列は南北方向石列Ａと東西方向石列Ｂがあり、石列Ａの全長は236cm、石列Ｂが全長64cmである。遺構の規模は355×311cm、深度35～42cm。覆土は明褐灰砂質土と灰色粘土である。越中瀬戸皿・肥前陶器皿砕片などが出土している。

AW（14）82（第24図） I～J12～13グリッドに位置する。平面図ではAW（14）102より古いように見えるが、断面図はない。この遺構の西側には溝AW（14）99があり、AW（14）82の西側ラインがこれに沿うような平面形になっている。遺構内北側にＡ・Ｂ２列の石列があり、これらは直線状に並ばないため２つの遺構が重複している可能性もあるが、断面図がないので不明である。石列Ａの全長は132cm、石列Ｂの全長は188cmで、両者は218cmほど離れている。遺構の規模は785×671cm、深度16～28cm。肥前磁器碗（70）のほか、中世土師器皿（69）輸入青磁盤（71）瀬戸美濃壺（72）を図示した。

AW（14）103（第24図） I13～14グリッドに位置する。AW（15）2006と同一遺構で、東側が第15次調査の遺構と重複する。規模は755×395cm以上、深度12～22cm。輸入白磁皿（73）を図示した。他に越中瀬戸皿・肥前磁器碗砕片が出土している。

AW（14）105（第24図） I13～14グリッドに位置する。平面図ではAW（14）103より古いように見えるが断面図が残されていないため不明である。南の立ち上がりが平面図では不明で、規模は東西341cm以上、深度２～19cm。遺物はないが、遺構の西側ラインが溝AW（14）99に規制されていることや、前述のAW（14）82と同じように溝AW（14）99の西側に並ぶことから近世とした。

AW（14）163（第25・26図） H12グリッドに位置する。規模は251×210cm、深度31cm。覆土は黒褐色粘質土を主とする。中世土師器皿（74）炉縁石（75・76）を図示した。近世の遺物は出土していないが、覆土等から近世と判断した。隣接するAW（14）167と一体の遺構である可能性もある。

AW（14）167（第25・26図） G～H12～13グリッドに位置する。遺構の南側の立ち上がりが不明で、東側をAW（14）155、西をAW（14）194と重複している。確認されている部分の規模は608以上×241cm以上、深度31cm。覆土は黒色粘質土を主とする。肥前陶器碗（77）砥石（78）を図示した。輸入青磁碗・京焼系陶器碗砕片も出土している。

AW（14）168（第25図） G12グリッドに位置する。AW（14）271との新旧は断面図がないため不明である。遺構の規模は332×191cm、深度46cm。覆土は灰色粘質土を主とする。銭貨（79・80）板状木製品（81）を図示した。肥前陶器（陶胎染付）碗・磁器碗砕片も出土している。

AW（14）191（第25・26図） G13～14グリッドに位置する。平面図上はAW（14）193より新しく、北側で重複するAW（14）240より古いように見えるが断面図はない。規模は156以上×118cm、深度15cm。覆土は褐灰色粘質土を主とする。遺物はないが、覆土や周辺の状況から近世と判断した。

AW（14）193（第25・26図） G13～14グリッドに位置する。断面図では北側で重複するAW（14）240・244より古い。規模は681以上×530cm以上、深度28～47cm。覆土は濁褐灰色粘質土を主とする。肥前陶器皿（82）を図示した。輸入青花皿砕片も出土している。

AW（14）194（第25・26図） G～H13グリッドに位置する。東側の石列Ａと南側の石列Ｂがあり、石列ＡはAW（14）195の上まで伸びている。これは、断面図からもAW（14）194がAW（14）195を切っており、石列はAW（14）194に伴って配されたことが分かる。石列Ａは全長256cm、石列Ｂは全長188cm。遺構の規模は278×216cm、深度23～38cm。覆土は白灰強粘質土を主とする。肥前磁器碗（84・85）肥前陶器皿（86）産地不明陶器灯火具（87）人形（88・89）のほか、中世土師器（83）古代の瓦塔（90）を図示した。他にも肥前磁器皿砕片などが出土している。

AW（14）195（第25・26図） G13グリッドに位置する。南側をAW（14）196に切られているように見えるが、断面図からは一体の遺構の可能性がある。204以上×145cm以上、深度11～24cm。覆土は褐灰強粘質土を主とする。肥前磁器皿（91）を図示した。

AW（14）196（第25・26図） G～H13グリッドに位置する。断面図から、南側で重複するAW（14）240より古い。631以上×154cm以上、深度７～18cm。覆土は灰色粘質土を主とする。輸入白磁小杯（92）肥前磁器皿（93）を図示した。他に越前甕・肥前陶器鉢砕片が出土している。

AW（14）223（第27図） F12～13グリッドに位置する。北側がAW（14）224に切られているように見えるが、断面図ではAW（14）223が新しい。断面図上には石列もあるが平面図には残っていないため詳細は不明である。遺構の規模は385以上×373cm以上、深度43～55cm。覆土は褐灰色強粘質土を主とする。肥前磁器皿（94）近世土師器皿（95）を図示した。他に肥前磁器碗砕片が出土している。

AW（14）224（第27図） F12グリッドに位置する。断面図から、南側で重複するAW（14）223より古い。遺構の規模は179×158cm、深度33cm。覆土は黄灰色粘質土を主とする。肥前擂鉢・肥前陶器鉢砕片が出土した。

AW（14）234（第25・26・28図） G12グリッドに位置する。断面図からはAW（14）235より新しい。規模は133以上×128cm以上、深度24cm。覆土は黄灰色粘質土を主とする。越前甕砕片が出土した。

AW（14）235（第25・26・28図） G12グリッドに位置する。北東隅をAW（14）257に切られるように見えるが、新旧は不明。断面図ではAW（14）234より古い土坑である。344以上×321cm以上、深度13～26cm。覆土は黒褐強粘質土を主とする。肥前擂鉢砕片等が出土した。

AW（14）240（第25・26図） G～H13グリッドに位置する。断面図からはAW（14）244・193より新しい。北側に石列をもつ。石列は270cmで、遺構の規模は426×419cm、深度66～78cm。覆土は礫の多い濁灰色粘質土を主とする。下層の黒色粘土は床面の可能性が考えられる。石鉢（96）五輪塔（97）炉縁石（98）を図示した。肥前陶器甕砕片も出土した。

AW（14）253（第28図） G13グリッドに位置する。北側でAW（14）254と、東側でAW（14）264・266と重複するが新旧はすべて不明である。規模は384以上×372cm以上、深度40～51cm。覆土は灰色粘質土を主とする。瀬戸美濃天目碗砕片が出土した。

AW（14）254（第28図） G12～13グリッドに位置する。平面図上ではAW（14）225・261・253・266と重複しているが、断面図は残っていない。遺構の規模は352×241cm以上、深度21～26cm。覆土は暗灰粘質土を主とする。須恵器瓶類砕片が出土しているが、覆土等の状況から近世と判断した。

ｃ）整地層

第13次調査区のI8～9グリッドにかけて、石列をともなう浅い方形土坑AW（13）506～509が確認さ

れた。これらは全体に整地層があり、他の石列を伴う土坑よりも浅いことや各遺構の平面形が類似すること、また、いずれも底面の高さがほとんど変わらず平坦であることなどから、ここでまとめて報告したい。遺構確認時の写真にはAW（13）509南辺などに東西方向の石列も見られるが、図面等の記録はなく詳細は不明である。いずれも内部に焼土の記録はない。これらについては第４章で詳述する。

AW（13）506（第29・30図）　I9グリッドに位置する。規模は494×436cm、深度11cm。覆土は礫交じりの暗褐色土で、断面図からは中央石列Ｂが伴うことが分かる。南側の浅い遺構との新旧は不明である。近世土師器皿（99）瀬戸美濃皿（100）のほか石臼（101・102）行火（103）石鉢（104）を図示した。

AW（13）507（第29･30図）　I8グリッドに位置する。断面図では東側で重複するAW（13）509より古い。遺構の規模は382×322cm以上、深度16cm。覆土は若干砂質をおびた褐色粘質土を主とする。図示していないが肥前陶器碗砕片が出土した。なお、この遺構の北側に最大336×164cm、深度17cmの方形に近い土坑が見られる。AW（13）507と深度もあまり変わらないことと、AW（13）506・508の南側に付属する土坑と類似した規模であることから、一体で作られた遺構の可能性がある。

AW（13）508・662（第29・30図）　I～J9グリッドに位置する。両者をあわせた遺構の規模は582×386cm、深度28cm。覆土は暗灰褐色粘質土を主とする。瀬戸美濃陶器碗（106）のほか中世土師器皿（105）輸入白磁皿（107）を図示した。近世瀬戸陶器碗砕片も出土している。

AW（13）509（第29・30図）　I～J8グリッドに位置する。断面図からはAW（13）509に伴う中央石列Ａを設置するためにAW（13）507を切りこんでいる。規模は442×347cm、深度26cm。覆土は礫混じりの褐灰色粘質土を主とし、砂質のある白灰色粘土が部分的に見られる。肥前陶器碗（108）ほか、瀬戸美濃折縁皿（109）越前甕（110）行火（111）を図示した。輸入青磁碗・瀬戸美濃天目砕片も出土した。

ｄ）土坑

AW（11）94（第31図）　C13グリッドに位置する。東側でAW（11）25と重複しており、本来の形状・規模は不明。規模は296×184cm、深度2～12cmを測り、近世土師器皿・肥前磁器砕片が出土している。

AW（11）120（第31図）　D9グリッドに位置し、規模は216×145cm、深度30～55cmを測る。肥前陶器碗（113・114）産地不明磁器香炉（112）越中瀬戸擂鉢（115）が出土した。

AW（11）121（第31図）　C10グリッドに位置し、規模は250×216cm、深度47cmを測り、覆土は褐灰色粘質土を主とする。肥前磁器碗（116・117）肥前陶器碗（118）越中瀬戸擂鉢（119）を図示した。

AW（13）33（第31図）　G9グリッドに位置する。326×206cm、深度53cm。覆土は黒褐色土を主とする。肥前磁器皿（120）を図示した。肥前陶器碗砕片も出土している。

AW（13）35（第18図）　G10グリッドに位置する。東側でAW（13）42と重複するが新旧は不明である。規模は223×194cm、深度62cm。覆土は暗褐灰色土を主とする。遺物は出土していないが、覆土から近世と判断した。

AW（13）41（第18図）　G10グリッドに位置する。内部に板状木製品をともなう。断面図からは南側で重複するAW（13）42より新しいことが分かるが、西側で重複するAW（13）32との新旧は不明である。規模は215×122cm、深度95cm。覆土は明灰色粘土を主とする。板状木製品（123～125）のほか、唐津？陶器碗（121）刀子？（122）を図示した。肥前磁器碗砕片も出土した。

AW（13）45（第32図）　G10グリッドに位置する。規模は278×170cm、深度70cm。覆土は褐灰色強粘質土を主とする。肥前磁器皿（126）陶器碗（127･128）陶器皿（129）越中瀬戸陶器皿（130）を図示した。肥前磁器碗（コンニャク印判）砕片も出土している。

AW（13）45b（第32図）　G10グリッドに位置し、西側が調査区外に伸びる。規模は198×150cm以上、深度54cm。覆土は礫まじりの褐灰色粘質土を主とする。遺物は出土していないが、覆土等から近世と判断した。

AW（13）47b（第32図）　G10グリッドに位置する。断面図からは西側で重複するAW（13）48より古い。

遺構の規模は258以上×198cm、深度９cm。覆土は礫の多い褐灰色強粘質土を主とする。肥前陶器皿(131)を図示した。

AW（13）48（第32図） G10グリッドに位置する。断面図からは北側のAW（13）47、東側で重複するAW（13）47bより新しい。規模は254×215cm、深度73cm。覆土は非常に細かく分層され、全体に粘質が強い。上層で白灰色粘砂質土、下層で黄灰色粘土を主とする。肥前陶器皿（132・133）甕（134）、土鈴（135）を図示した。

AW（13）70（第31図） G～H７グリッドに位置する。遺構の規模は414×250cm、深度22cm。覆土は褐灰色土を主とする。肥前陶器甕（138）を図示した。ほかに肥前磁器碗・皿砕片が出土している。

AW（13）71（第31図） H７グリッドに位置する。平面図では東側をAW（13）66に切られるように見えるが、断面図はなく不明である。規模は490×278cm以上、深度15cm。覆土は褐灰色土を主とする。近世土師器皿（137）肥前陶器皿（138・139）炉縁石（140）を図示した。

AW（13）73（第32図） G～H７～８グリッドに位置する。中ほどで屈曲することから、ふたつの方形土坑が重複している可能性もあるが、断面図がないため詳細は不明である。全体の規模は491×337cm、深度26cm。覆土は黒褐色粘質土を主とする。鉄塊（141）を図示した。他に遺物は出土していない。

AW（13）79（第33図） H～I７グリッドに位置する。規模は239×150cm、深度59cm。覆土は上層に褐灰色粘質土、下層が灰色粘土を主としている。肥前陶器碗（142）瀬戸美濃天目碗（143）を図示した。

AW（13）83（第33図） H8グリッドに位置する。西側をAW（13）66に接する。規模は105×94cm、深度２cm。覆土は濁灰色粘土に炭化物と焼土が多量に混入している。木質が多数出土した。他に遺物はないが、覆土等から近世と判断した。

AW（13）121a（第33図） J6～7グリッドに位置する。断面図からは南側のAW（13）121bより新しい。遺構の規模は186×170cm、深度111cm。北側にピット状の掘り込み（第１・２層）が見られる。覆土は褐灰色・灰褐色粘質土を主とし、下層に青灰色粘土が確認される。瀬戸美濃天目碗（144）肥前陶器皿（145）ほか、鉄釘（146・147）を図示した。ほかに輸入青花皿・肥前陶器（陶胎染付）碗砕片が出土している。なお、深度100cmを超える遺構はこのAW（13）121a～c周辺に多い。

AW（13）121b（第33図） I～J7グリッドに位置する。北側のAW（13）121aより古い。規模は226以上×158cm、深度103cm。覆土は黒灰色粘土を主とし、下層に礫が混じる。検出写真では遺構上面で石列が確認できるが、平面・断面図ともに記載はなく、全長や積み方は不明である。肥前陶器皿（148）のみ出土した。

AW（13）121c（第33図） I～J7グリッドに位置する。規模は266×202cm、深度75cm。覆土は礫が多く混じる青灰色粘土を主とする。輸入白磁皿（149）肥前磁器皿（150・151）磁器人形（152）肥前陶器皿（153）越前？陶器甕（154）を図示した。他に肥前陶器（陶胎染付）碗砕片が出土している。

AW（13）139a（第34図） I7グリッドに位置する。平面図上では東側のAW（13）139bより新しいように見えるが、断面図上では切りあいはない。遺構の規模は178×178cm、深度27cm。覆土は褐灰色粘質土を主とし、下層に濁灰色砂質土が見られる。肥前磁器碗（155）を図示した。

AW（13）139b（第34図） I7グリッドに位置する。規模は284×134cm、深度28cm。覆土は褐灰色粘質土を主とする。肥前磁器碗・陶器（陶胎染付）碗・京焼系碗砕片が出土している。

AW（13）155（第34図） I8グリッドに位置する。規模は228×236cm、深度145cm。覆土は灰褐色土を主とする。珠洲擂鉢（156）を図示したが、肥前陶器皿砕片も出土している。

AW（13）189（第29・30図） I８グリッドに位置し、溝AW（13）159と重複し、これより古い。182×131cm以上、深度57cm。礫の混じる黒褐色粘質土を主とする。肥前磁器碗・越中瀬戸皿砕片が出土した。

AW（13）210（第34図） I10グリッドに位置する。遺構の規模は254×150cm、深度18cm。覆土は灰褐

色粘質土を主とする。瀬戸美濃天目碗（157）を図示した。

AW（13）235（第34図）　I10グリッドに位置する。南側でAW（13）238と重複するが、新旧は不明である。126×124cm以上、深度21cm。覆土は褐灰色粘質土を主とする。完掘写真では東側肩部に石列が確認できるが、記録がないため詳細は不明である。越前甕砕片が出土した。

AW（13）238（第34図）　I10グリッドに位置する。規模は162×155cm、深度44cm。覆土は灰色粘質土と白灰砂質土が見られる。肥前陶器皿（158）を図示した。

AW（13）239（第35図）　I10～11グリッドに位置する。平面図上は南側のAW（13）641との切り合いはないように見えるが、断面図上ではAW（13）641に切られている。遺構の規模は158以上×146cm、深度71cm。覆土は褐灰色粘質土を主とし、下層に砂質が強い青灰色土が見られる。中ほどの層から網代状の木製品が出土した。他に肥前磁器碗砕片が出土している。

AW（13）251（第22図）　I10グリッドに位置する。南側のAW（13）252との新旧は断面図がないため不明である。234×142cm以上、深度55cm。覆土は若干砂質を帯びた灰褐色粘質土を主とする。砥石（159）石臼（160）縁石（161）を図示した。覆土等から近世とした。

AW（13）252（第22図）　I10グリッドに位置する。断面図上では西側のAW（13）256より古い。170以上×122cm以上、深度86cm。覆土は大礫が多い灰褐色粘土を主とする。肥前擂鉢砕片が出土した。

AW（13）256（第22図）　I10グリッドに位置する。断面図上では東側のAW（13）252より新しい。規模は145×95cm、深度47cm。覆土は明灰褐色粘質土を主とする。遺物はないが、断面図上でAW（13）252より新しいので近世とした。

AW（13）268（第35図）　J7グリッドに位置する。342×266cm、深度170cm。覆土は全体に礫が混じる褐灰色粘質土を主とし下層に砂質がかった灰褐色土が入る。越前甕（162・163）五輪塔（164）石塔（165）石鉢（166）行火（167・168）を図示した。肥前陶器（陶胎染付）碗・京焼系碗片が出土した。

AW（13）272（第35図）　J7グリッドに位置する。平面図では西側のAW（13）271より古いように見えるが、断面図上では切り合いは確認できない。また、断面図上では東側のAW（13）281より新しい。遺構の規模は214×151cm以上、深度23cm。覆土は褐灰色粘質土を主とする。行火（169・170）を図示した。肥前磁器碗が出土したAW（13）281より新しいので近世とした。

AW（13）285（第35図）　J7グリッドに位置する。断面図上では西側のAW（13）281より新しいように見える。規模は172以上×132cm、深度26cm。覆土は暗褐色粘質土を黒褐色粘質土が見られる。遺物は出土していないが、肥前磁器碗が出土したAW（13）281より新しいので近世とした。

AW（13）294（第35図）　J7グリッドに位置する。規模は202×181cm、深度90cm。覆土は褐灰色粘質土を主とし、黒色土がマーブル状に混じる。下層から中世土師器皿（171～173）銭貨（174・175）を図示した。下層からは中世土師器のみ出土しているため、AW（13）294は中世の可能性もある。

AW（13）295（第35図）　J7グリッドに位置する。186×185cm、深度173cm。覆土は褐灰色粘質土を主とし、部分的に黄色砂質土が混じる。下層には大きめの礫が入る。肥前磁器皿（176）肥前陶器皿（177）五輪塔（178）石臼（179）を図示した。これ以外にも輸入青花皿・肥前磁器碗砕片が出土している。

AW（13）303a（第36図）　J7グリッドに位置する。断面図からは南側のAW（13）303bより新しい。東側のAW（13）298との新旧は断面図がないため不明である。248×161cm以上、深度35cm。覆土は褐灰色粘質土を主とする。肥前陶器碗（180・181）を図示した。他には縄文土器が出土している。

AW（13）303b（第36図）　J7グリッドに位置する。断面図からは北側のAW（13）303aより古く、東側のAW（13）303cとの新旧は不明である。161以上×75cm以上、深度23cm。覆土はやや砂質の褐灰色粘質土を主とする。遺物はない。

AW（13）303c（第36図）　J7グリッドに位置する。第15次調査区のAW（15）2202と重複するが、新旧は不明。規模は157以上×95cm、深度14cm。覆土は褐灰色粘質土を主とする。肥前陶器碗（182）瀬

戸美濃皿（183）肥前陶器皿（184）瀬戸美濃卸皿（185）を図示した。越中瀬戸皿砕片も出土している。

AW（13）308（第36図） J7～8グリッドに位置する。遺構の規模は265×206cm、深度183cm。覆土は上面にピット状の落ち込みが見られる。第25層以下の礫が混じる層が堆積したのち掘り返し、第10～24層の白灰色粘質土と黄色砂質土が互層状に堆積している。越中瀬戸碗（186）を図示した。他に輸入青花碗・肥前磁器碗（コンニャク印判）砕片が出土している。

AW（13）327（第36図） J7～8グリッドに位置する。断面図上ではピット状の掘り込みより古いが、東側で重複するAW（13）308との新旧は不明である。282×134cm、深度27cm。覆土は褐灰色粘質土を主とする。肥前陶器擂鉢（187）を図示した。他にも肥前陶器皿・京焼系碗砕片が出土している。

AW（13）372（第36図） J8グリッドに位置する。規模は150×83cm、深度15cm。覆土は灰色粘質土を主とする。肥前磁器皿（188）を図示した。他に越前甕砕片も出土している。

AW（13）402（第36図） J8グリッドに位置する。206×134cm、深度７cm。覆土は褐灰色粘質土を主とする。炉縁石（189・190）を図示した。土器は出土していないが、覆土等の状況から近世とした。

AW（13）415（第29図） J8グリッドに位置し、規模は166×106cm、深度13cmを測る。覆土は灰褐色土である。須恵器・中世土師器砕片が出土したのみであるが、覆土等から近世と判断した。

AW（13）464（第36図） I～J9グリッドに位置する。遺構の規模は170×133cm、深度25cm。覆土は褐灰色粘質土を主とする。肥前陶器皿（191）炉縁石（192）を図示した。他に肥前甕片も出土している。

AW（13）607（第22図） J10グリッドに位置する。南側のAW（13）608・北側のAW（13）570より断面図上では古い。灰色粘質土を主とし、上層には黒色土がブロック状に入る。下層は若干砂質を帯びる。171×146cm、深度102cm。越前甕（193）を図示した。

AW（13）641（第35図） I10～11グリッドに位置する。遺構の規模は250×166cm、深度59cm。覆土は若干砂質を帯びた明灰色粘質土を主とする。遺物は出土していないが、断面図上では肥前磁器碗が出土したAW（13）239より新しいことから近世と判断した。

AW（14）35（第37図） G14グリッドに位置する。遺構の規模は191×181cm、深度52cm。覆土は明褐色粘質土を主とする。棒状鉄製品（194）を図示した。肥前磁器皿砕片も出土している。

AW（14）46（第37図） G～H14グリッドに位置する。北側が調査区外に伸びる。遺構の規模は266×181cm以上、深度37～62cm。覆土は灰色粘質土を主とする。輸入白磁皿（195）を図示した。

AW（14）53（第37図） H14グリッドに位置する。遺構の規模は258×161cm、深度82cm。覆土は木質を多くふくむ暗灰色粘質土を主とし、下層に灰色粘土が入る。肥前陶器皿（196）擂鉢（197）石製火鉢（198）を図示した。肥前陶器碗・京焼系陶器碗砕片も出土した。

AW（14）79（第37図） I12グリッドに位置する。規模は128×91cm、深度54cm。覆土は暗褐色強粘質土を主とする。近世土師器皿（199）肥前陶器皿（200・201）鉄釘（202）砥石（203）を図示した。他に越前甕砕片も出土している。

AW（14）83（第37図） I12グリッドに位置する。平面図からはAW（14）91a・bやAW（14）99より古いように見えるが、断面図がないため詳細は不明である。規模は208以上×104cm、深度32cm。覆土は暗灰色粘質土を主とする。肥前磁器皿・陶器碗砕片のほか、碗状に丸く固まった漆塊が出土している。

AW（14）91a（第37図） I12グリッドに位置する。平面図からは西側で重複するAW（14）91bより新しいように見えるが、断面図がないため詳細は不明である。211×103cm、深度47cm。覆土は灰色粘質土を主とする。肥前陶器碗（204）を図示した。

AW（14）91b（第37図） I12グリッドに位置する。規模は218×141cm以上、深度10cm。覆土は白灰色粘質土を主とする。肥前磁器碗（206）陶器碗（207）のほか、中世土師器皿（205）を図示した。他に打製石斧片が出土している。

AW（14）110（第37図） I13～14グリッドに位置する。遺構の規模は368×241cm、深度31cm。肥前磁

器碗（209・210）のほか、中世土師器皿（208）を図示した。

AW（14）136（第37図） H13グリッドに位置する。181×151cm、深度42cm。断面図上ではAW（14）137より新しい。覆土は上層が褐灰色粘質土、下層が灰色粘土である。肥前陶器皿砕片が出土している。

AW（14）137（第37図） H～I13グリッドに位置する。断面図ではAW（14）136より古い。規模は185×121cm以上、深度34cm。覆土は灰色強粘質土を主とする。肥前磁器皿砕片が出土している。

AW（14）140（第38図） H～I12～13グリッドに位置する。石列をもつAW（14）240と規模が類似することから、竪穴状遺構の可能性がある。規模は335×331cm、深度42cm。覆土は礫の混じる明灰色粘土である。肥前陶器碗（211）砥石（212）炉縁石（213）を図示した。肥前磁器皿砕片も出土している。

AW（14）149（第38図） H～I12グリッドに位置する。規模は238×181cm、深度59cm。覆土は礫の入る灰褐色粘質土を主とする。肥前擂鉢・輸入青磁碗砕片が出土した。

AW（14）152（第38図） H12グリッドに位置する。断面図では北側で重複するAW（14）159より古い。規模は248×207cm以上、深度55cm。覆土は褐灰色粘質土を主とする。炉縁石（214）砥石（215）茶臼（216）五輪塔（217）を図示した。肥前磁器皿・陶器皿砕片も出土している。

AW（14）155（第25・26図） H12～13グリッドに位置する。平面図・断面図ともふたつの土坑が重複しており、東側が新しい。東西452cm、南北238cm、深度は西側が50cm、東側が44cm。覆土は褐灰色粘質土を主とする。肥前陶器碗（218）京・信楽系陶器碗（219）越前陶器甕（220）土錘（221）人形（222）板状木製品（223）を図示した。

AW（14）159（第38図） H12グリッドに位置する。断面図では北側を他遺構に切られ、またAW（14）152より新しい。151×133cm、深度35cm。覆土は褐灰色粘質土。肥前陶器皿（224）を図示した。

AW（14）197（第13図） H12グリッドに位置する。平面図では中世としたAW（14）164より新しいように見えるが詳細は不明である。91×71cm、深度54cm。覆土は暗灰色粘質土を主とする。中世土師器皿（225）瀬戸美濃陶器碗（227）砥石（229）を図示した。

AW（14）200（第28図） G12グリッドに位置する。平面図上ではAW（14）168・199と重複しているように見えるが断面図がないため新旧はわからない。125以上×103cm以上、深度42cm。覆土は暗灰色強粘質土を主とする。肥前陶器碗（228）を図示した。

AW（14）203（第38図） G12グリッドに位置する。158×139cm、深度69cm。覆土は白灰色粘質土を主とする。肥前陶器皿（229）を図示した。

AW（14）216（第39図） F13グリッドに位置する。平面図では南側をAW（14）214と重複しているが断面図がないので新旧は不明。268以上×221cm以上、深度59～88cm。覆土は暗褐色粘質土を主とする。中世土師器皿（230）を図示した。遺物はこの中世土師器だけだが、覆土等から近世と判断した。

AW（14）219（第39図） F13グリッドに位置する。規模は304×222cm、深度８～13cm。覆土は暗褐色粘質土を主とする。肥前陶器碗（232）のほか、中世土師器皿（231）を図示した。

AW（14）222（第39図） F～G12～13グリッドに位置する。遺構の規模は198×121cm、深度88cm。覆土は黒褐色粘土を主体とする。中世土師器皿（233）、輸入青磁碗（234）を図示した。

AW（14）236（第39図） F～G12グリッドに位置する。断面図からは２つの土坑が重複しているようにも見える。規模は291×151cm、深度55cm。覆土は上層が褐灰色土で、灰黄色砂質土を主とする。肥前磁器碗（236）のほか、中世土師器皿（235）を図示した。肥前陶器鉢砕片も出土している。

AW（14）252（第39図） F12グリッドに位置する。遺構の規模は158×106cm、深度29cm。覆土は褐灰色粘質土を主とする。肥前陶器皿（237）を図示した。他に肥前磁器皿砕片も出土している。

AW（14）260（第28図） G12グリッドに位置する。平面図では周囲の立ちあがりが不明瞭な部分があるが、遺構確認時の平面図とも照らし合わせ、図示した土坑状の部分をAW（14）260とする。規模は199×98cm、深度71cm。覆土は灰色粘質土を主とする。肥前陶器皿（238）越中瀬戸向付（239）擂鉢

転用の円盤状陶器（240）を図示した。他に肥前磁器碗・陶器鉢砕片も出土している。

AW（14）266（第28図） G13グリッドに位置する。平面図ではAW（14）253を切っているように見えるが詳細は不明である。198×115cm、深度81cm。中世土師器皿（241）刀子（242）を図示した。この土坑からは珠洲甕片や須恵器などが出土しているため、中世に属する可能性もある。

AW（14）269（第25図） G13グリッドに位置する。平面図ではAW（14）193を切るように見えるが、断面図がなく詳細は不明である。331以上×173cm以上、深度69cm。中世土師器皿（243）を図示した。これ以外には古代の土師器釜片が出土しているのみである。

AW（14）271（第28図） G12グリッドに位置する。AW（14）168・199・200と重複しているが断面図がなくそれぞれの新旧は不明である。421以上×301cm以上、深度32cm。輸入青磁碗（244）肥前陶器碗（245）砥石（246）を図示した。これ以外に肥前磁器碗砕片が出土している。

e）ピット

第13次調査区中央～南側と第14次調査区北側～中央にかけて非常に密集して点在する。建物を復元するには至らなかった。ここでは近世の遺物が出土したものを抜粋する。

AW(14)190(第25図) G13グリッドに位置する。28×25cm、深度５cm。覆土は褐灰色粘質土を主とする。肥前擂鉢（247）を図示した。

AW(14)229(第25図) G12グリッドに位置する。43×38cm、深度11cm。覆土は黒色粘質土を主とする。肥前擂鉢（248）を図示した。

f）溝

当該期は、AW（11）25・75・76・123・131のように大規模な溝が掘削された。これらの一部は近代初頭の耕地整理時にも確認できる。

AW(11)24(第40図) C14～16グリッドに位置する全長39mの溝で、第10次調査区で確認されたAW(10)24の続きである。C14グリッド、AW（11）128の南でAW（10）25より分岐してすぐ南に屈曲、C15グリッドで東に折れてE16グリッドで調査区外に出る。C15グリッドの屈曲点では、さらに南に伸びる溝が検出されているが、これはB16グリッド内で終息している。幅40～100cm、深度2～35cmを測る。覆土は褐灰色土を主とし、上層がより粘質が強い。礫は混入しない。出土遺物については第10次報告書に詳しい［野々市町教委2006］。肥前陶器・磁器碗が出土している。

AW（11）25（第40図） C13～14・D11～15・E15グリッドに位置する、全長53mの溝である。北調査区のAW（11）123と同一の遺構である。E15グリッド調査区壁からはじまり、C14グリッドまでやや北に振れながら直線に伸びたあとほぼ直角に屈曲、AW（11）24と合流する。その後は若干東に振れて直線に北上、C13グリッドでAW（11）75が分岐したのち、D11グリッドで調査区壁にぶつかる。幅150～240cm、深度34～48cmを測る。覆土は褐灰色土を主とし、上層により粘性の高く灰色味の強い土が検出された。この溝の覆土や掘削状況については、第10次調査区の報告書で述べた［野々市町教委2006］。多数の遺物のうち、珠洲擂鉢（249）、近世産地不明磁器碗（250）、肥前磁器皿（251）肥前陶器碗（252・253）皿（254・255）を図示した。

AW（11）75（第40図） C11～13グリッドで検出された、全長24.5mの溝である。北調査区のAW（11）131とは同一遺構である。C13グリッドでAW（10）25から二股に分岐した溝はC12グリッドで合流、そののちAW（11）25に並行して北上しC11グリッドで調査区壁にぶつかる。幅80～120cm、深度30～50cmを測り、覆土は灰褐色土を主とする。層序は第10次の発掘調査報告書に詳しい。遺物は多い。ここでは肥前陶器碗（257）皿（258～263）擂鉢（264～266）、須佐唐津擂鉢（267）のほか、輸入青磁碗（256）を図示した。17世紀前半の肥前陶器がまとまって出土したのが特徴である。

AW(11)76(第40図) C～D12・D11グリッドで検出された、全長11.1mの溝である。AW(11)25とAW(11)75の間に、それらと並行して検出され、同時期に掘削されたものであろう。ただし北調査区にその続き

は検出されていない。確認面では途中で浅くなり検出できなくなるが、C11グリッド調査区壁にはこの溝の延長線上に溝跡の痕跡が確認されており、これがAW（11）76と考えられる。幅30～70cm、深度30～50cmで覆土は明褐色土である。遺物はAW（11）25やAW（11）75に比較して少なめであるが、近世が多い。肥前磁器碗（269）、肥前陶器皿（271～273）、瀬戸美濃陶器碗（270）皿（274）のほか、輸入青磁碗（268）が出土している。

AW（11）123（第40図）　D９～10グリッドにかけて検出された溝で、AW（11）25の続きの遺構である。幅100～180cm、深度15～20cmで、覆土は褐灰色土を主とする。なお、北側にいくに従って若干浅くなるが、これは重機による表土除去の際に古代の確認面まで下げたためであり、実際は検出された地点より伸びていたと考えられる。遺物は非常に多く、遺構の北側と南側にそれぞれ遺物集中区が見られた。肥前磁器碗（275～278）皿（279～286）瓶類（287・288）、肥前陶器碗（289～295）皿（296～300）擂鉢（302～304）、京焼系陶器皿（300）行火（305）を図示した。

AW（11）131（第40図）　B～D10グリッドにかけて検出された、AW（11）75の延長と考えられる溝である。C11グリッド調査区壁から離れたのちすぐ西に屈曲して直進、B10グリッドに至って北に折れすぐ終息する。幅40～60cm、深度10cmを測り、覆土は灰褐色土を主とする。遺物はない。

AW（13）30（第41・42図）　G～I8～10グリッドに位置し、東・南側が調査区外に伸びる。確認できた最大長は37mで、幅は82～175cm、深度は17～65cmである。H8グリッドでAW（13）66と接続、H9グリッドでAW（13）30bと接続、H10グリッドでAW（13）207と接続、I11グリッドでAW（13）649と接続する。さらに第15次調査区のAW（15）2394・14次調査区のAW（14）99と同一遺構と考えられる。覆土は黄灰色砂質土を主とする。輸入白磁碗（308）輸入青磁碗（312・314）肥前磁器碗（309～311・313）肥前磁器皿（315～317・319）再興九谷磁器皿（318）肥前陶器碗（320～325）皿（326～331）越前甕（307・332・333）肥前擂鉢（335）土錘（336）石鉢（337）を図示した。

AW（13）30b（第41・42図）　H～I8～9グリッドに位置する。H9グリッドでAW（13）30と接続する。AW（13）30との新旧は断面図がないため不明である。確認できた最大長9.5m、幅38～95cm、深度39cm。覆土はAW（13）30と同じく黄灰色砂質土を主とする。肥前陶器碗（338）を図示した。

AW（13）31（第41・42図）　G～H9グリッドに位置し、調査区外に伸びる。確認できた最大長8.1m、最大幅101cm、深度21～47cm。灰色粘質土を主とする。遺物はないが、AW（13）30と並行することと覆土等から近世と判断した。

AW（13）66・75（第40・41図）　H7～8グリッドに位置し、調査区外に伸びる。H8グリッドでAW（13）30と接続する。Ｈ７グリッド付近のAW（13）66の深い部分をAW（13）75としているが、断面図がないため新旧は不明である。最大長21.95m、幅151～283cm、深度15～41cm。覆土は褐灰色粘質土を主とする。AW（13）66は須恵器や珠洲砕片が出土、AW（13）75は肥前磁器碗（340）肥前陶器碗（341）肥前擂鉢（342・343）行火（344）炉縁石（345・346）のほか、打製石斧（339）を図示した。

AW（13）159（第29・30図）　I８グリッドに位置する。AW（13）189より新しい。長さ8.1m、幅45cm、深度27cmで覆土は黄灰色粘土を主とする。須恵器坏・瀬戸美濃天目碗・唐津陶器皿・肥前陶器皿砕片が出土した。AW（13）507の西側に近接して伸びることから、建物の雨落溝のような役割を果たしていた可能性もある。

AW（13）207（第41・42図）　I～J９～10グリッドに位置し、H10グリッドでAW（13）30と、さらにAW（15）2070に接続するが新旧は不明である。長さ17.75m、幅69～95cm、深度24～58cm。覆土は白色粘土を主とし若干鉄分が多い。近世土師器皿（347～350）肥前磁器碗（351～353）皿（354）肥前陶器皿（356・357）向付（358）瓶類（359・360）を図示した。

AW（13）501（第41・42図）　H8グリッドに位置する。AW（13）30がH8グリッドでほぼ直角に角度を変える場所で、東側石列とその前面の深い部分をさす。262以上×126cm以上、深度74cm。東側の石

列Ａは調査区内の他の石列と同じように楕円形の石の短軸を揃えて正面を作りだしている。北側からはAW（13）66・75と後述するAW（13）505が接続する。

この石列のうち、AW（13）505部分をＡａ、AW（13）501部分をＡｂとする。両者の接続部分には段差ができている。この部分から南東に延びる石列Ａｃがある。石列Ａａは全長292cm、石列Ａｂは全長274cm、石列Ａｃは全長118cmである。立面では石列Ａａ・ｃは段がないが、石列Ａｂは２～３段の積み方が見られる。これ以外に、AW（13）505との境に他の石列に使用されている石とはサイズの異なる大型の石Ｂが確認される。石Ｂの検出レベルは石列Ａと変わらないため、石Ｂが水をせき止めるような状況になり、AW（13）66・75とAW（13）30は溝東側の細い幅でつながっていた状況となる。このように、石列Ａａと石列Ａｂの軸がずれるのも両者が一体施工ではなく、あとからAW（13）505を掘り直して石列Ａａ・Ｃ・Ｄを作って石Ｂを置き溜め升状の施設を作った可能性もある。

断面図からは２回の掘り込みが推測できる。下層は青灰色粘土と暗褐灰色強粘質土、上層は灰褐色粘質土を主とし、礫が混じる。この断面図からは隣接するAW（13）505との新旧は不明である。中世土師器皿（361）産地不明陶器甕（362）を図示した。

AW（13）505（第41・42図） H8グリッドに位置する。AW（13）66・75がAW（13）30に接続する場所に見られる、北辺の石列Ｃ・東辺の石列Ｄを伴う方形の落ち込みである。落ち込み部分は210以上×186cm以上、深度52cm。礫の混じる灰褐色粘質土を主とする。AW（13）66全体では、石列はAW（13）501から伸びる石列Ａａが上段で、AW（13）505のみに付随する石列Ｃ・Ｄが下段となる。石列Ｃは全長114cm、石列Ｄは全長176cmである。古代の土師器砕片や近世土師器砕片が出土している。

AW（13）649（第41・42図） I～J11グリッドに位置し、調査区外に伸びる。I11グリッドでAW（13）30に、第15次調査区AW（15）2070に接続する。それぞれの新旧は不明である。調査区内での最大長13.42m、幅103cm、深度23cm。覆土は灰色粘土を主とする。遺物はないが、覆土など遺構の状況から近世と判断した。

AW（13）663（第29・41・42図） I9グリッドに位置する。AW（13）207・477と、AW（13）508・662から南に伸びる溝状のAW（13）202に接続するが、新旧は不明である。最大長237cm、幅13cm、深度15cm。覆土は褐灰色土を主とする。肥前陶器皿（363）を図示した。

AW（13）664（第41・42図） I9グリッドに位置する。石列を伴う土坑で、断面図からはAW（13）665より古い。石列はあるが、遺構のサイズが竪穴状遺構とするには小さいことと、AW（13）30bに付属するような形態が見られるのでここで取り上げることとする。石列は東側の石列Ａと南側の石列Ｂが確認できるが、石列Ｂは平面図上はAW（13）665の遺構の南辺にもかかっているため、AW（13）664構築時ではなくAW（13）665構築時の一体施工である可能性がある。122以上×65cm、深度36cm。覆土は黒褐色粘質土を主とする。石列Ａは全長84cm、石列Ｂは全長172cmである。須恵器無台坏・越前甕・近世土師器砕片が出土している。

AW（13）665（第41・42図） I8～9グリッドに位置する。東側の肩に石列Ｃを伴う土坑で、西側がAW（13）30bに接続する。AW（13）506に付属する断面図からはAW（13）30bが新しいことが分かる。また、断面図ではAW（13）664より新しい。石列ＣはAW（13）664の石列Ａ・Ｂと同じようなサイズの石を使用している。530×130cm以上、深度19cm。覆土は褐灰色粘質土を主とする。石列Ｃは全長152cm。須恵器甕砕片が出土したが、覆土などから近世と判断した。

AW（14）3・19・52・247（第41・42図） F～H15グリッドに位置する。東西とも立ち上がりは不明だが、AW（14）3・19のラインを東に伸ばしていくとAW（14）52に近接するため、AW（14）52とそれに接続するAW（15）2002も同一遺構とみなした。AW（14）247は西側の立ち上がりが不明である。確認できた最大長29.5m、幅65～191cm、深度12～28cm。覆土は暗褐色粘質土を主とする。AW（14）3からは近世土師器皿（364）肥前陶器碗（365・366）瀬戸美濃陶器皿（367）、AW（14）52からは肥前

磁器碗（378）珠洲片口鉢（377）を図示した。このほかに、肥前磁器皿・陶器碗（陶胎染付）砕片も出土している。

なお、AW（14）3・19・52・247はAW（10）25につながる可能性がある。

AW（14）7（第41・42図） F～I15グリッドに位置し、一部調査区外に伸びる。確認できた最大長26.7m、最大幅158cm、深度48～56cm。覆土は明褐灰砂質土を主とする。肥前磁器瓶(368)肥前陶器碗(369)を図示した。このほかに、肥前磁器皿砕片も出土している。

AW（14）12・251（第41・42図） G～I15グリッドに位置し、一部調査区外に伸びる。第10・11次調査区のAW（10・11）25と第15次調査区のAW（15）2011に接続する可能性が高い。H15グリッドでは石列が確認されているが、その前面だけ深いというような事実も確認できず、また、現地調査時のメモにもこの石列に伴う掘り込みが確認されないと記述されているため、AW（13）501やAW（13）505のような土坑ではなく、AW（13）12に伴う護岸的な石列と判断した。H～I15グリッド付近は遺構の上幅が大きく広がるが、この石列ラインが本来の溝幅だった可能性がある。最大長36.10m、幅110～262cm、深度15～30cm。覆土は明灰色砂質土を主とする。近世土師器(371)肥前磁器碗(372)瀬戸美濃陶器皿(373)肥前陶器皿（374）瀬戸美濃陶器瓶類（375・376）のほか、珠洲甕（370）を図示した。このほかにも輸入白磁皿・肥前磁器碗（コンニャク印判）砕片が出土している。なお、AW（14）12のラインをそのまま西に伸ばすとAW（10・11）22にぶつかるが、古代との関連は不明である。古代の遺物が集中する等の記録は残っていない。

AW（15）90（第41・42図） I11～14グリッドに位置する。AW（13）30・AW（15）2394と同一遺構で、南側でAW(14)52・(15)2002に接続する。この接続部分はほとんどが調査区外であり新旧は不明である。調査区内で確認された最大長30.75m、最大幅235cm、深度42～61cm。覆土は灰褐色砂質土を主とする。瀬戸美濃陶器碗（379）肥前陶器碗（380）瀬戸美濃陶器皿（381）肥前陶器皿（382）壺（383）行火（384）を図示した。この他に輸入青花皿・肥前磁器皿砕片が出土している。

第４節　遺物

遺物の記述には、本文・観察表・図面図版・写真図版を用いる。当調査区からは縄文～近世までの遺物が出土している。遺構にかかわる遺物は既述しており、ここでは概略のみ記す。

(1)縄文・弥生時代の遺物

土　　器　いずれも砕片（２～５）で、縄文時代晩期～弥生時代にかけての土器である。

石　　器　打製石斧（１・13・19・34・54・339）と磨製石斧（26、転用・306）がある。量は少ない。

(2)奈良・平安時代の遺物

須　恵　器　坏類（６・９・12・14・15）坏蓋（16）瓶類（10・18）甕（11・17）。いずれも砕片。

土　師　器　釜（７・８）が、建物AW（11）73から出土した。田嶋編年のＶ期に相当する。

(3)中世の遺物

中世土師器　皿（32・33・35・36・41・43・49・60・65～67・69・74・83・105・171～173・205・208・225・230・231・233・235・241・243・361）が出土した。ほとんどは近世の遺構からの出土である。時期は13～16世紀まで散見されるが、16世紀のものは少ない。

陶　磁　器　陶器は珠洲と瀬戸美濃が大半である。珠洲は鉢類（29・61・156・249・377）甕（370）で、14～15世紀の所産である。瀬戸美濃はいわゆる大窯期に相当するものが大半である。天目

碗（42・44・143・144・157）や皿（100・109・183・274・373・381）が多い。磁器は輸入青磁（24・25・30・31・56・71・234・244・256・268・311・314）白磁（68・73・92・107・149・195・308）が多く、青花が（55）のほか少量確認された。

(4)近世の遺物

近世土師器　皿（95・99・137・199・347～350・364・371）が出土した。17世紀が主体である。

陶　　器　貯蔵具では越前甕（110・163・193・220・307・332・333）肥前（肥前系）擂鉢（39・46・62・187・197・247・248・265・266・302～304・335・342・343）甕（134・136）が目立つ。他に須佐唐津？（267）や越中瀬戸？（115）の擂鉢が少数、見られる。供膳具では瀬戸美濃（106・379）越中瀬戸（58・130・186・239）京焼系（219・300・334）が少数で、碗皿の大多数は肥前産である。17～18世紀が多い。未実測遺物もおおむねこの範囲におさまるもので、近代以降の遺物はほとんどない。

磁　　器　再興九谷(318)があるが、碗皿のほとんどは肥前産である。17世紀後半～18世紀前半が多い。銅緑釉を塗布して見込みを蛇の目釉剥にした皿（279～286など）が一定量出土している。

(5)その他の遺物

土 製 品　土人形（88・89・222）瓦塔（90）土錘（221・336）土鈴（135）が出土した。

石 製 品　砥石（27・57・78・159・203・212・215・227・246）には天草産や浄教寺産が見られる。石臼（22・59・101・102・160・179）茶臼（216）行火（64・103・111・167～170・305・344・384）炉縁石（75・76・98・140・161・189・190・192・213・216・345・346）など生活にかかわる道具が多いいっぽう、五輪塔（97・164・178・217）石塔（165）も少数ながら見られる。調査区内では墓坑と積極的に判断できる遺構に乏しいが、野々市町北西部の郷クボタ遺跡では居住区である掘立柱建物群から若干の空間域をおいて墓域が展開することから、調査区外に主体がある可能性もある。

金属製品　銭貨（20・79・80・174・175）釘（21・40・146・147・202）刀子（122・242）のほか、不明製品も多い。

このほか、特筆すべき遺物としてAW（13）239から網代状木製品、AW（14）83から碗状に固まった漆塊が出土した。

第５節　小結

古代は第11次調査区に遺構がとくに多い。この調査区の西側の第15次調査区に古代の建物・畝溝群が多数検出されたことから（第５図）、集落の主体は西側と考えられる。掘立柱建物や竪穴状遺構が畦溝群と重複して展開するのが特徴である。AW（11）73と軸をそろえた古代の道路状遺構AW（11）129も検出されていることから、一定の規範をもった集落つくりが行われていた可能性がある。

中世は、遺物の出土は調査区のほぼ全域で見られるものの、遺構の分布は偏りがある（第12図）。第13次調査区北東とそれに続く第15次調査区北端に竪穴状の大型土坑が検出された。掘立柱建物は検出に至っていないが、中世の集落では掘立柱建物が建てられるエリアと竪穴状遺構が集中するエリアが分かれる場合もあり(野々市町長池キタノハシ遺跡、小松市大長野Ａ遺跡など)、当遺跡もそれらの例にならって考えれば調査区外に掘立柱建物が存在する可能性もある。

中世の遺物は、主体となる時期は15～16世紀前半である。第10・11次調査区の竪穴建物は13～14世紀に属しており、時期によってその主となる場所が移動していることが見て取れる。遺物は、輸入青花碗

皿は量こそ少ないが調査区の全域で破片が出土する。16世紀後半になると遺物の量は激減し、この時期に集落がいちど断絶すると思われる。また、第13・14次調査区では石塔類が出土し、墓域が存在する可能性も考えられるが、焼骨などの記録はない。

近世は、第11・13・14次調査区のほぼ全域で確認される（第16図）。第11次調査区では溝・掘立柱建物、第13・14次調査区では石列をもつ大型土坑や溝が主体となり、集落のあり方が若干異なる。掘立柱建物AW（11）128より西には明確な近世の遺構がなく、このあたりが集落の西限と考えられる。同じように、第11次調査の北側と第13・14次調査区北端のＨ～Ｉ７グリッド付近は溝以外の近世の遺構がほとんど見られないので、このあたりが北限と考えられる。遺構の検出状況については、遺構が密集し重複が激しい第14次調査区とは異なり、第13次調査区のＧ～Ｈ９～10グリッドはほとんど重複が見られず、特にAW（13）40・93・95は切り合いがない。出土している遺物からAW（13）95が古く、AW（13）40とAW（13）93が新しい可能性が考えられる。しかし、AW（13）93石列Ｃ南辺とAW（13）95石列Ｅ北辺のあいだが等間隔で作られていることから、両者はそれぞれ意識して施工された可能性も高く、時期差は想定しにくい。この集落が存続しているあいだ、AW（13）40・93・95などの石列などをともなう建物は建て替えられなかったと考えられる。

近世の遺物は18世紀後半になると激減する。調査区内では銅版転写技法やコバルト絵付けの陶磁器が出土せず、この時期以降は調査区外に集落が完全に移転しているものと思われる。

遺物観察表

掲載番号	出土地点	種類	器種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	重量(g)	残存率	外面色調または釉薬	内面色調または胎土	備考	実測番号
1	AW (11) 119	石器	打製石斧	225	90	32	682	完形			凝灰石	追3
2	AW (11) 125	縄文土器						少片	褐灰	灰黄褐		204
3	AW (11) 126	弥生土器						少片	灰黄褐	灰黄褐		201
4	AW (11) 73	縄文土器						少片	浅黄	鈍い黄	縄文晩期～弥生	199
5	AW (11) 73	縄文土器						少片	橙	鈍い橙		206
6	AW (11) 73 P23-2	須恵器	無台杯					1/4	鈍い橙	浅黄橙		追1
7	AW (11) 73 P23	土師器	釜	101				少片	橙	橙	田嶋Ⅴ期	93
8	AW (11) 73 P23	土師器	釜					少片	橙	浅黄橙		205
9	AW (11) 71 c	須恵器	有台杯			92		1/4	灰黄	灰黄		94
10	AW (11) 85	須恵器	瓶類					少片	灰白	灰白		127
11	AW (11) 93	須恵器	甕					少片	オリーブ黒	灰		118
12	AW (11) 115	須恵器	有台杯			94		少片	灰白	灰白		218
13	AW (11) 22	石器	打製石斧	184	93	41	662	完形			凝灰岩	216
14	AW (13) 自然河道	須恵器	有台杯					1/3	灰	灰		T009
15	AW (13) 自然河道	須恵器	有台杯			64		2/3	灰	灰		T006
16	AW (13) 自然河道	須恵器	杯蓋					1/2	灰白	灰白		T007
17	AW (13) 自然河道	須恵器	甕	230				少片	黄灰	灰白		T005
18	AW (13) 自然河道	須恵器	瓶類			142		1/9	灰	灰		N023
19	AW (13) 自然河道	石器	打製石斧					1/3			火山礫凝灰岩、欠損	T008
20	AW (13) 409上層	金属製品	銭貨	25	25	3	3				元祐通寶	247
21	AW (13) 410西側	金属製品	釘								欠損	N199
22	AW (13) 410西側	石製品	石臼					1/4			下臼、欠損	N198
23	AW (13) 410	石製品	石錘？					1/2			欠損	石22
24	AW (14) 164	磁器	碗					1/3	釉：青磁釉	胎：灰白	輸入、14C後	N79
25	AW (14) 164東	磁器	碗			68		1/6	釉：青磁釉	胎：灰白	輸入、15C前	N64
26	AW (13) 297	石器	磨製石斧	164	72	23	550				砥石転用	N130
27	AW (13) 297	石製品	砥石								中砥、備水、欠損	N131
28	AW (13) 458	陶器	瓶類			150		1/6	釉：灰釉	胎：灰白	瀬戸美濃、15C前	N194
29	AW (13) 458	陶器	摺鉢					少片	灰	灰	珠洲、15C前	N196
30	AW (13) 462	磁器	碗	142				1/9	釉：青磁釉	胎：灰白	輸入、15C前～中	N192
31	AW (13) 462	磁器	碗	180				1/6	釉：青磁釉	胎：灰白	輸入、15C前	N185
32	AW (13) 656	中世土師器	皿	94	21			1/9	にぶい黄橙	にぶい黄橙	全体に磨耗	T209
33	AW (14) 2	中世土師器	皿	128	25			1/3	にぶい黄橙	にぶい黄橙	13C前	T1
34	AW (13) 231	石器	打製石斧	135	68	35	370	完形				N133
35	AW (11) 15	中世土師器	皿	82	15	58		完形	橙	橙	藤田Ⅱ期	69
36	AW (11) 69	中世土師器	皿	122				2/5	浅黄橙	浅黄橙		80
37	AW (13) 32	陶器	碗	104				1/6	釉：灰釉	胎：灰白	肥前、17C後	T082
38	AW (13) 32・42	陶器	甕			142		1/2	釉：鉄釉・白泥	胎：明褐灰		N157
39	AW (13) 32	陶器	擂鉢					1/6	にぶい橙	にぶい橙	肥前、17C後	T081
40	AW (13) 32	金属製品	釘								欠損	T083
41	AW (13) 40	中世土師器	皿	126				1/6	灰黄褐	灰黄褐		T066
42	AW (13) 40	陶器	碗	120				少片	釉：鉄釉	胎：灰白	瀬戸美濃、天目、15C前	T074
43	AW (13) 42	中世土師器	皿	120	25			1/6	にぶい黄橙	にぶい黄橙		N026
44	AW (13) 42	陶器	碗	120				少片	釉：鉄釉	胎：灰白	瀬戸美濃、天目、17C	T067
45	AW (13) 42・30	陶器	皿	342				1/4	釉：白泥	胎：にぶい褐	肥前、折縁、17C前	N158
46	AW (13) 42	陶器	擂鉢	272				少片	釉：錆釉	胎：にぶい褐	肥前、17C	T068
47	AW (13) 43	磁器	碗			56		3/4	釉：透明釉	胎：灰白	肥前、17C後	T069
48	AW (13) 43	陶器	碗			42		完形	釉：透明釉	胎：淡黄	肥前、17C後～18C前	T070
49	AW (13) 93	中世土師器	皿					少片	にぶい橙	にぶい橙	油煙痕	T244
50	AW (13) 93	陶器	碗	112	76	52		完形	釉：灰釉	胎：にぶい赤褐	肥前、17C後	N013
51	AW (13) 93	陶器	碗			50		完形	釉：灰釉	胎：褐灰	肥前、17C後	N014
52	AW (13) 93	陶器	碗			40		完形	釉：鉄釉	胎：灰黄	肥前、天目、17C前	T149
53	AW (13) 93	陶器	碗			51		完形	釉：灰釉	胎：灰白	肥前、17C前	T245
54	AW (13) 95	石器	打製石斧								欠損	T144
55	AW (13) 95	磁器	皿	124	29	66		1/2	釉：透明釉	胎：灰白	輸入、青花、16C後	T141
56	AW (13) 95外側	磁器	碗	136				1/9	釉：青磁釉	胎：灰白	輸入	T219
57	AW (13) 96	石製品	砥石								欠損	N243
58	AW (13) 380北側	陶器	向付	108	31	58		1/3	釉：鉄釉	胎：にぶい黄橙	越中瀬戸、17C前	T17
59	AW (13) 380北側	石製品	石臼								下臼、欠損	石19
60	AW (13) 459	中世土師器	皿	110	25	50		1/2	橙	橙		N190
61	AW (13) 459	陶器	擂鉢	404				少片	灰	灰	珠洲、15C前	N193
62	AW (13) 460	陶器	擂鉢	316				1/9	釉：鉄釉	胎：赤褐	肥前、17C前、卸目8本	N182
63	AW (13) 460	石製品	石鉢								欠損	N200
64	AW (13) 460	石製品	行火								欠損	N191
65	AW (13) 609	中世土師器	皿	92	23	30		3/4	浅黄橙	浅黄橙	16C前	T211
66	AW (13) 609	中世土師器	皿	146				1/6	にぶい黄橙	にぶい黄橙		T212
67	AW (13) 609	中世土師器	皿	146	21	70		1/4	浅黄橙	浅黄橙		T213
68	AW (13) 609	磁器	皿	118	28	62		3/4	釉：透明釉	胎：灰白	輸入、16C後	T210
69	AW (14) 82	中世土師器	皿	66	16			1/3	浅黄橙	浅黄橙	15C前	T26
70	AW (14) 82北西側	磁器	碗	98	59	42		1/3	釉：透明釉	胎：灰白	肥前、18C、コンニャク印判	T27
71	AW (14) 82	磁器	盤					少片	釉：青磁釉	胎：灰	輸入、15C前	T28
72	AW (14) 82	陶器	小壷			58		3/4	釉：鉄釉	胎：灰白	瀬戸美濃、16C	T25
73	AW (14) 103	磁器	皿	110				1/5	釉：透明釉	胎：灰白	輸入、15C前～中、漆接ぎ	N48
74	AW (14) 163	中世土師器	皿	65	16			1/6	にぶい黄橙	にぶい黄橙		N49
75	AW (14) 163	石製品	炉縁石								欠損	T66
76	AW (14) 163	石製品	炉縁石								欠損	N142

掲載番号	出土地点	種類	器種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	重量(g)	残存率	外面色調または釉薬	内面色調または胎土	備考	実測番号
77	AW（14）167	陶器	碗			52		2/3	釉：灰釉	胎：にぶい黄橙	肥前、17C後～18C前	N51
78	AW（14）167	石製品	砥石								中砥、天草、欠損	N50
79	AW（14）168下層	金属製品	銭貨	24	24	2	2.6				寛永通寶	銭1
80	AW（14）168	金属製品	銭貨	25	25	2	2.7				熙寧元寶	銭8
81	AW（14）168	木製品	板状木製品								欠損	N91
82	AW（14）193	陶器	皿			46		完形	釉：灰釉	胎：にぶい黄橙	肥前、17C前	N52
83	AW（14）194	中世土師器	皿	66	14			1/5	浅黄橙	浅黄橙		N43
84	AW（14）194	磁器	碗			42		完形	釉：透明釉	胎：灰白	肥前、17C後	N44
85	AW（14）194	磁器	碗	59	19	20		1/2	釉：透明釉	胎：灰白	肥前、18C前、色絵	N45
86	AW（14）194	陶器	皿					1/9	釉：透明釉	胎：褐灰	肥前、17C前	N46
87	AW（14）194	陶器	灯火具？	64				1/3	釉：鉄釉	胎：灰白	産地不明	N47
88	AW（14）194	土製品	人形						灰褐		坐像、欠損	N58
89	AW（14）194	土製品	人形						黄橙		坐像、欠損	N59
90	AW（14）194	土製品	瓦塔						灰	灰黄	屋根	N57
91	AW（14）195	磁器	皿	128	39	46		完形	釉：透明釉	胎：灰白	肥前、17C後～18C前	N65
92	AW（14）196	磁器	小杯	41	24	24		1/3	釉：透明釉	胎：灰白	輸入、15C後	N61
93	AW（14）196	磁器	皿	120	39	46		2/3	釉：透明釉	胎：灰白	肥前、17C後～18C前	N62
94	AW（14）223	磁器	皿			42		2/3	釉：透明釉	胎：灰白	肥前、17C後～18C前	N74
95	AW（14）223上層	土師器	皿	120				完形	浅黄橙	浅黄橙	17C後	N73
96	AW（14）240	石製品	石鉢					1/6			欠損	T78
97	AW（14）240	石製品	五輪塔	208	159	145	4870				空風輪	T77
98	AW（14）240	石製品	炉縁石								欠損	T76
99	AW（13）506	土師器	皿	113	24	46		1/3	浅黄橙	にぶい黄橙		N109
100	AW（13）506	陶器	皿	115	27	62		1/2	釉：灰釉	胎：灰黄	瀬戸美濃、折縁、16C後	T218
101	AW（13）506石列	石製品	石臼								上臼、欠損	石20
102	AW（13）506石列	石製品	石臼								下臼、欠損	石21
103	AW（13）506	石製品	行火								軽石凝灰岩、欠損	N111
104	AW（13）506	石製品	石鉢								欠損	T205
105	AW（13）508	中世土師器	皿	142				少片	にぶい黄橙	にぶい黄橙		T220
106	AW（13）508	陶器	碗			50		3/4	釉：灰釉	胎：灰黄褐	瀬戸美濃、17Cか	N179
107	AW（13）508	磁器	皿	94				1/6	釉：透明釉	胎：灰白	輸入、15C後	N180
108	AW（13）509	陶器	碗			46		完形	釉：灰釉	胎：黄灰	肥前、17C前	T216
109	AW（13）509	陶器	皿	106	25	52		1/2	釉：灰釉	胎：灰白	瀬戸美濃、折縁、16C後	T214
110	AW（13）509	陶器	甕					少片	褐灰	灰	越前、16C後	T215
111	AW（13）509	石製品	行火								欠損	T217
112	AW（11）120	磁器	香炉			50		1/3	釉：灰釉	胎：灰		141
113	AW（11）120	陶器	碗			50		完形	釉：暗緑灰	胎：灰白	肥前、陶胎染付、18C前	140
114	AW（11）120	陶器	碗	98	67	45		4/5	釉：白泥	胎：鈍い赤褐	肥前（現川）、18C	143
115	AW（11）120	陶器	擂鉢	316				少片	釉：錆釉	胎：鈍い赤褐	越中瀬戸または須佐唐津、18C	142
116	AW（11）121	磁器	碗	100				少片	釉：透明釉	胎：灰白	肥前、コンニャク印判、18C中	156
117	AW（11）121	磁器	碗			30		完形	釉：透明釉	胎：灰白	肥前、18C	157
118	AW（11）121	陶器	碗	112				1/4	釉：白泥	胎：赤褐	肥前（現川）、18C	154
119	AW（11）121	陶器	擂鉢	290				少片	釉：錆釉	内：褐灰		155
120	AW（13）33	磁器	皿	130	34	42		1/4	釉：銅緑釉	胎：灰白	肥前（波佐見）	T051
121	AW（13）41	陶器	碗					1/2	釉：灰釉	胎：浅黄	唐津か、18C前	T058
122	AW（13）41	金属製品	刀子								欠損	T059
123	AW（13）41底	木製品	板状木製品								欠損	T071C
124	AW（13）41底	木製品	板状木製品								欠損	T071A
125	AW（13）41底	木製品	板状木製品								欠損	T071B
126	AW（13）45	磁器	皿	142	34	80		1/6	釉：透明釉	胎：灰白	肥前、18C前～中	T063
127	AW（13）45	陶器	碗	110	74	46		1/2	釉：透明釉	胎：灰	肥前、陶胎染付、18C	T060
128	AW（13）45	陶器	碗	102	66	20		完形	釉：透明釉	胎：灰白	肥前、陶胎染付、18C	T062
129	AW（13）45	陶器	皿	142	35	42		1/6	釉：灰釉	胎：にぶい橙	肥前、17C前	T061
130	AW（13）45	陶器	皿	136	35	48		1/3	釉：灰釉	胎：浅黄橙	越中瀬戸、17C前	T064
131	AW（13）47b	陶器	皿	124	40	50		1/4	釉：灰釉	胎：褐灰	肥前、17C前	N015
132	AW（13）48	陶器	皿	148				少片	釉：灰釉	胎：黄橙	肥前、17C前	T057
133	AW（13）48	陶器	皿	165				少片	釉：銅緑釉	胎：灰白	肥前（波佐見）、17C後～18C前	T073
134	AW（13）48	陶器	甕					1/7	釉：鉄釉	胎：褐	肥前	N025
135	AW（13）48	土製品	土鈴						にぶい黄橙	にぶい黄橙	欠損	T065
136	AW（13）70	陶器	甕					1/6	釉：錆釉	胎：灰白	肥前、17C前	T135
137	AW（13）71	土師器	皿	78				1/3	にぶい黄橙	にぶい黄橙		T139
138	AW（13）71	陶器	皿			50		完形	釉：灰釉	胎：灰黄	肥前、17C前	T138
139	AW（13）71	陶器	皿			80		1/2	釉：灰釉	灰白	肥前、17C前	T146
140	AW（13）71	石製品	炉縁石								欠損	T145
141	AW（13）73	金属製品	鉄塊									N104
142	AW（13）79	陶器	碗			50		完形	釉：灰釉	胎：灰白	肥前、17C前	T137
143	AW（13）79	陶器	碗	120	60	46		1/3	釉：鉄釉	胎：灰白	瀬戸美濃、天目、大窯Ⅱ期以降	T143
144	AW（13）121a	陶器	碗					少片	釉：鉄釉	胎：にぶい黄橙	瀬戸美濃、天目、漆接ぎ	N095
145	AW（13）121a	陶器	皿					1/4	釉：灰釉	胎：灰黄	肥前、17C前	N096
146	AW（13）121a	金属製品	釘								欠損	N097
147	AW（13）121a	金属製品	釘								欠損	N098
148	AW（13）121b東	陶器	皿			50		1/3	釉：灰釉	灰黄	肥前、17C前	N092
149	AW（13）121c	磁器	皿					少片	釉：透明釉	胎：灰白	輸入、15C前	N099
150	AW（13）121c	磁器	皿	120	35			1/7	釉：銅緑釉	胎：灰	肥前、18C前	N100
151	AW（13）121c	磁器	皿			41		完形	釉：銅緑釉	胎：灰白	肥前、18C前	N102
152	AW（13）121c	磁器	人形					1/2	釉：青磁釉	胎：灰白	高麗聖人、背中に穿孔あり、欠損	N093
153	AW（13）121c	陶器	皿			36		2/5	釉：灰釉	胎：にぶい黄褐	肥前	N103
154	AW（13）121c	陶器	甕					少片	灰褐	黄灰	外面押印文（菊花格子）	N101
155	AW（13）139西	磁器	碗			44		1/2	釉：青磁釉	胎：灰白	肥前、17C中	N091
156	AW（13）155	陶器	擂鉢			136		1/3	灰	灰	珠洲、15C前	N090

掲載番号	出土地点	種類	器種	口径（mm）	器高（mm）	底径（mm）	重量（g）	残存率	外面色調または釉薬	内面色調または胎土	備考	実測番号
157	AW（13）210	陶器	碗	122				1/6	釉：鉄釉	胎：にぶい黄橙	瀬戸美濃、天目、大窯Ⅲ期	N124
158	AW（13）238	陶器	皿	117	37	38		完形	釉：灰釉	胎：にぶい赤褐	肥前、17C前	N119
159	AW（13）251	石製品	砥石								欠損	N169
160	AW（13）251	石製品	石臼								欠損	N122
161	AW（13）251	石製品	縁石								欠損	石5
162	AW（13）268	陶器	甕					少片	褐灰	褐灰	越前	N175
163	AW（13）268	陶器	甕					1/5	灰褐	灰黄褐	越前	N123
164	AW（13）268	石製品	五輪塔								水輪	石1
165	AW（13）268	石製品	石塔								相輪	石7
166	AW（13）268	石製品	石鉢	340	176	24	6500					石8
167	AW（13）268	石製品	行火								欠損	石4
168	AW（13）268	石製品	行火								欠損	石6
169	AW（13）272	石製品	行火								欠損	N241
170	AW（13）272	石製品	行火								欠損	T240
171	AW（13）294下層	中世土師器	皿					1/9	にぶい橙	にぶい橙	京都系	N172
172	AW（13）294下層	中世土師器	皿					1/9	にぶい橙	にぶい橙		N173
173	AW（13）294下層	中世土師器	皿					少片	にぶい橙	にぶい橙		N174
174	AW（13）294下層	金属製品	銭貨					2/3			元祐通寶、欠損	N170
175	AW（13）294下層	金属製品	銭貨					2/3			元祐通寶、欠損	N171
176	AW（13）295	磁器	皿			46		完形	釉：銅緑釉	胎：灰白	肥前（波佐見）、17C後～18C前	N127
177	AW（13）295	陶器	皿			45		完形	釉：灰釉	胎：灰黄	肥前、17C前	N128
178	AW（13）295	石製品	五輪塔	180							水輪	石16
179	AW（13）295	石製品	石臼	310	99	222	8790	完形			下臼	石9
180	AW（13）303a	陶器	碗			60		1/6	釉：灰釉	胎：明褐灰	肥前、17C後	N165
181	AW（13）303a	陶器	碗			44		1/3	釉：鉄釉	胎：にぶい赤褐	肥前、17C	N164
182	AW（13）303c	陶器	碗			52		1/3	釉：灰釉	胎：にぶい橙	肥前、17C前	N163
183	AW（13）303c	陶器	皿	88	19	43		1/6	釉：灰釉	胎：灰白	瀬戸美濃、大窯Ⅰ期	N161
184	AW（13）303c	陶器	皿	116				1/6	釉：灰釉	胎：灰褐	肥前、17C	N168
185	AW（13）303c	陶器	卸皿	116	21	70		1/7	釉：灰釉	胎：にぶい黄橙	瀬戸美濃、15C前～中	N162
186	AW（13）308	陶器	碗			49		1/2	釉：鉄釉	胎：浅黄	越中瀬戸、17C前	N121
187	AW（13）327	陶器	擂鉢					少片	釉：鉄釉	胎：灰黄褐	肥前、17C後～18C前	N178
188	AW（13）372	磁器	皿	120	40	38		少片	釉：銅緑釉	胎：灰白	肥前（波佐見）、18C前	N120
189	AW（13）402	石製品	炉縁石								欠損	N188
190	AW（13）402	石製品	炉縁石								欠損	N189
191	AW（13）464	陶器	皿			48		1/3	釉：灰釉	胎：にぶい黄橙	肥前、17C前	N186
192	AW（13）464	石製品	炉縁石								欠損	N187
193	AW（13）607	陶器	甕					少片	にぶい赤褐	灰黄	越前	T206
194	AW（14）35	金属製品	棒状金属製品								欠損	N16
195	AW（14）46	磁器	皿			44		2/3	釉：透明釉	胎：灰白	輸入、15C前～中	N17
196	AW（14）53	陶器	皿			78		完形	釉：銅緑釉	胎：灰黄	肥前、17C後～18C前	N13
197	AW（14）53	陶器	擂鉢	290				1/4	釉：鉄釉	胎：にぶい橙	肥前、17C後	N14
198	AW（14）53西側	石製品	火鉢								凝灰石、欠損	N19
199	AW（14）79	土師器	皿	104	24			1/9	にぶい黄橙	浅黄橙		T24
200	AW（14）79	陶器	皿	126	32	36		1/3	釉：灰釉	胎：灰白	肥前、折縁、17C前	T20
201	AW（14）79	陶器	皿			44		完形	釉：灰釉	胎：灰白	肥前、17C前	T21
202	AW（14）79	金属製品	釘								欠損	T23
203	AW（14）79	石製品	砥石								中砥、浄教寺、欠損	T22
204	AW（14）91a	陶器	碗	104	68	50		2/3	釉：透明釉	胎：灰黄	肥前、18C前、陶胎染付	T37
205	AW（14）91b	中世土師器	皿	60	17			1/2	にぶい橙	にぶい橙		T33
206	AW（14）91b	磁器	皿	126	35	44		1/3	釉：透明釉	胎：灰白	肥前、17C後～18C前	T32
207	AW（14）91b	陶器	碗	102	64	42		1/3	釉：透明釉	胎：にぶい橙	肥前、18C前、陶胎染付	T31
208	AW（14）110	中世土師器	皿	80	15			1/5	浅黄橙	浅黄橙		N56
209	AW（14）110	磁器	碗	88				1/6	釉：透明釉	胎：灰白	肥前、18C	N54
210	AW（14）110	磁器	碗					1/3	釉：透明釉	胎：灰白	肥前、17C後	N55
211	AW（14）140	陶器	碗	83				1/4	釉：透明釉	胎：灰白	肥前、呉器手、17C後、京焼風か	N53
212	AW（14）140	石製品	砥石								欠損	T69
213	AW（14）140	石製品	炉縁石								欠損	T68
214	AW（14）152	石製品	炉縁石								欠損	T67
215	AW（14）152	石製品	砥石								中砥、天草、欠損	N84
216	AW（14）152	石製品	茶臼								下臼、欠損	N83
217	AW（14）152	石製品	五輪塔								火輪、欠損	T144
218	AW（14）155	陶器	碗			50		完形	釉：透明釉	胎：黄灰	肥前、17C後～18C前、陶胎染付	N85
219	AW（14）155	陶器	碗	82				1/3	釉：透明釉	胎：灰白	京・信楽	N88
220	AW（14）155	陶器	甕	220				1/9	釉：鉄釉	胎：にぶい黄橙	越前、17C	N86
221	AW（14）155	土製品	土錘						にぶい赤褐	橙	欠損	N90
222	AW（14）155	土製品	人形						にぶい黄橙		女性、欠損	N89
223	AW（14）155	木製品	板状木製品								欠損	N87
224	AW（14）159	陶器	皿	134				1/3	釉：灰釉	胎：灰黄	肥前、折縁、17C前	N63
225	AW（14）197	中世土師器	皿	109				1/6	にぶい橙	にぶい橙		N81
226	AW（14）197	陶器	碗			44		完形	釉：鉄釉	胎：灰白	瀬戸美濃、大窯	N80
227	AW（14）197	石製品	砥石								中砥、備水、欠損	N82
228	AW（14）200	陶器	碗			50		完形	釉：灰釉	胎：灰白	肥前、17C前	T105
229	AW（14）203	陶器	皿			84		1/3	釉：白泥	胎：にぶい橙	肥前、17C後～18C前	N72
230	AW（14）216	中世土師器	皿	76	13			1/3	にぶい黄橙	にぶい黄橙	14C	T114
231	AW（14）219	中世土師器	皿	120				1/9	橙	橙		T109
232	AW（14）219	陶器	碗	125				少片	釉：灰釉	胎：灰白	肥前、17C前	T110
233	AW（14）222	中世土師器	皿	68	11			1/6	橙	橙		T115
234	AW（14）222	磁器	碗			56		1/2	釉：青磁釉	胎：灰白	輸入、15C前～中	N71
235	AW（14）236	中世土師器	皿	96				1/9	にぶい黄橙	にぶい黄橙		T103
236	AW（14）236	磁器	碗			38		1/3	釉：透明釉	胎：灰白	肥前、17C後	T104

掲載番号	出土地点	種類	器種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	重量(g)	残存率	外面色調または釉薬	内面色調または胎土	備考	実測番号
237	AW（14）252	陶器	皿	120	32	48		1/2	釉：灰釉	胎：明褐灰	肥前、17C前	T95
238	AW（14）260	陶器	皿	130	25	44		1/9	釉：灰釉	胎：灰白	肥前、17C前	T119
239	AW（14）260	陶器	向付	116	30	64		1/9	釉：鉄釉	胎：にぶい橙	越中瀬戸	T120
240	AW（14）260	陶器	円盤状	15	14			完形	にぶい赤褐	にぶい赤褐	肥前陶器（擂鉢）の再加工か	T118
241	AW（14）266	中世土師器	皿	112	13			1/6	浅黄橙	浅黄橙	13後～14C	T97
242	AW（14）266	金属製品	刀子？								欠損	T96
243	AW（14）269	中世土師器	皿	118	25			1/6	淡黄	淡黄	13C	T116
244	AW（14）271	磁器	碗			56		完形	釉：青磁釉	胎：灰白	輸入、15C後～16C前	T92
245	AW（14）271	陶器	皿			40		1/2	釉：灰釉	胎：灰白	肥前、17C前	T94
246	AW（14）271	石製品	砥石								中砥、天草、欠損	T93
247	AW（14）190	陶器	擂鉢	329	117	110		1/3	灰褐	暗赤褐	肥前、17C後	N60
248	AW（14）229	陶器	擂鉢			140		1/3	釉：鉄釉	にぶい橙	肥前、17C後～18C前	N75
249	AW（11）25　13	陶器	擂鉢	251				少片	にぶい黄橙	にぶい黄橙	珠洲、14C	26
250	AW（11）25　4	磁器	碗			48		完形	釉：青磁釉	胎：灰白	17C中	31
251	AW（11）25　9	磁器	皿	176				1/9	釉：青磁釉	胎：灰白	肥前	6
252	AW（11）25　10	陶器	碗	88	60	49		1/2	釉：白泥	胎：灰白	肥前、17C後～18C前	36
253	AW（11）25　8	陶器	皿			48		1/2	釉：銅緑釉	胎：灰黄	肥前、17C後～18C前	28
254	AW（11）25　6	陶器	皿			48		完形	釉：灰	胎：灰白	肥前、17C後～18C前	30
255	AW（11）25　14	陶器	皿			42		1/3	釉：鉄釉	胎：灰黄褐	肥前、17C初	33
256	AW（11）75	磁器	碗	131				少片	釉：青磁釉	胎：灰白	輸入、鎬蓮弁文、14C後～15C	116
257	AW（11）75	陶器	碗			45		1/3	釉：白泥	胎：灰黄	肥前、17C後	112
258	AW（11）75　19	陶器	皿			53		1/3	釉：灰釉	胎：灰白	肥前、17C前	101
259	AW（11）75　17	陶器	皿	108				少片	釉：灰釉	胎：鈍い橙	肥前、17C前	102
260	AW（11）75	陶器	皿			37		完形	釉：灰釉	胎：灰白	肥前、17C前	104
261	AW（11）75	陶器	皿			43		2/3	釉：灰釉	胎：淡黄	肥前、17C末～18C後	113
262	AW（11）75	陶器	皿			43		1/5	釉：灰釉	胎：鈍い橙	肥前、17C前	114
263	AW（11）75-15・13・16・95	陶器	皿	195				1/3	釉：白泥	胎：浅黄橙	肥前、17C末～18C前	117
264	AW（11）75　8	陶器	擂鉢	269				少片	釉：鉄釉	胎：橙		96
265	AW（11）75　14	陶器	擂鉢	225				少片	赤灰	橙	肥前系	108
266	AW（11）75　18	陶器	擂鉢			83		1/6	赤褐	赤褐	肥前、17C後	109
267	AW（11）75　12	陶器	擂鉢					少片	鈍い赤褐	橙	須佐唐津？	111
268	AW（11）76	磁器	碗	132				1/2	釉：青磁釉	胎：灰白	輸入、14C	89
269	AW（11）76　7	磁器	碗					1/6	釉：透明釉	胎：灰白	肥前、17C中	88
270	AW（11）76　6	陶器	碗					1/2	釉：灰釉	胎：灰白	瀬戸美濃、16C	90
271	AW（11）76　5	陶器	皿	116				2/3	釉：透明釉	内：鈍い橙	肥前、17C中	87
272	AW（11）76	陶器	皿			32		1/3	釉：銅緑釉	胎：灰	肥前（波佐見）、17C前	91
273	AW（11）76	陶器	皿			38		1/4	釉：灰釉	胎：灰オリーブ	肥前、17C後	92
274	AW（11）76　3	陶器	皿			58		1/3	釉：灰釉	胎：灰黄	瀬戸美濃、16C後	103
275	AW（11）123南	磁器	碗	80	56	52		1/4	釉：透明釉	胎：灰白	肥前、コンニャク印判、18C中	131
276	AW（11）123北	磁器	碗	100	59	52		1/3	釉：透明釉	胎：灰白	肥前、18C前	148
277	AW（11）123	磁器	碗	102				1/6	釉：透明釉	胎：灰白	肥前、コンニャク印判、18C前	167
278	AW（11）123	磁器	碗			44		1/3	釉：透明釉	胎：灰白	肥前、17C中	170
279	AW（11）123北	磁器	皿	130				少片	釉：銅緑釉	胎：灰白	肥前（波佐見）、17C末～18C前	172
280	AW（11）123南	磁器	皿			42		完形	釉：銅緑釉	胎：灰白	肥前（波佐見）、17C末～18C中	129
281	AW（11）123南	磁器	皿			40		完形	釉：銅緑釉	胎：灰白	肥前（波佐見）、17C後	134
282	AW（11）123南	磁器	皿			40		1/4	釉：銅緑釉	胎：灰白	肥前（波佐見）、18C前	139
283	AW（11）123　2	磁器	皿			46		1/2	釉：銅緑釉	胎：灰白	肥前（波佐見）、17C後	147
284	AW（11）123北	磁器	皿			42		完形	釉：銅緑釉	胎：灰白	肥前（波佐見）、17C末～18C中	153
285	AW（11）123	磁器	皿			42		1/2	釉：銅緑釉	胎：灰白	肥前（波佐見）、17C末～18C前	169
286	AW（11）123	磁器	皿			40		1/3	釉：銅緑釉	胎：灰白	肥前（波佐見）、17C末～18C前	171
287	AW（11）123南	磁器	瓶類					少片	釉：透明釉	胎：灰白	肥前、17C後	138
288	AW（11）123南	磁器	瓶類			53		1/4	釉：透明釉	胎：灰白	産地不明、17C後	133
289	AW（11）123北	陶器	碗			45		1/2	釉：透明釉	胎：淡黄	肥前、17C後	151
290	AW（11）123南	陶器	碗			45		完形	釉：白泥	胎：浅黄	肥前、17C末～18C後	144
291	AW（11）123北	陶器	碗			46		1/2	釉：白泥	胎：鈍い赤褐	肥前、18C前	150
292	AW（11）123南	陶器	碗	118				1/5	釉：透明釉	胎：灰白	肥前、陶胎染付、17C後～18C前	145
293	AW（11）123南	陶器	碗			50		1/3	釉：白泥	胎：黄橙	肥前	158
294	AW（11）123	陶器	碗			50		1/2	釉：透明釉	胎：灰白	肥前（波佐見）、陶胎染付、18C中	168
295	AW（11）123	陶器	碗			52		1/9	釉：白泥	胎：赤褐	肥前、18C前	174
296	AW（11）123　61-1-f	陶器	皿	130	39	46		1/2	釉：銅緑釉	胎：灰白	肥前、17C末～18C後	75
297	AW（11）123南	陶器	皿	126	35	49		1/4	釉：銅緑釉	胎：灰白	肥前、17C末～18C後	130
298	AW（11）、123南	陶器	皿	115	38	48		1/3	釉：銅緑釉	胎：灰白	肥前、18C後～19C中	132
299	AW（11）123南	陶器	皿	122	36	52		2/3	釉：銅緑釉	胎：灰白	肥前、17C末～18C後	135
300	AW（11）123北	陶器	皿	130	40	40		1/2	釉：透明釉	胎：淡黄	京焼系、18C後、松竹梅	152
301	AW（11）123	土器	鉢			100		1/3	灰赤	明赤褐		146
302	AW（11）123南	陶器	擂鉢			110		1/4	灰赤	赤灰	肥前、17C後	137
303	AW（11）123北	陶器	擂鉢	318				1/7	釉：鉄釉	胎：褐灰	肥前、16C後～17C中	149
304	AW（11）123	陶器	擂鉢	260				1/9	釉：鉄釉	胎：褐灰	肥前、17C後	173
305	AW（11）123　3	石製品	行火								凝灰岩、外側被熱	164
306	AW（13）30 H9b	石器	磨製石斧								砂岩、欠損	N039
307	AW（13）30 H8下層	陶器	甕					少片	褐灰	褐灰	越前	N042
308	AW（13）30 G8c	磁器	碗	124				1/6	釉：透明釉	胎：灰白	輸入、16C前	N046
309	AW（13）30	磁器	碗	102				1/4	釉：透明釉	胎：灰白	肥前、17C後	T075
310	AW（13）30 H9b	磁器	碗	112				1/6	釉：透明釉	胎：灰白	肥前、17C後～18C前、コンニャク印判	T076
311	AW（13）30 H10b	磁器	碗			56		1/6	釉：青磁釉	胎：灰白	肥前	T055
312	AW（13）30 H8下層	磁器	碗			56		1/4	釉：青磁釉	胎：にぶい黄橙	輸入、16C後	N043
313	AW（13）30	磁器	碗			46		1/2	釉：青磁釉	胎：にぶい黄橙	肥前	T052
314	AW（13）30 H10b	磁器	碗			60		1/2	釉：青磁釉	胎：灰白	輸入、13C前半	T054
315	AW（13）30 H10b	磁器	皿	134	34	44		3/4	釉：透明釉	胎：灰白	肥前、18C	T077
316	AW（13）30 H10b	磁器	皿	142				1/3	釉：銅緑釉	胎：灰白	肥前（波佐見）、18C	T053

掲載番号	出土地点	種類	器種	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	重量(g)	残存率	外面色調または釉薬	内面色調または胎土	備考	実測番号
317	AW（13）30	磁器	皿			46		3/4	釉：透明釉	胎：灰白	肥前（波佐見）、18C	T078
318	AW（13）30　上層	磁器	皿			44		1/2	釉：透明釉	胎：灰白	再興九谷、19C	N033
319	AW（13）30　上層	磁器	皿			40		完形	釉：透明釉	胎：灰白	肥前、17～18C	N034
320	AW（13）30　上層	陶器	碗	110	71	55		1/4	釉：透明釉	胎：灰	肥前、陶胎染付、18C	N035
321	AW（13）30　I10	陶器	碗	108				1/4	釉：透明釉	胎：灰白	肥前、17C後	N037
322	AW（13）30	陶器	碗		65	42		1/4	釉：白泥	胎：褐灰	肥前（現川）、@C後	T084
323	AW（13）30	陶器	碗			46		1/2	釉：透明釉	胎：灰黄	肥前、17C後～18C前	N030
324	AW（13）30　上層	陶器	碗			48		完形	釉：透明釉	胎：灰白	肥前、17C後～18C前	N036
325	AW（13）30 H9d	陶器	碗			50		1/4	釉：透明釉	胎：灰白	肥前	N047
326	AW（13）30 H9d	陶器	皿	130				1/3	釉：銅緑釉	胎：灰白	肥前、18C前	T089
327	AW（13）30　上層	陶器	皿	122				1/4	釉：銅緑釉	胎：褐灰	肥前、17C後～18C前	N032
328	AW（13）30 H9d	陶器	皿			70		1/3	釉：灰釉	胎：にぶい黄橙	肥前、17C前、胎土目	N048
329	AW（13）30　I10c	陶器	皿			49		完形	釉：灰釉	胎：灰白	肥前、17C前、砂目	N044
330	AW（13）30 H9d	陶器	皿			44		完形	釉：銅緑釉	胎：灰白	肥前、18C前	T085
331	AW（13）30 H9d	陶器	皿			66		1/2	釉：銅緑釉	胎：灰白	肥前、18C前	T086
332	AW（13）30 H9b	陶器	甕					1/2	にぶい橙	灰白	越前	N040
333	AW（13）30 H9d	陶器	甕					少片	にぶい黄橙	灰白	越前	N049
334	AW（13）30　上層	陶器	燗鍋	139				1/3	釉：透明釉	胎：灰黄	京信楽？、19C	N031
335	AW（13）30 H9b	陶器	擂鉢			100		1/2	褐灰	褐灰	肥前？	N038
336	AW（13）30 H9d	土製品	土錘	37	36	34	37	完形	胎：にぶい橙			T079
337	AW（13）30　I10c	石製品	石鉢					1/4			欠損	N050
338	AW（13）30b	陶器	碗	110				1/9	釉：白泥	胎：赤褐	肥前（現川）、17C後	T088
339	AW（13）75	石器	打製石斧	148	76	39	473	完形				T155
340	AW（13）75	磁器	碗	87	61	38		完形	釉：透明釉	灰白	肥前、18C前、コンニャク印判	T154
341	AW（13）75	陶器	碗					少片	釉：灰釉	胎：灰黄	肥前、17C後～18C前	T152
342	AW（13）75	陶器	擂鉢	300				少片	釉：鉄釉	胎：黄灰	肥前系、17C前	T136
343	AW（13）75	陶器	擂鉢	310				少片	釉：鉄釉	胎：灰白	肥前、18C前、卸目12本	T153
344	AW（13）75	石製品	行火								欠損	T150
345	AW（13）75	石製品	炉縁石								欠損	T147
346	AW（13）75	石製品	炉縁石								欠損	T148
347	AW（13）207	土師器	皿	110	22			1/3	にぶい黄橙	にぶい黄橙	17C	N126
348	AW（13）207	土師器	皿	125	26	77		完形	浅黄橙	浅黄橙	17C	N225
349	AW（13）207	土師器	皿	112	24			1/6	にぶい黄橙	にぶい黄橙	17C	N226
350	AW（13）207	土師器	皿	134	27	87		1/3	にぶい黄橙	にぶい黄橙		N227
351	AW（13）207　I9d	磁器	碗	110				1/4	釉：青磁釉	胎：灰白	肥前	N115
352	AW（13）207　I9d	磁器	碗	85				1/5	釉：透明釉	胎：白灰	肥前、17C後	N116
353	AW（13）207	磁器	碗			54		1/2	釉：透明釉	胎：灰白	肥前、18C、コンニャク印判	T142
354	AW（13）207　I9d	磁器	皿	120	34	42		3/4	釉：透明釉	胎：にぶい橙	肥前、18C前	N112
355	AW（13）207　I9d	陶器	碗	104	64	45		1/3	釉：透明釉	胎：にぶい黄橙	肥前、陶胎染付、18C	N113
356	AW（13）207　I9d	陶器	皿	130				1/4	釉：灰釉	胎：灰黄褐	肥前、17C前	N114
357	AW（13）207	陶器	皿			45		完形	釉：灰釉	胎：にぶい黄橙	肥前、17C前	N125
358	AW（13）207　I9d	陶器	向付	63	82			1/3	釉：灰釉	胎：灰	肥前、17C前、絵唐津	N117
359	AW（13）207　表面	陶器	瓶					3/5	釉：錆釉	胎：黄灰	肥前	N132
360	AW（13）207　I9c	陶器	瓶					1/3	釉：灰釉	胎：灰褐	肥前、17C前	N118
361	AW（13）501	中世土師器	皿	82				1/6	浅黄橙	浅黄橙		T221
362	AW（13）501	陶器	甕					少片	にぶい赤褐	灰黄褐		T204
363	AW（13）663	陶器	皿			64		1/3	釉：銅緑釉	胎：灰黄	肥前（波佐見）	T208
364	AW（14）3	土師器	皿	102				1/4	浅黄橙	浅黄橙		T3
365	AW（14）3・19	陶器	碗	88	67	50		完形	釉：灰釉	胎：淡黄	肥前、17C後、京焼風	T2
366	AW（14）3	陶器	碗	78	65	47		1/4	釉：白泥	胎：灰黄	肥前、17C後	N122
367	AW（14）3	陶器	丸皿	108	25	62		1/2	釉：灰釉	胎：灰黄	瀬戸美濃、大窯	N123
368	AW（14）7	磁器	瓶			54		1/5	釉：透明釉	胎：灰白	肥前、17C前～中	N130
369	AW（14）7	陶器	碗	88				1/7	釉：透明釉	胎：灰白	肥前、17C	N121
370	AW（14）12	陶器	甕			262		1/4	灰	灰	珠洲	T8
371	AW（14）12	土師器	皿					少片	にぶい黄橙	にぶい黄橙		T11
372	AW（14）12	磁器	碗			48		2/3	釉：透明釉	胎：灰白	肥前、17C後	T10
373	AW（14）12	陶器	皿			74		1/6	釉：灰釉	胎：淡黄	瀬戸美濃、16C前	T7
374	AW（14）12	陶器	皿			122		少片	釉：灰釉	胎：灰褐	肥前、二彩、17C後	T4
375	AW（14）12	陶器	瓶					少片	釉：鉄釉	胎：灰白	瀬戸美濃、16C	T6
376	AW（14）12	陶器	瓶子					1/6	釉：灰釉	胎：灰白	瀬戸美濃、14C後～15C前	N126
377	AW（14）52　南側	陶器	片口鉢			148		1/6	灰	灰	珠洲、14C	N18
378	AW（14）52	磁器	碗	104	66	64		2/3	釉：染付	胎：灰白	肥前、18C前	N15
379	AW（14）99	陶器	碗	86	58	40		1/6	釉：鉄・灰釉	胎：灰白	瀬戸美濃、18C	T34
380	AW（14）99	陶器	碗	100	68	46		1/6	釉：透明釉	胎：にぶい黄褐	肥前、18C前、陶胎染付	T36
381	AW（14）99	陶器	皿	96	20	34		1/3	釉：灰釉	胎：灰白	瀬戸美濃、波状口縁	T41
382	AW（14）99	陶器	皿			44		完形	釉：銅緑釉	胎：灰白	肥前、17C後～18C前	T42
383	AW（14）99	陶器	壷			104		完形	赤褐	褐灰	肥前、17C	T38
384	AW（14）99	石製品	行火								欠損	T39

遺存値に示した数値は、実測図に表された範囲内での遺存値であり、器形全体に対するものではない
法量の数値は遺存値の項目に「完」とない場合はすべて復元径である
色調は『新装　標準土色帳』に準拠した

第4章　総　　括

第1節　古代

第11次調査では、第10次調査で検出されていた古代の畝溝群や道路状遺構の続きが確認された。ここでは、既往の調査でもその存在が確認され、近年、周辺の発掘調査で明らかになった古代の建物について若干の所見を述べたい。

当調査区で検出されたAW（11）73は加賀の古代集落に多い竪穴建物とは形態が若干異なっている。類例として、上林新庄遺跡SK9512とSB9501、SK9343とSB9333［石川県野々市町教委・野々市町南部土地区画整理組合2000］、下新庄アラチ遺跡SI38とSB46、SI33とSB43、SI37とSB45［石川県野々市町教委・野々市町南部土地区画整理組合1999］、粟田遺跡掘立柱建物⑤と竪穴13［三浦2003］、三浦・幸明遺跡Dブロック竪穴05と掘立柱建物28、Fブロック竪穴03と掘立柱建物60・61［松任市教委1996］が挙げられる。また、類似したものとして、宿東山遺跡２号住［石川県立埋文センター1987］がある。

加賀の古代の集落では、８世紀段階での竪穴建物は９世紀前半に掘立柱建物に建て替えられる例が多いことから、このような形態の建物についても、同一地点での建て替えとする見方が多数である。実際、集落の動向について詳細な検討が行われている三浦・幸明遺跡では、Dブロック竪穴05は田嶋編年Ⅲ期、掘立柱建物28は田嶋編年Ⅳ期であり、Fブロック竪穴03は田嶋編年Ⅱ期、掘立柱建物60・61は田嶋編年Ⅴ期にそれぞれ比定され、同時展開ではないことを示す。このような例からすれば、AW（11）73も竪穴建物→掘立柱建物という変遷を辿ったものと理解されよう。しかし、この掘立柱建物とする柱穴を竪穴外柱穴として捉え、同一併存とみなすことはできないだろうか。無論、掘立柱建物とした柱穴と竪穴建物の間には硬化面なども見られず、関東で多く検出されている竪穴外柱穴を有する住居跡とは形態も異なる［多ヶ谷1999］。しかし、末松遺跡で確認されている集落が近江・丹波からの移住者で構成されていると考えられること［柿田2005］や、三納アラミヤ遺跡SA（1）120・121にみるカマドの位置［野々市町教委2006］などから、他方面の影響も考慮にいれなければならない。これについて現在のところ明確な答えを持たないが、粟田遺跡第15次調査区でもAW（11）73と同一の形態を持つものが多い。第15次調査区はピットだけで構成される掘立柱建物も周囲にピットをもたない竪穴状遺構もそれぞれ単独で確認されていることから、一時期だけ採用された建物なのだろう。今後類例を待って検討したい。

第2節　近世

第11・13・14次調査区では、近世の遺構が多数検出された。ここでは特に、溝遺構や石列・石積をもつ遺構を中心に検討したい。

概　観　近世の建物遺構として、掘立柱建物と竪穴状遺構が検出された。掘立柱建物で確実なものはAW（11）128の１棟しかなく、集落の主体は掘立柱建物ではないと考えられる。第13・14次調査区では石列・石積をもつ大型土坑が検出された。遺構の検出状況は、第13次調査区は遺構の重複が少なく、石列が複数列あるものや石積が確認される遺構が特徴的である。南側の第14次調査区は遺構の重複が激しいように見え、また石列をもつ遺構が少ない。これらは出土遺物から17世紀前半～18世紀前半に属する。また、全域で溝が検出された。

溝　群　粟田地区に残された耕地整理前の地籍図と第10次調査で確認された遺構の比較検討は［野々市町教委2006］で行った。今回も第３図－１に示したように、確認された溝は溝・道・畦畔でおおむねその痕跡を追うことができた。遺物は18世紀前半で激減することから、第10次調査で検討したように、18

世紀後半以降に集落が移動し、一帯はいずれも水田となったことが裏付けられた。なお、今回の調査区でも粟田集落移転のきっかけとされている、近世の洪水層は確認できなかった。

このように、本調査区全域で確認された近世の溝は、大小の区画を作り出している。この各区画をそれぞれ区画①～⑥とした。（第３図－２）区画②のみ②―１・２に分かれているのは、調査区が途切れるため、便宜的に付した。

石列・石積をもつ遺構　第13・14次調査区には、AW（13）506～509中央石列Ａ・Ｂのように石が平面的に一列に並べられるだけの「石列」と、AW（13）93石列Ａのように遺構の壁面に積まれる立体的な「石積」がある。いずれも人頭大の河原石を使用し、石の短軸を揃えて正面を作り出している。この石積は、正面から見るといわゆる「布積」である。石列が配される遺構は浅く石積は深い遺構となるわけではなく、AW（13）609は、石積が見られるAW（13）93･95と類似した深度だが石列しか見られない。石積の裏込については、AW（13）95東西トレンチではその痕跡は見られない。遺構覆土には、貼床と考えられる層が明瞭ではない。遺物は陶磁器のほか、スス痕をのこす方柱形の炉縁石の出土が見られる。遺構に伴う柱穴が内部に検出された例はない。

石列は、前述したAW（13）506～509のほか、AW（13）42･43、AW（13）211、AW（13）609、AW（13）664、AW（13）665、AW（13）459・（15）2149、AW（14）61、AW（14）82、AW（14）194のほか、AW（15）2420が該当する。これらの石列は、AW（15）2420とAW（14）194石列Ａのように遺構が離れていても直線的に並ぶものがある。AW（13）509に伴う中央石列ＡとAW（13）506に伴う中央石列Ｂは同一軸にあるようにみえるが、傾きは南北で若干異なる。しかし両者に大きなずれは見られず、区画③ではこの軸を大きく変更しないことが意識されていた可能性がある。いっぽう、同じ区画③内のAW（13）459・（15）2149内の南北石列はこのAW（13）506～509中央石列Ａ・Ｂの軸とずれるが、この遺構の西側ラインはもともと溝AW（15）2070に沿っているため、結果的に溝に規定されたものといえる。

また、区画⑥のAW（14）82石列Ａ・ＢとAW（14）61石列Ｂのように、同一軸上ではないが傾きが類似しているケースもある。この傾きは溝AW（15）2002と類似するため、区画⑥ではこの溝の向きが意識されていたものであろう。前述した区画②－２ではAW（14）194石列ＢとAW（14）240も石列の傾きがほぼ同じなので、区画②―２で軸が統一されているものと考えられる。

これらのことから、１つの「石列」は個別の遺構を構成するだけでなく、各区画内で一定の軸によって配置されていた可能性がある。この軸はすべての区画に共通していない。このため、それぞれの区画においては溝などの向きにより共通する軸が設定されたものの、それが集落全体に及ぶものではなかったことが分かる。また一方で、このように各区画内で石列の軸が共通することは、それぞれの遺構を単独のものと見るのではなく、複合してひとつの「家屋」を作っていた可能性も考えられる。特に近世の場合、地面に痕跡を残さない「整地→土台建て」という建築方法が考えられるだけに、その可能性は非常に高い。

前述の石列は１列だったが、AW（13）93･95の東側に見られるような、複数の列を作る石列もある。このような複数列はこの調査区内ではAW（13）93・95しかない。この複数列の部分は家屋内なのか外なのかが重要となってくるが、柱穴や礎石は確認できていないためどこまでが家屋内なのかは分からない。これらの石列のどれかが、上に横に木材を置き、その上に柱を立てるいわゆる「土台建ち」「根太立ち」の基礎の可能性もある。

一方、遺構内部壁に見られる「石積」は遺構壁が崩れないようにする土留の役割を果たしていたと思われる。広坂遺跡では遺構壁に石積を持つ遺構のうち、湧水層に及ばないものを「水溜」「室」「便所」などとしている［金沢市2007］。これらは石材が規格化されたものやそうでないもの、平面形が円形や長方形、石積方法も遺構底面からあるものと底面から少し浮いた位置から構築されているものなどさま

ざまである。粟田遺跡は扇状地扇央部に位置し、地下水位は低いため、自噴する井戸でなく水溜の可能性があるが、滞水に伴う層が確認されていないのでこの可能性は低い。井戸としてはAW（13）41のような枠と考えられるような木質が出土した遺構や、AW（13）121a～cのような深度が十分にあるものを考えている。この場合、集落内に井戸が非常に少ないことになるが、粟田遺跡が立地する扇状地扇央部の遺跡においては井戸が確認されない例も多く、自噴・滞水どちらにせよ井戸はもともと非常に少ないことが考えられる。

石列・石積をもつ遺構の類例　以下、石川・富山県の近世の遺跡において石列・石積をもつ遺構を見ていきたい。なお、類例は集落遺跡の建物遺構を中心としてみていくこととする。

金沢市木ノ新保遺跡［石川県教委・㈶石川県埋文センター2002a］では18世紀後半の礎石建物、昭和町遺跡［金沢市教委2001・2003・2004］では18世紀以降の礎石建物、広坂遺跡［金沢市2007］では礎石建物と土台建物が検出され、前者は17世紀前半、後者は18世紀以降と考えられている。木ノ新保遺跡のSB01はピットに小砂利が充填された状態で、柱を直接受ける礎石は抜かれていた。昭和町遺跡では木ノ新保遺跡のようにピットに小砂利を充填する第２次SB05・06と、ピットを伴わない、等間隔に大振りの石を敷く第２次SB01・02がある。広坂遺跡の礎石建物ⅣSB1001～1003は大きめの石を地面にそのまま置いたものと小砂利の上に置いたものの２種類ある。土台建物ⅣSA1006は礫敷きの下部に大振りの川原石を等間隔に敷いたものである。小砂利の有無など細かい差異はあるが、大きめの石を等間隔に置く、というのが共通した形態で、これは粟田遺跡では見られない。

以上はいずれも城下町の遺跡で、粟田遺跡のような農村部の調査例は、中能登町谷内ブンガヤチ遺跡［栃木1995］と野々市町御経塚遺跡デト地区［石川県野々市町教委・野々市町御経塚第二土地区画整理組合2003］がある。御経塚遺跡デト地区SB36は礎石建物である。小砂利を敷く柱穴と大きめの石をひとつ置いた遺構が溝に沿って同一線上に並んでおり、異なる手法の遺構が同一建物に採用されている例となる。どちらの遺跡にも近世の竪穴遺構と考えられるものはなく、谷内ブンガヤチ遺跡の石敷遺構は中世の室とされている。

いっぽう富山県では、梅原護摩堂遺跡［富山県文化振興財団1994］、江尻遺跡［㈶富山県文化振興財団2003］南中田Ｄ遺跡［富山県埋文センター1992］、中名Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ遺跡［婦中町教委1995、富山県文化振興財団2002・2003］、矢張下島遺跡［南砺市教委2007］で粟田遺跡の石列・石積を伴う大型土坑に類似した遺構が検出されている。

梅原護摩堂遺跡では17～18世紀の、縁辺部に石列を伴った大型の土坑を「土台建物」として抽出している。遺構の外側には「転ばし根太」の基礎とされる石列があり、これは全周しない。しかし、根太の痕跡が見られないなど検討の余地も大きいと言われている。江尻遺跡では18世紀後半～19世紀の「土台建物」が検出されているが、これは石列や礫敷を伴わない。南中田Ｄ遺跡では近世の建物として内部に２×２間の礎石状の円礫をもち両側に石列を伴う遺構が確認されている。中名Ⅰ・Ⅴ遺跡では17世紀の石組をもつ土坑を土台建物と考えている。梅原護摩堂遺跡や中名Ⅰ・Ⅴ遺跡は木ノ新保遺跡や昭和町遺跡のようにピットをもたない点で粟田遺跡の竪穴遺構に類似する。矢張下島遺跡では17～18世紀の掘立柱建物内の土坑に石列が確認され、さらにそこから伸びる溝状遺構も両側に石列をもつ。

これらの遺跡では、石列・石積に使用した礫の大きさや並べ方は類似する部分があるが、梅原護摩堂遺跡に見られるような貼床は粟田遺跡では明瞭でない。遺構の平面積も、梅原護摩堂遺跡の「土台建物」は平面積が135㎡・165㎡・300㎡など非常に大きく、粟田遺跡の最も平面積の大きいAW（13）42ですら10.89㎡と梅原護摩堂遺跡の10分の１にも満たない。前述したように、複数の遺構間で共通した軸が検出されていることから、粟田遺跡でもこのような石列・石積の遺構を単独で存在すると見るのではなく、他の遺構と組み合わせてひとつの建物と考える必要がある。また、粟田遺跡では矢張下島遺跡のように上屋と考えられる掘立柱建物も確認されていないが、粟田遺跡でも多数のピットが検出されている

ことから、近世の掘立柱建物がAW（11）128以外にも存在する可能性は考慮しなければならない。

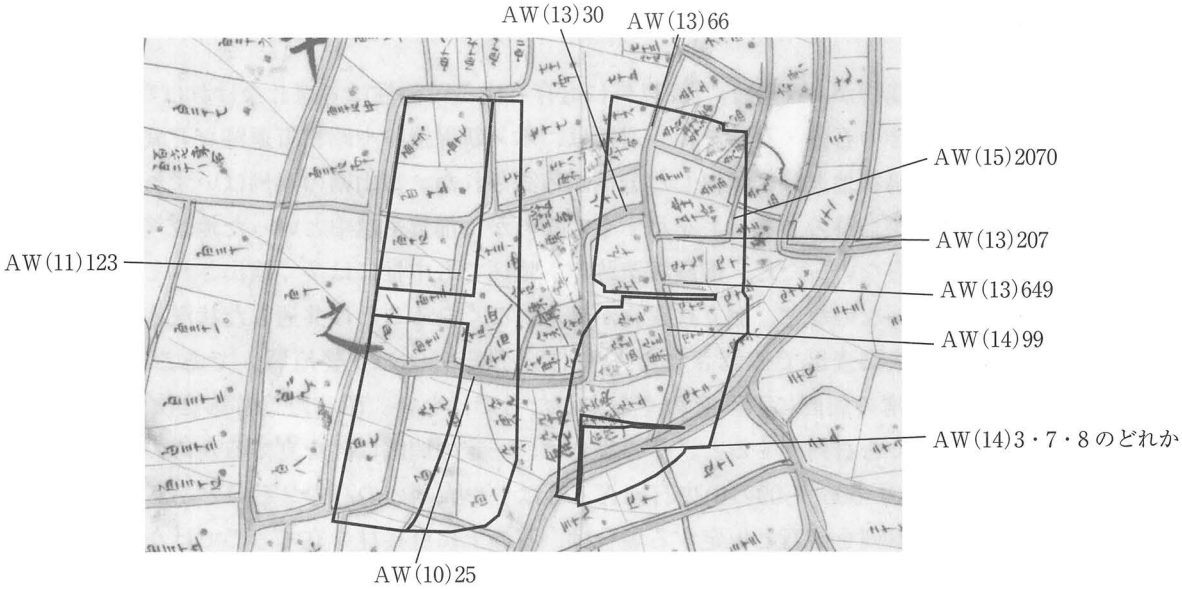
以上のように、粟田遺跡の石列・石積を伴う遺構は、木ノ新保遺跡や昭和町遺跡など城下町遺跡には類例に乏しく、富山県の扇状地遺跡に類似した遺構が確認された。富山県の事例はいずれも農村部の集落遺跡であり、この状況が当時の「農村」を示すものなのか、加賀や越中といった地域差があるのかなどは、類例が少なく分からない。ただ、御経塚遺跡デト地区でも中世には多く検出されていた掘立柱建物が近世には検出されていないなど、掘立柱建物が見られなくなることは共通した状況と考えられる。

「整地層」と石列　第13次調査区で確認されたAW（13）506～509の「整地層」であるが、AW（13）93に見られるような、遺構の周囲に石列をめぐらすかたちではない。昭和町遺跡第２次SB01・02のようにこの石列が礎石をふくむ石列とすると、その場合は、一定の間隔に柱を立てるための大きめの石が配される。しかしAW（13）506～509の中央石列Ａ・Ｂはやや大きめの石も２石ほどあるが間隔は特に取れない。よって、この石列を礎石と仮定する場合は、石の上に直接柱を立てるのではなく、この石列の上に木材をわたしてそこに柱を立てた可能性が考えられる。

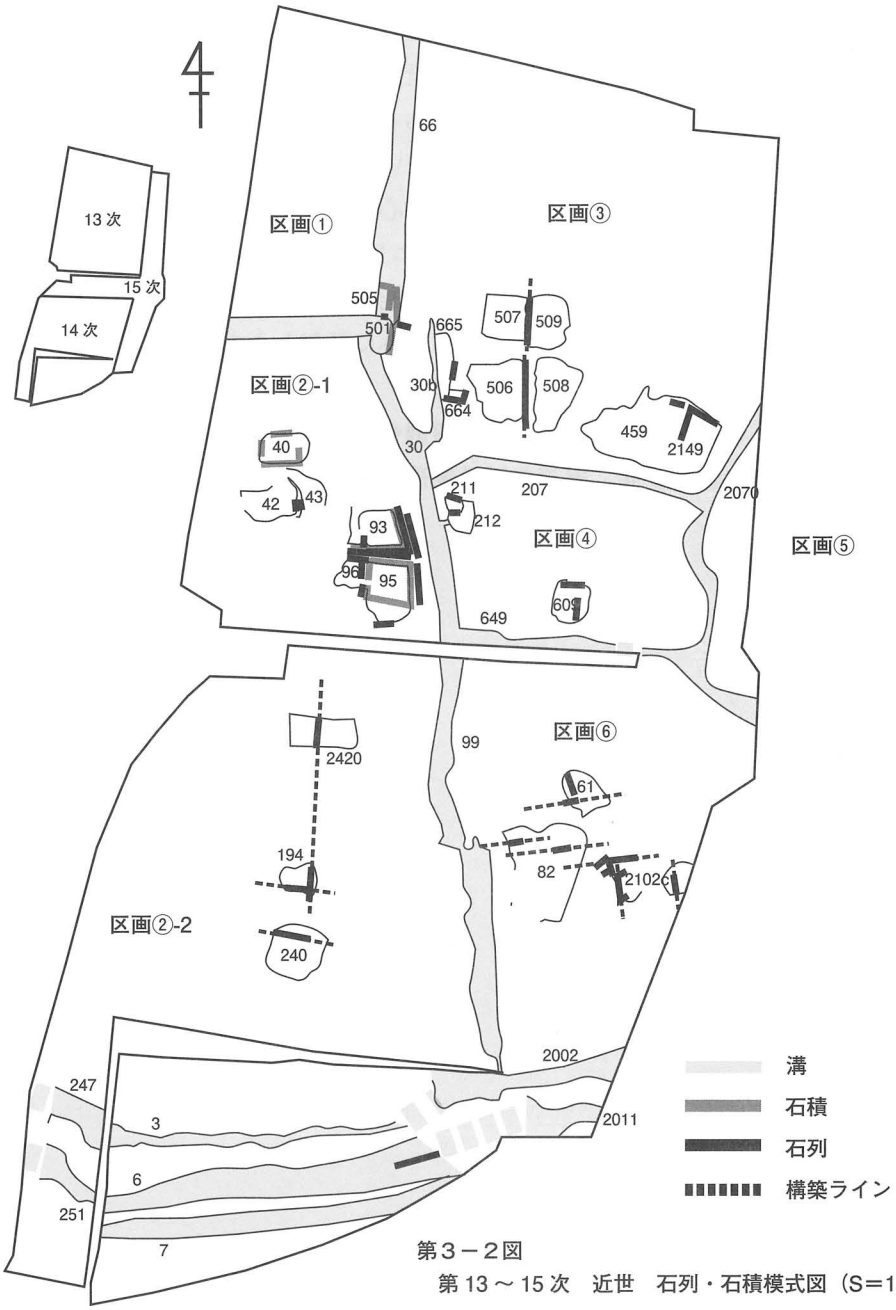
梅原護摩堂遺跡の「土台建物」は「竪穴が埋め戻され整地されている」ことが重要な要因として挙げられている。AW（13）506～509は整地層こそ検出されているが中央石列Ａ・Ｂは一列しか検出されておらず、むろんこれだけでは建物にはなりえない。近世民家における「石列」は、外壁を支える土台基礎であるのはもちろん、敷地の整地盛土を巡る石垣であったり、建物敷地と庭などの境界であったりする場合もあり、この石列はそのような例も含めて考えていきたい。

まとめにかえて　以上、第10・11・13～15次調査区を中心に、粟田遺跡における近世建物遺構について概観した。今次調査区の近世遺構では、溝で区画されたエリアごとに石列の軸が類似していることから、それらが複合して溝内でひとつの家屋を形成している可能性があることや、石列・石積をもつ建物遺構が梅原護摩堂遺跡や中名Ⅰ・Ⅴ遺跡など、富山の集落遺跡に類似したものが見られることなどを明らかにした。

今後は、粟田遺跡のような扇状地扇央部における類例や、扇状地扇端部に位置する三日市Ａ遺跡などの野々市町北西部遺跡群の比較と併せ、周辺の近世集落の状況について考えていきたい。



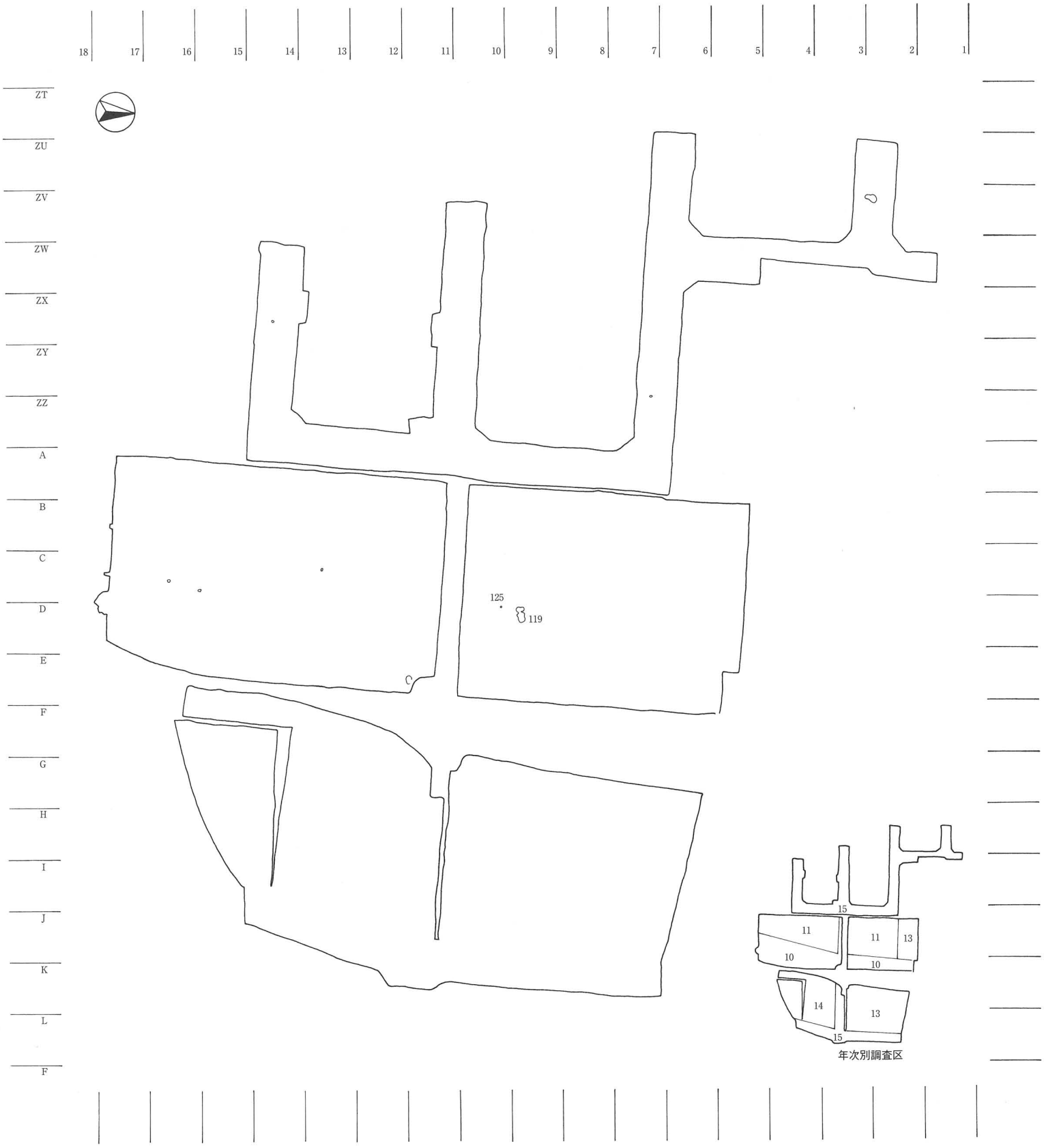
第３－１図　粟田地区地籍図（粟田遺跡調査区、遺構名含む）（S＝1/1,000）



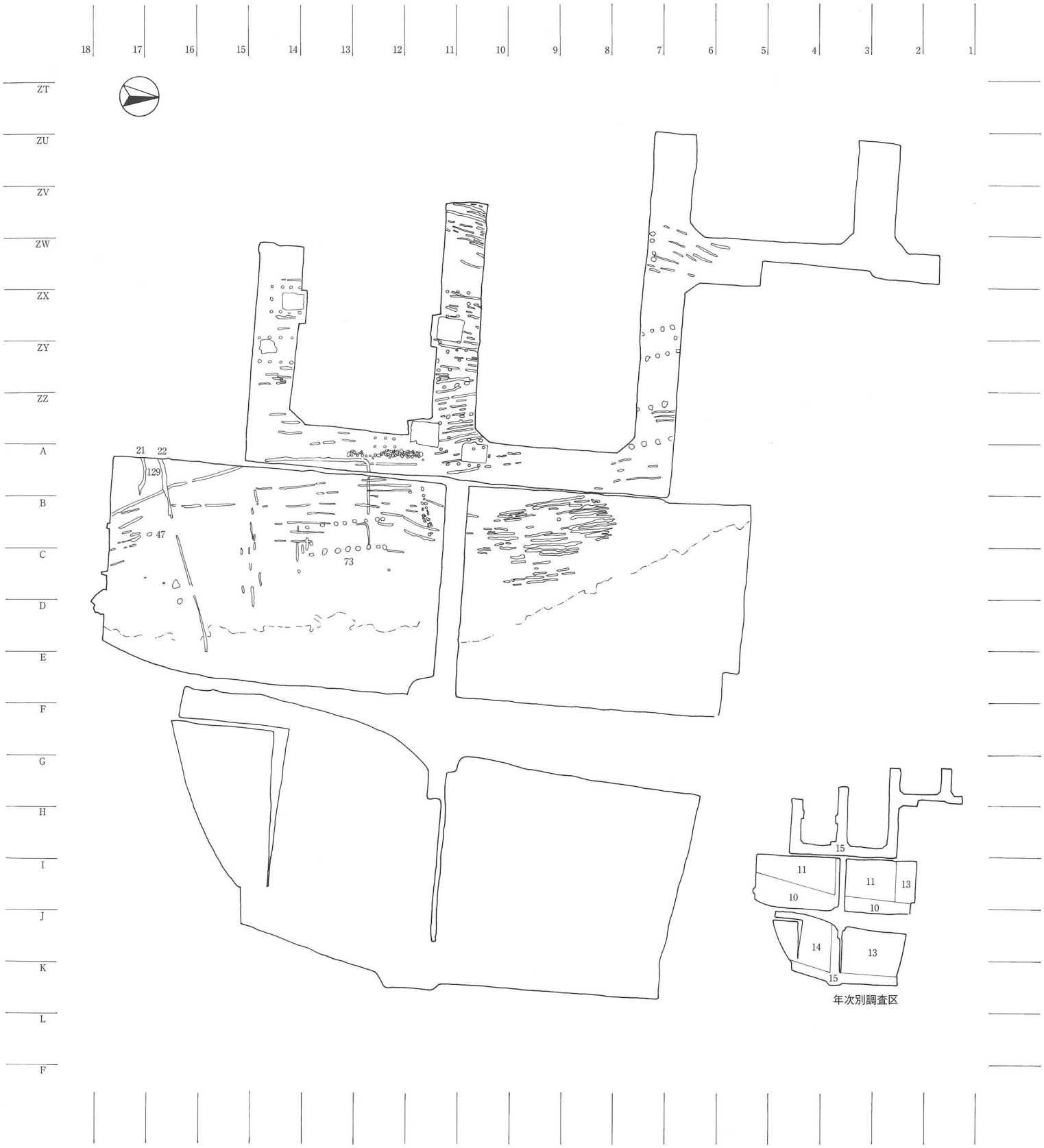
第３－２図
第 13 ～ 15 次　近世　石列・石積模式図（S＝1/600）

引用・参考文献

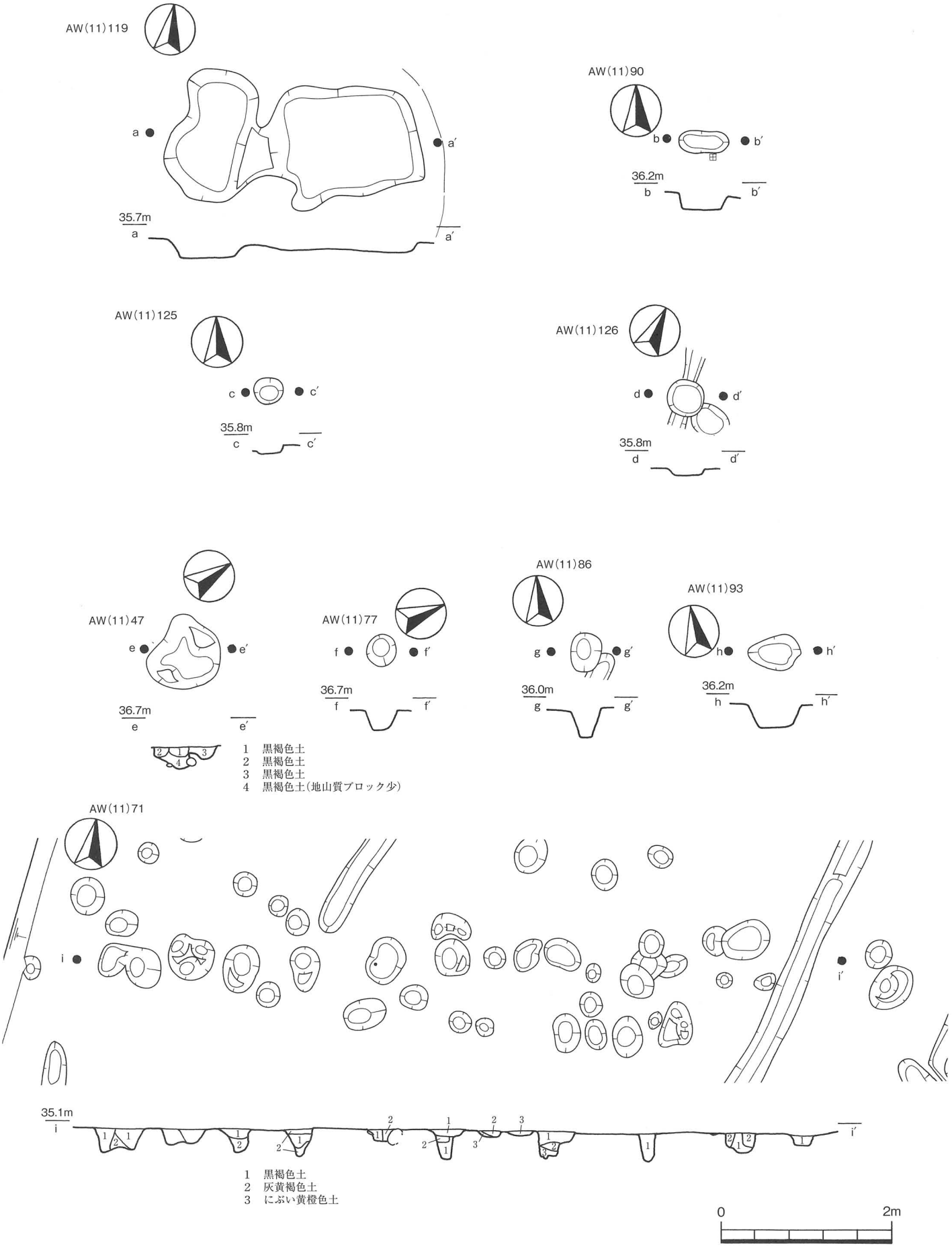
石川県教育委員会・㈶石川県埋蔵文化財センター　2002a　『金沢市木ノ新保遺跡』
石川県教育委員会・㈶石川県埋蔵文化財センター　2002b　『藤江Ｃ遺跡Ⅳ・Ⅴ』
石川県教育委員会・㈶石川県埋蔵文化財センター　2005　『末松遺跡』
石川県野々市町教育委員会　1992　『粟田遺跡第二次発掘調査報告書』
石川県野々市町教育委員会　2000　『粟田遺跡藤平地区・清金アガトウ遺跡』
石川県野々市町教育委員会・野々市町南部土地区画整理組合　1998　『上新庄ニシウラ遺跡』
石川県野々市町教育委員会・野々市町南部土地区画整理組合　1999　『下新庄アラチ遺跡』
石川県野々市町教育委員会・野々市町南部土地区画整理組合　2000a　『上林新庄遺跡・上林古墳・上林テラダ遺跡・下新庄タナカダ遺跡』
石川県野々市町教育委員会・野々市町御経塚第二土地区画整理組合　2000b　『長池キタノハシ遺跡』
石川県野々市町教育委員会・野々市町御経塚第二土地区画整理組合　2003　『御経塚遺跡Ⅲ』
石川県野々市町教育委員会・野々市町中南部土地区画整理組合　2006　『粟田遺跡・三納アラミヤ遺跡・三納トヘイダゴシ遺跡』
石川県野々市町教育委員会・野々市町中南部土地区画整理組合　2008　『粟田遺跡』
石川県立埋蔵文化財センター　1987　『宿東山遺跡』
石川県立埋蔵文化財センター　1988　『寺家遺跡発掘調査報告Ⅱ』
石川県立埋蔵文化財センター　1990　『北安田北遺跡Ⅲ』
上田秀夫　1982　「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』２　日本貿易陶磁学会
小野正敏　1982　「15～16世紀の染付碗、Ⅲの分類と年代」『貿易陶磁研究』２　日本貿易陶磁学
柿田祐司　2005　「第４章第２節　古代前半期の末松Ａ遺跡」『末松遺跡』石川県教育委員会・㈶石川県埋蔵文化財センター
金沢市教育委員会　2001　『金沢市昭和町遺跡Ⅰ』
金沢市　2007　『広坂遺跡（１丁目）Ⅳ（近世編２）』
北野博司　1997　「古代北陸の地域開発と出羽」『蝦夷・律令国家・日本海』日本考古学協会1997年度秋田大会実行委員会
北野博司　2002　「初期庄園と在地社会」『条里制・古代都市研究会』18
九州近世陶磁学会　2000　『九州陶磁の編年』
九州近世陶磁学会　2001　『国内出土の肥前陶磁』
小松市教育委員会　2002　『二ツ梨一貫山窯跡』
㈶石川県埋蔵文化財センター　2000　『野々市町末松遺跡群』
㈶富山県文化振興財団　1994　『梅原護摩堂遺跡発掘調査報告（遺構編）』
㈶富山県文化振興財団　2003　『中名Ⅰ・Ⅴ遺跡発掘調査報告』
㈳石川県埋蔵文化財保存協会　1991　『粟田遺跡発掘調査報告書』
多ヶ谷香理　1999　「竪穴外柱穴から壁立式住居といえるのか」『土壁』３　考古学を楽しむ会
田嶋明人　1988　「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題（報告編）』
田嶋明人　1997　「加賀地域での10・11世紀代の土器様相」『北陸の10・11世紀代の土器様相』
栃木英道　1995　「谷内ブンガヤチ遺跡」『谷内・杉谷遺跡群』石川県立埋蔵文化財センター
服部実喜　2001　「第一節　南関東地域における中近世建物遺構の変遷」『埋もれた中近世の住まい』同成社
藤澤良祐　2008　『中世瀬戸窯の研究』　高志書院
藤田邦雄　1997　「第２節　中世加賀国の土師器様相」『中・近世の北陸』　北陸中世土器研究会
北陸中世考古学研究会　2004　『掘立柱建物から礎石建物へ』
前田清彦　1996　「第Ⅲ章　中層検出面の調査」『松任市三浦・幸明遺跡』松任市教育委員会
松任市教育委員会　1990　『北安田北遺跡Ⅱ』
松任市教育委員会　1992　『北安田北遺跡Ⅳ』
松任市教育委員会　1994　『北安田北遺跡Ⅰ』
松任市教育委員会　1996　『松任市三浦・幸明遺跡』
松任市教育委員会　1998　『北安田キタドウダ遺跡』
三浦純夫　2003　「粟田遺跡」『野々市町史資料編１』野々市町
横山貴広　2003ａ　「第二節　奈良後期～平安期の集落」『野々市町史資料編１』野々市町
横山貴広　2003ｂ　「扇状地における新興開発領主層の台頭とその後の展開」『富山大学考古学研究室論集　蜃気楼』秋山進午先生古稀記念論集刊行会
吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』　吉川弘文館
吉田　淳　2003　「第２節⑶　出土遺物」『野々市町史』資料編１



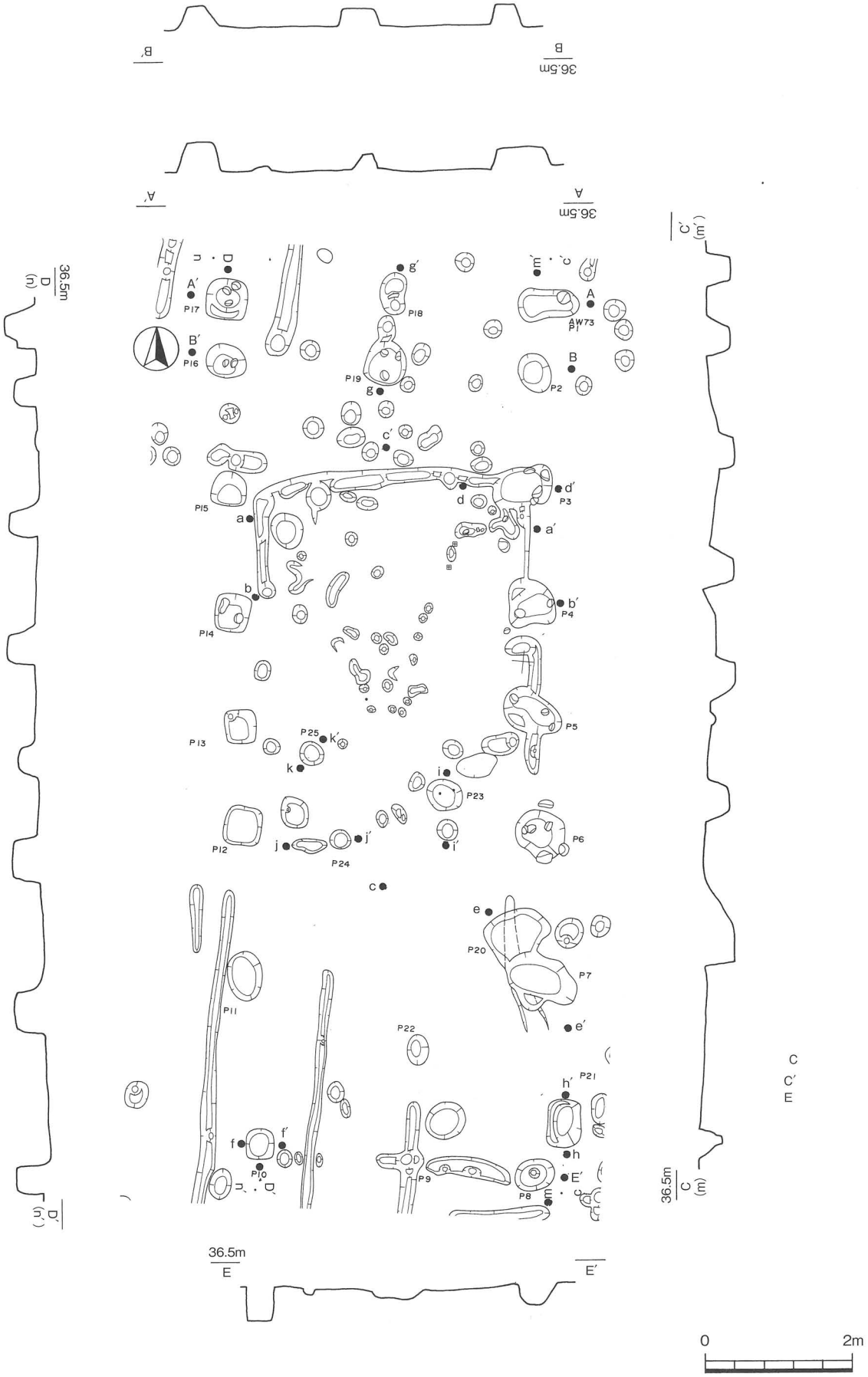
第４図　縄文～古墳時代　遺構分布図　（S＝1/1000）



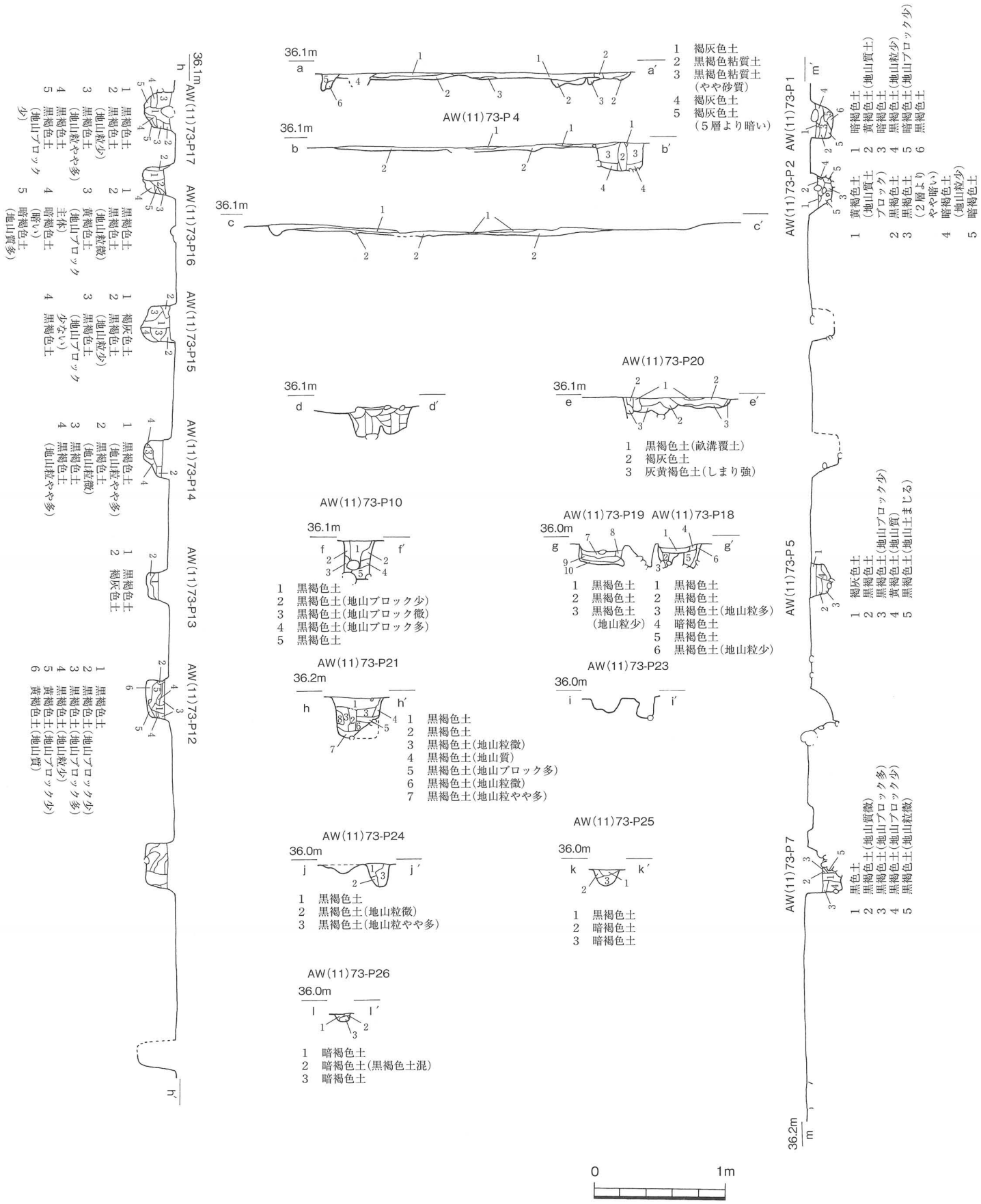
第５図　古代　遺構分布図　（S＝1/1000）



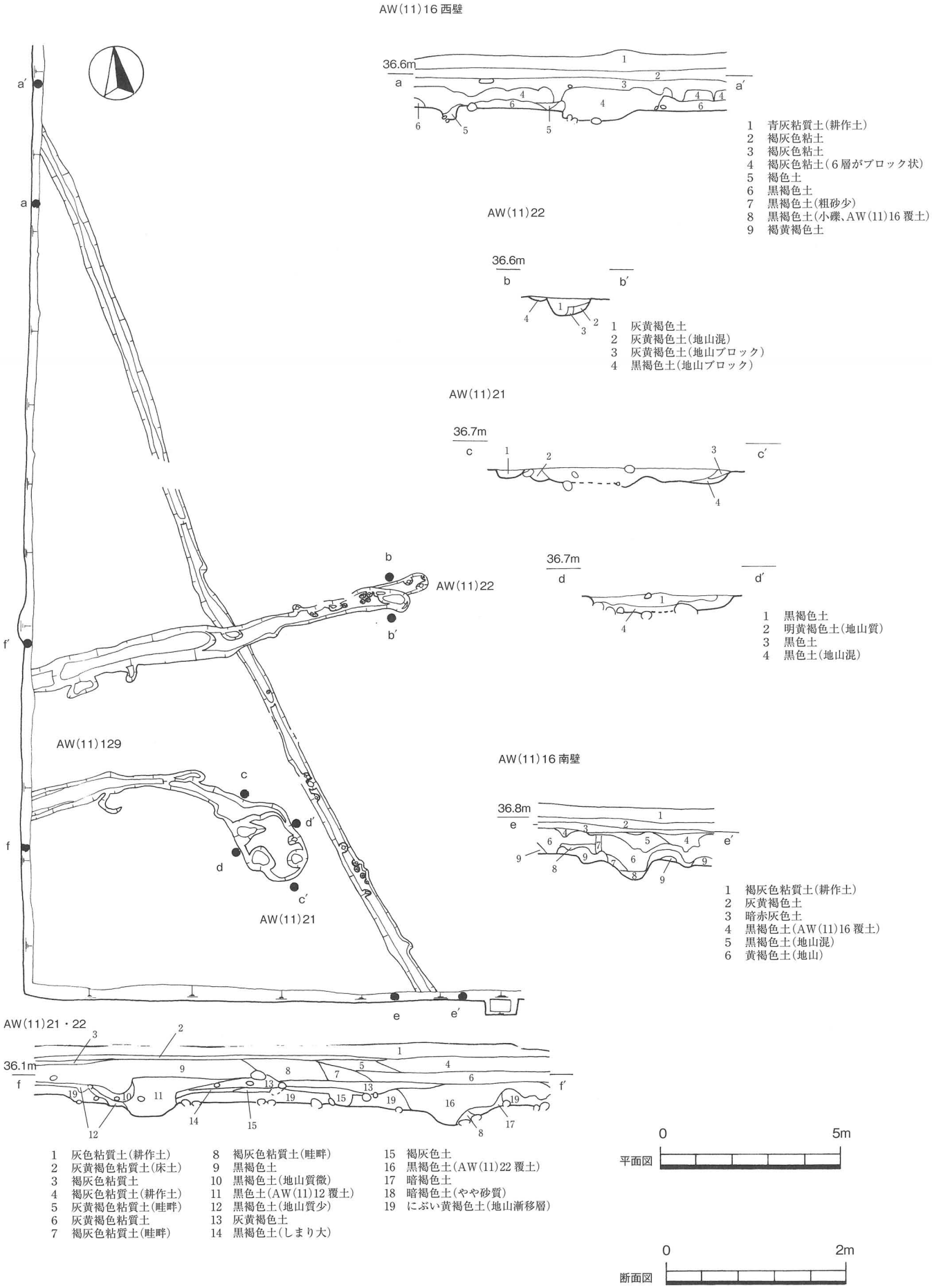
第6図　遺構実測図　土杭 AW(11)119、ピット AW(11)90・125・126・47・77・86・93、柵列 AW(11)71(1/60)



第７図　遺構実測図　掘立柱建物 AW(11)73　(1/0)



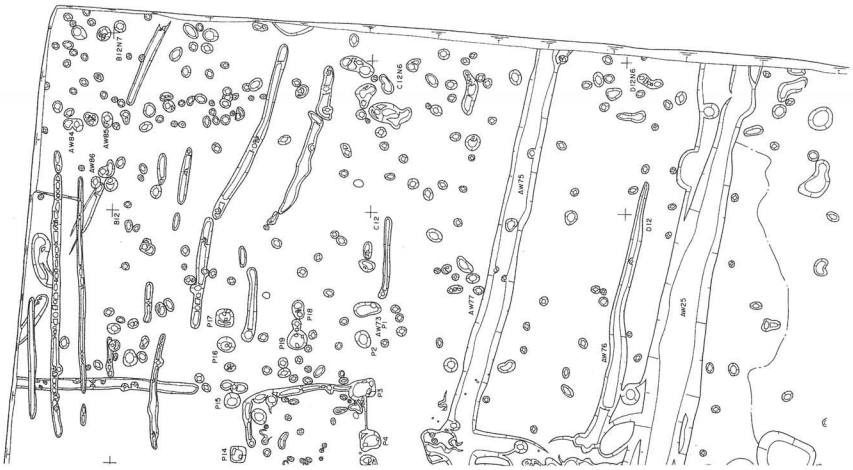
第８図　遺構実測図　掘立柱建物 AW(11)73　(1/40)



第9図　遺構実測図　道路状遺構 AW(11)129、溝 AW(11)16　(1/60)

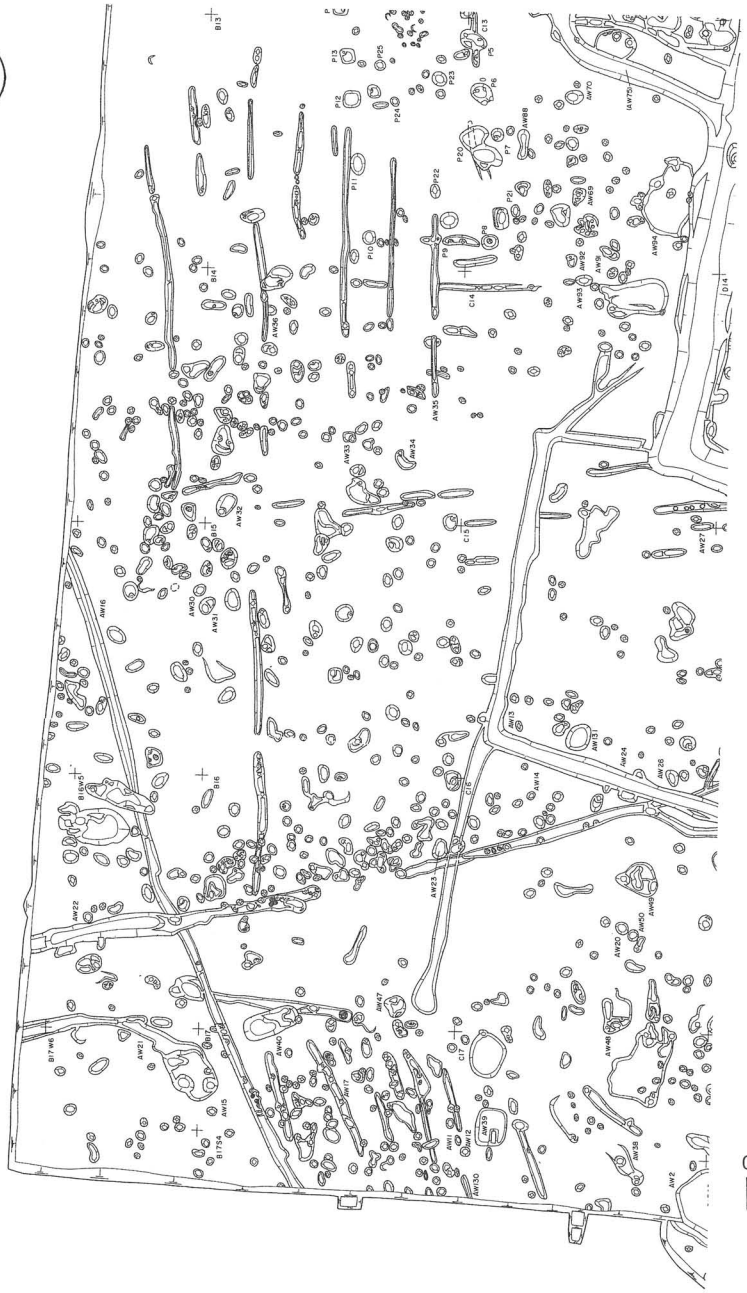
第10図　遺構実測図　自然河道、AW(11)平行溝群A　(1/300)

平行溝群B



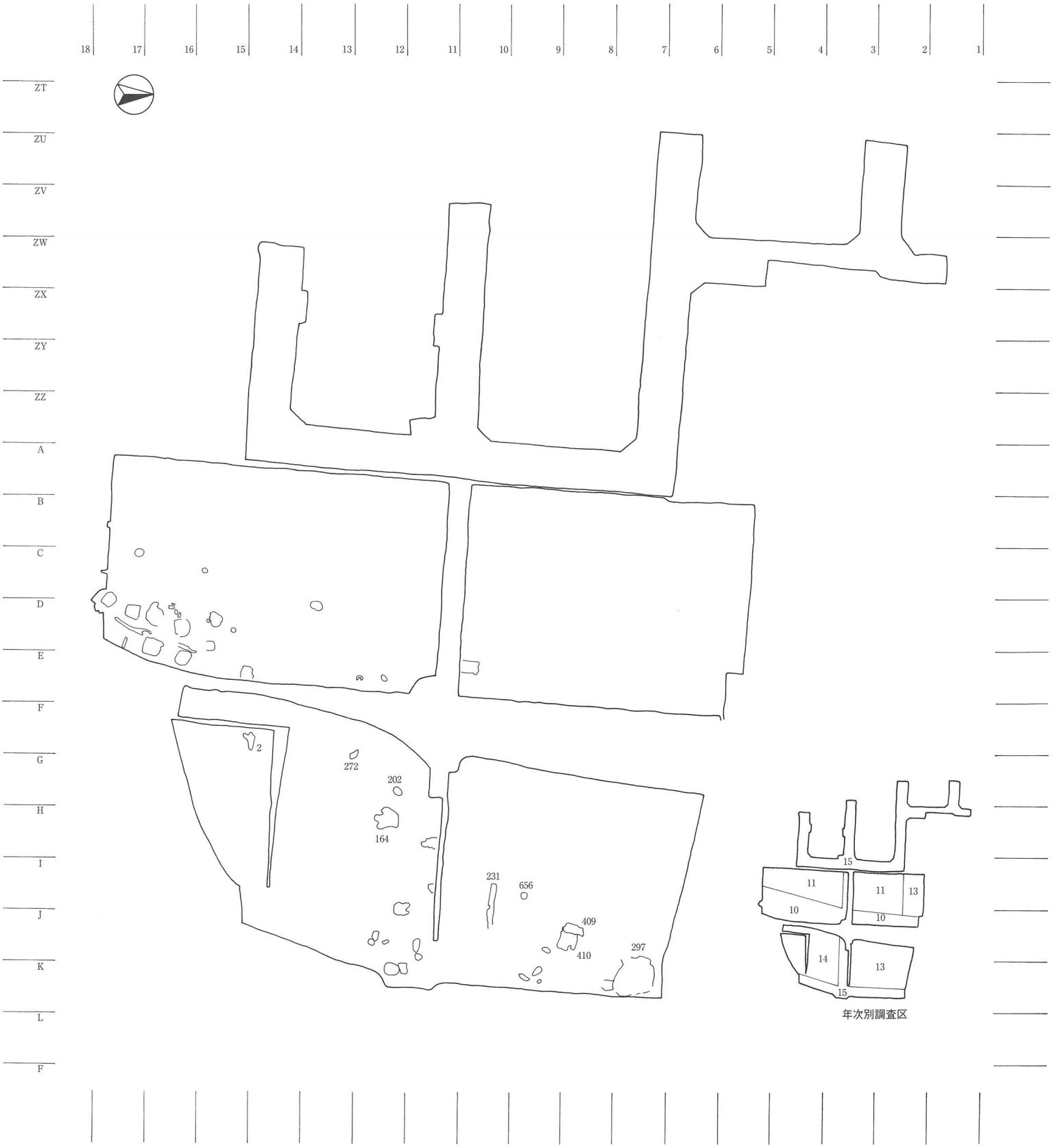
平行溝群C

平行溝群D

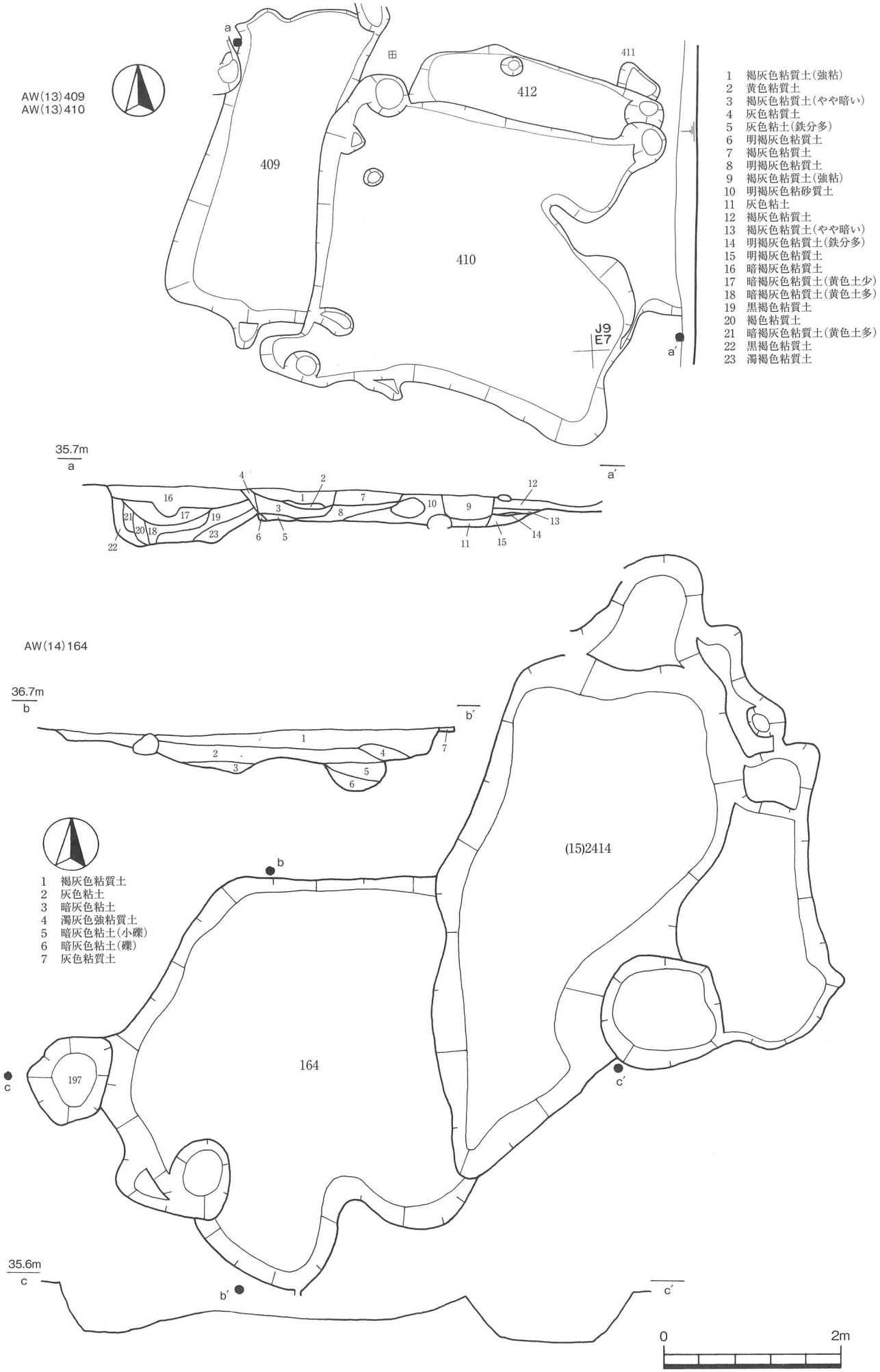


0　10m

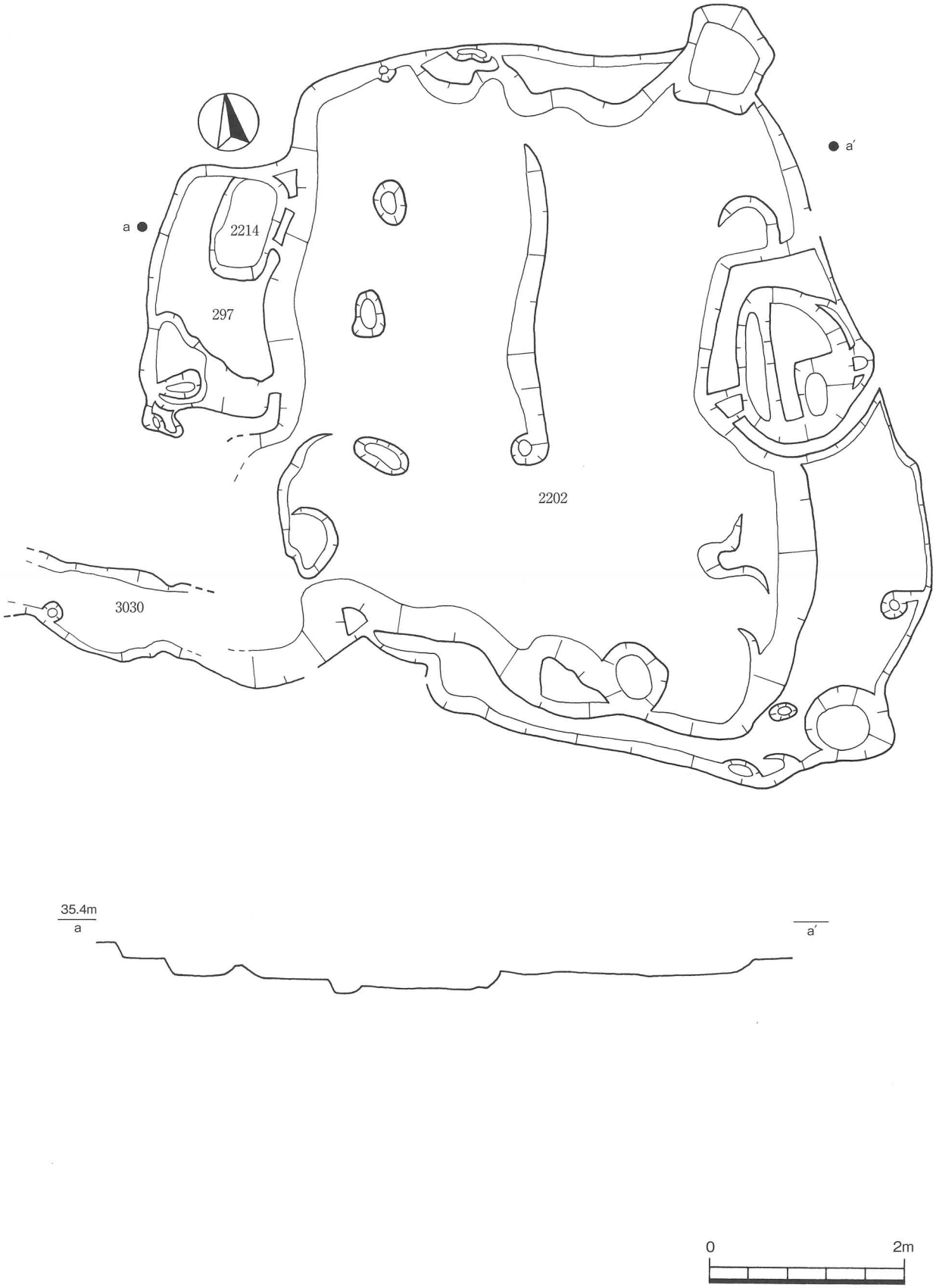
第11図　遺構実測図　AW(11)平行溝群B・C・D　(1/300)



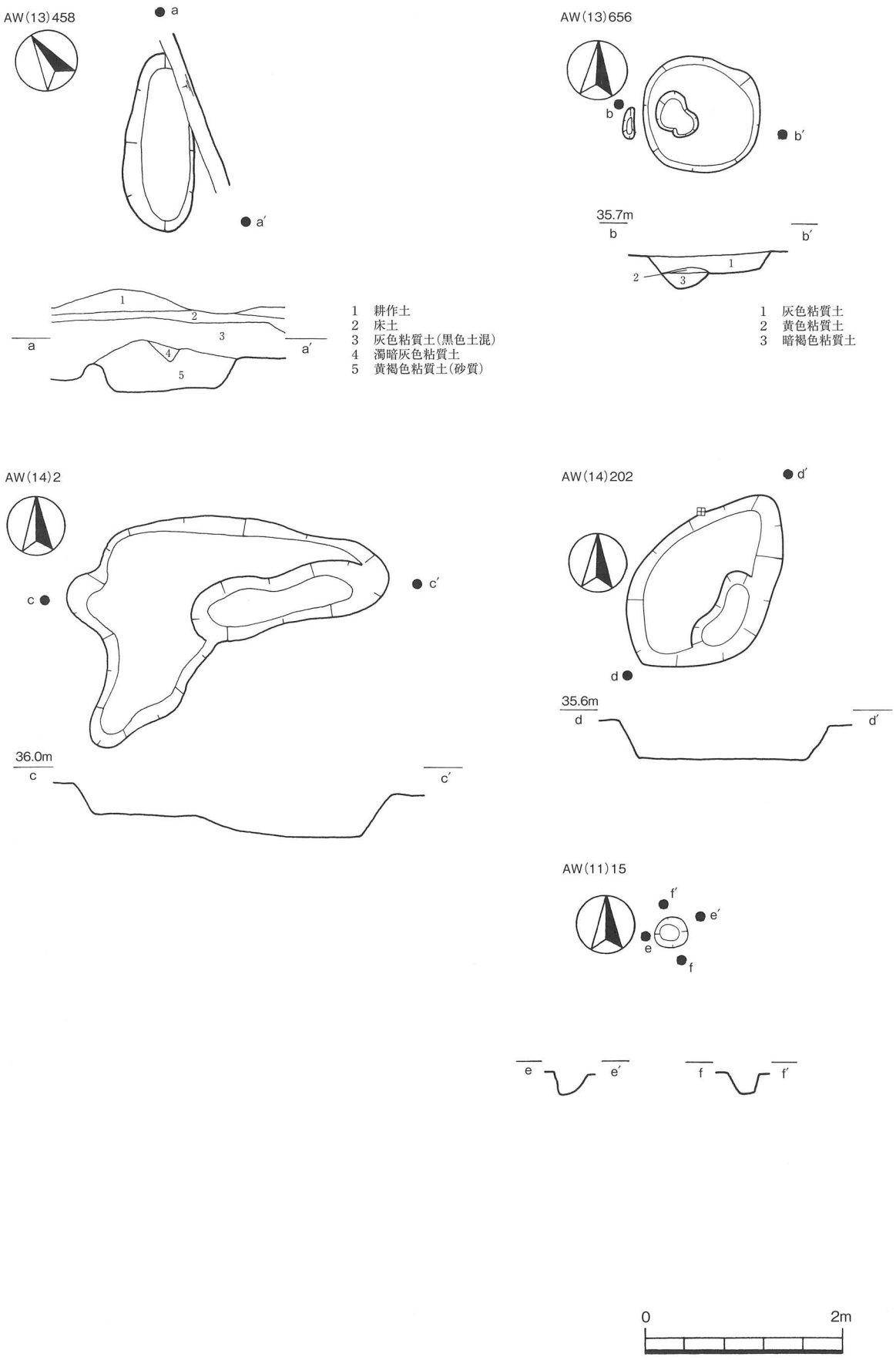
第 12 図　中世　遺構分布図　（S＝1/1000）



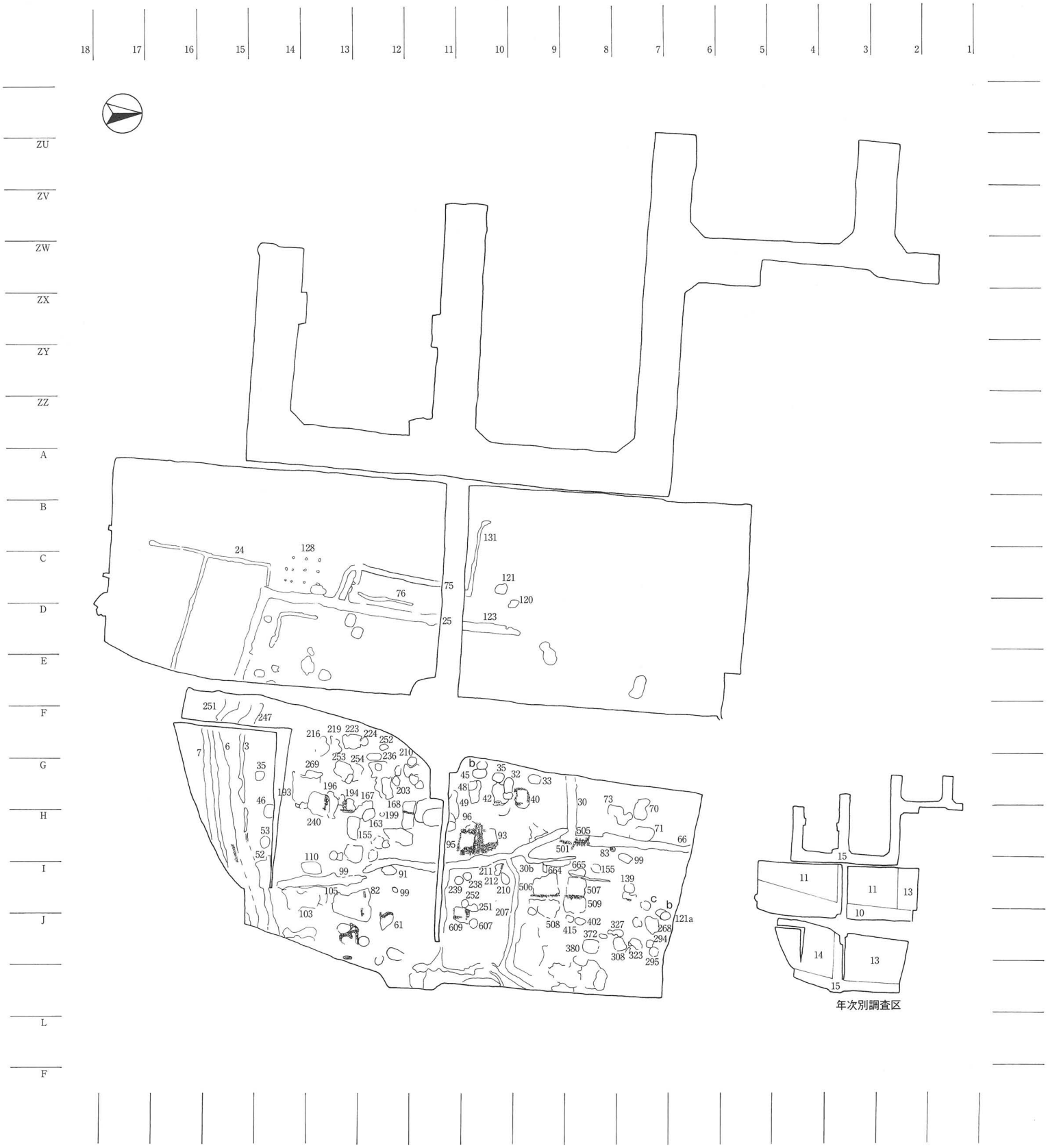
第13図　遺構実測図　竪穴状遺構 AW(13)409・410、AW(14)164　(1/60)



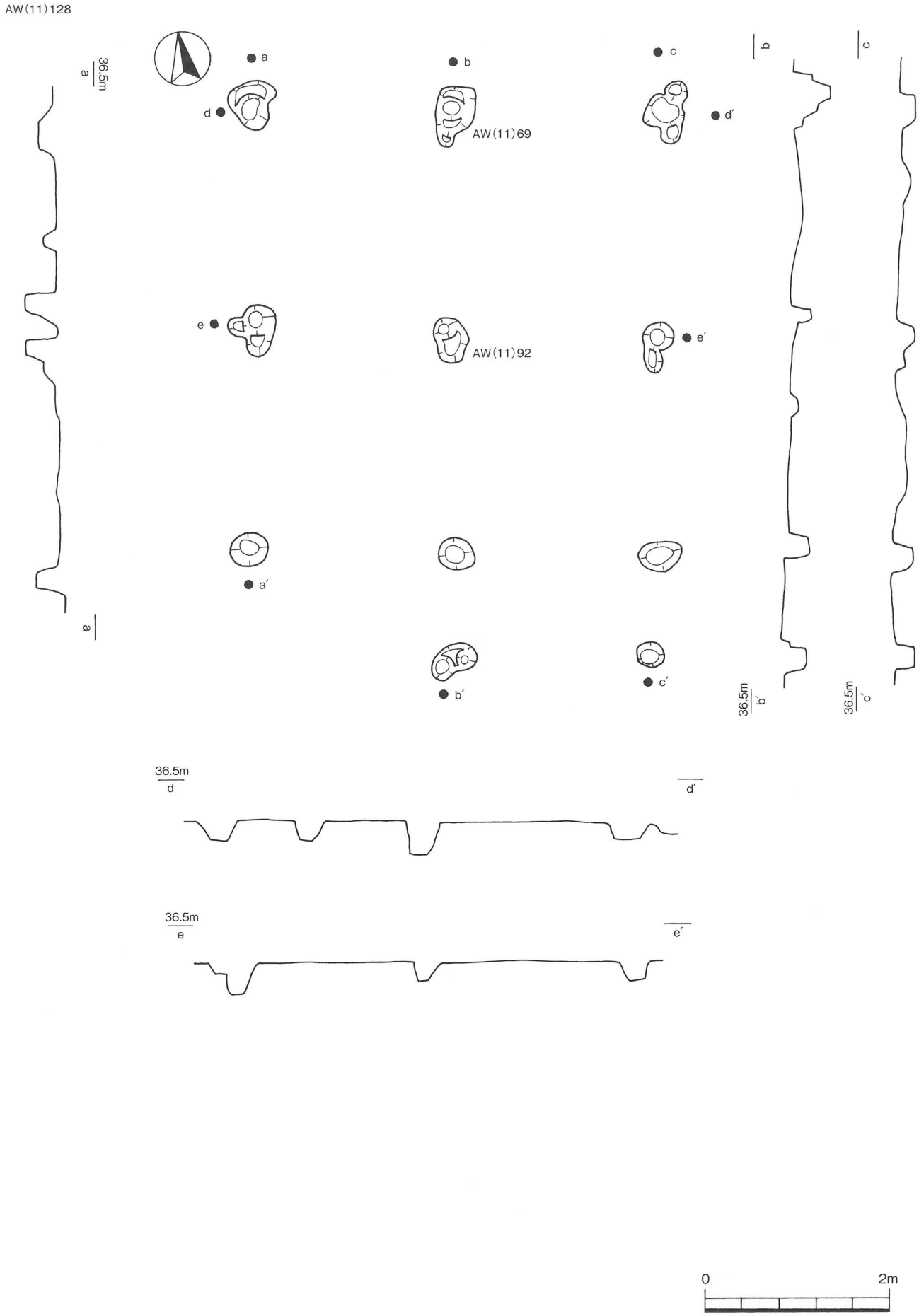
第 14 図　遺構実測図　竪穴状遺構 AW(15)2202、(13)297　(1/60)



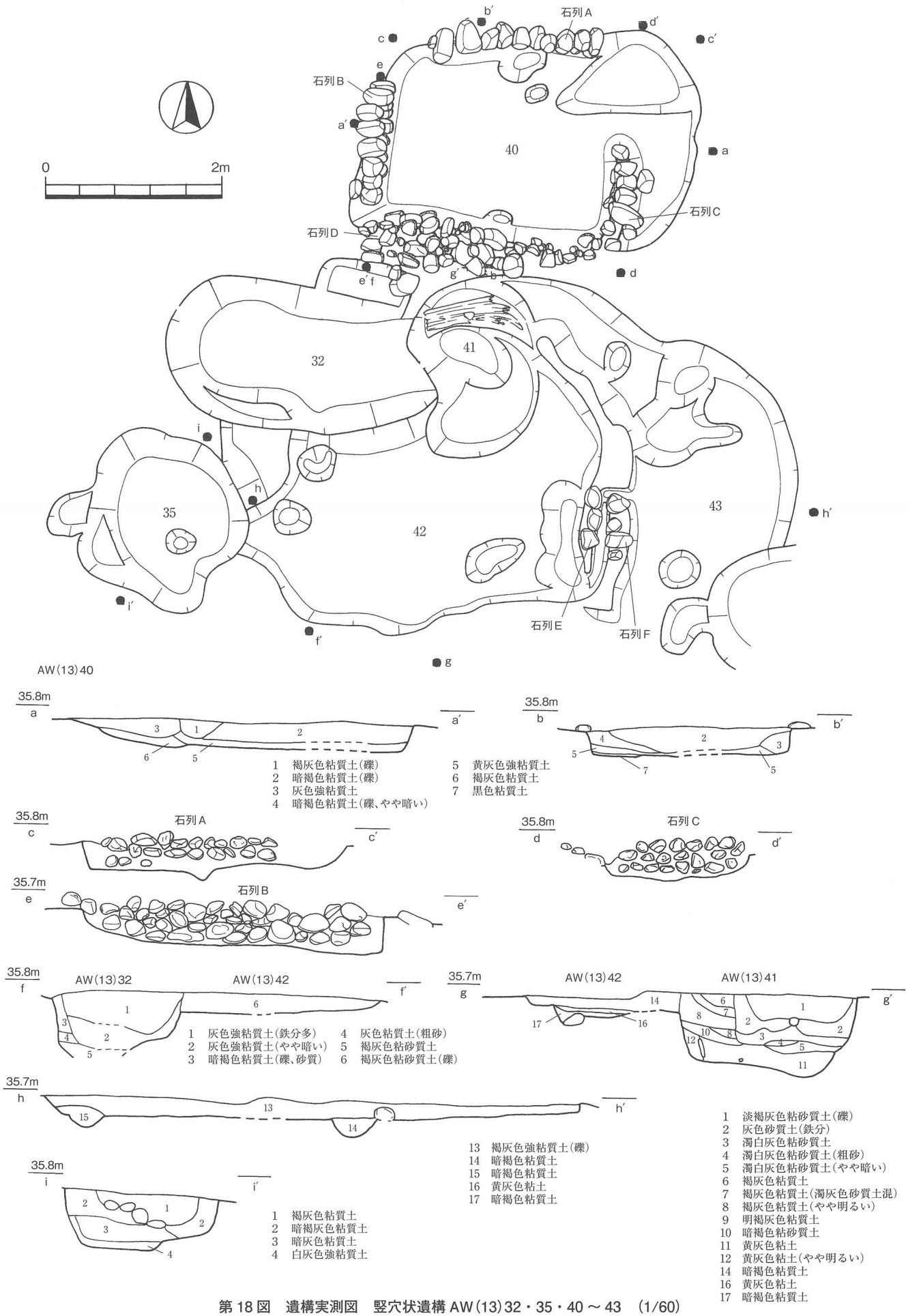
第 15 図　遺構実測図　土杭 AW(13)458・656、(14)2・202、埋納遺構 AW(11)15　(1/60)



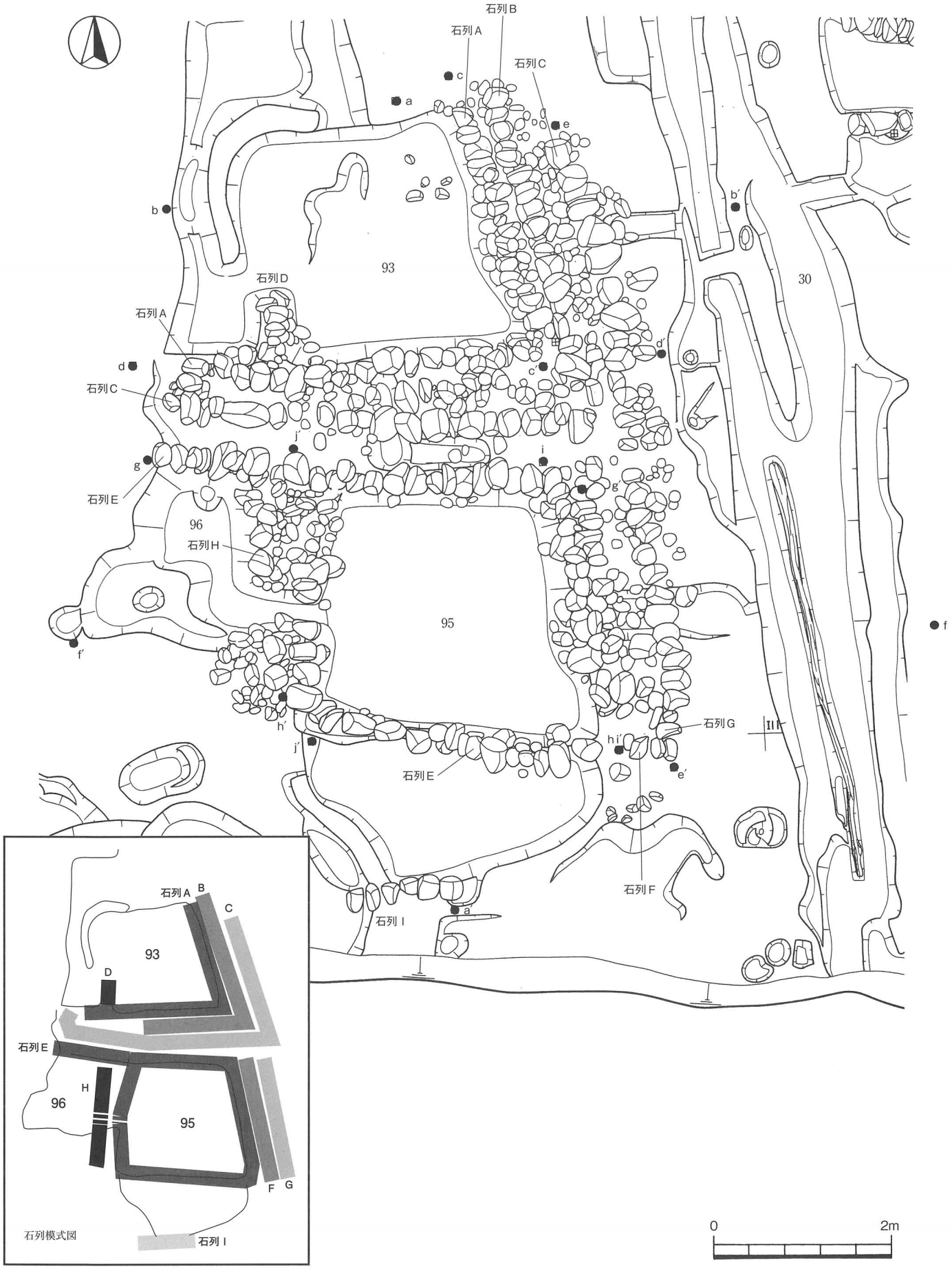
第16図　近世　遺構分布図　（S＝1/1000）



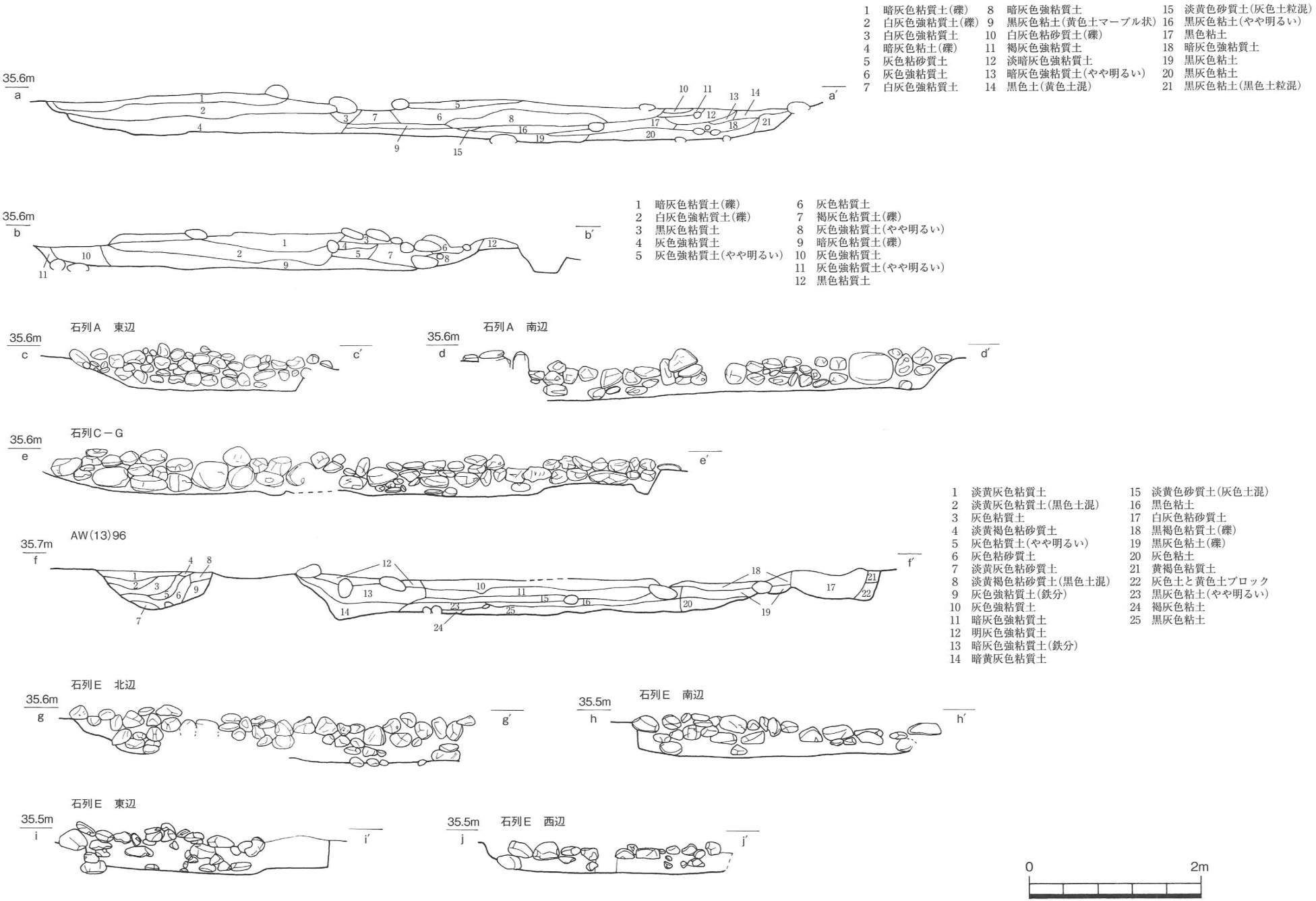
第17図　遺構実測図　掘立柱建物 AW(11)128　(1/60)



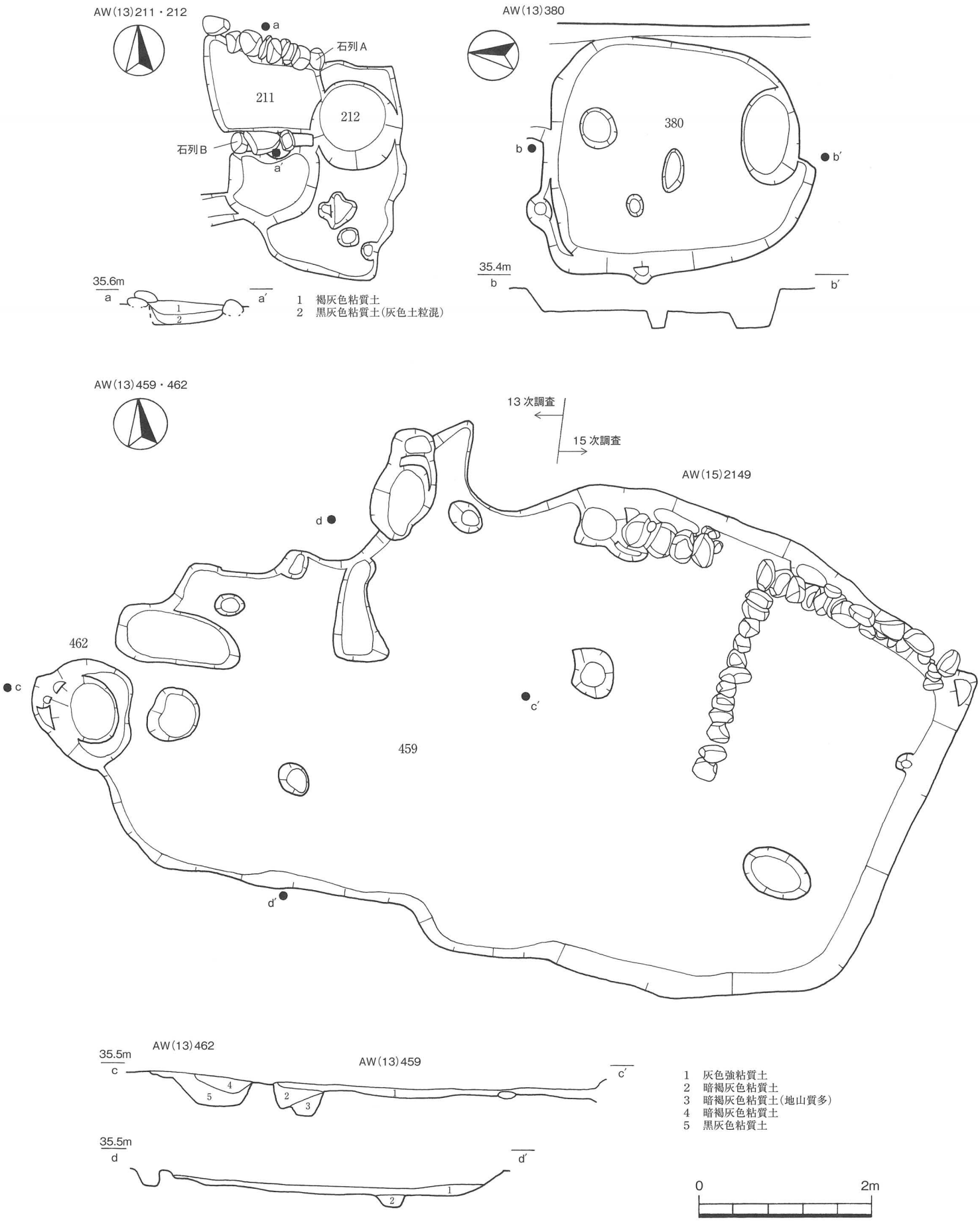
第18図　遺構実測図　竪穴状遺構 AW(13)32・35・40～43　(1/60)



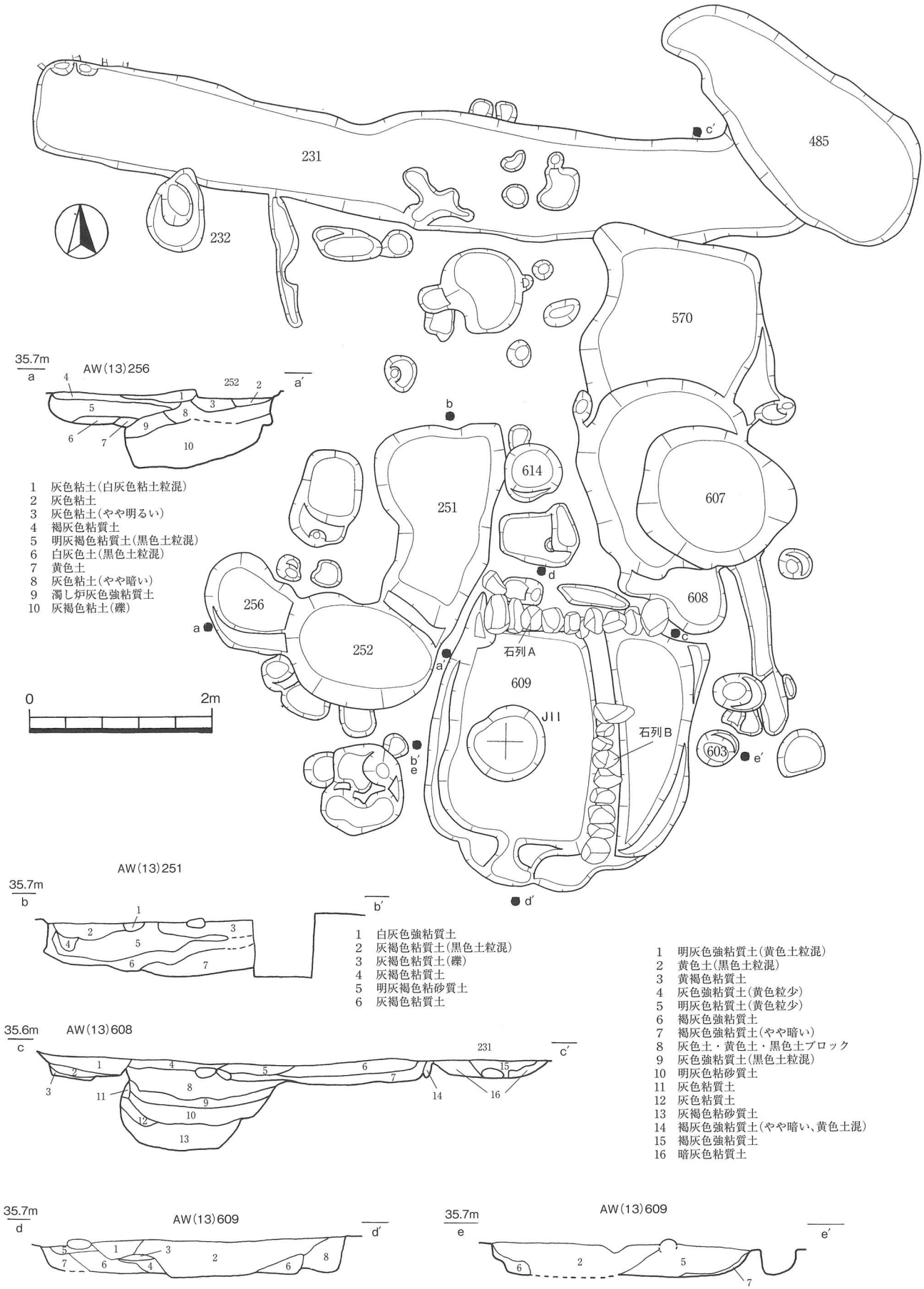
第19図　遺構実測図　竪穴状遺構 AW(13)93・95・96　(1/60)



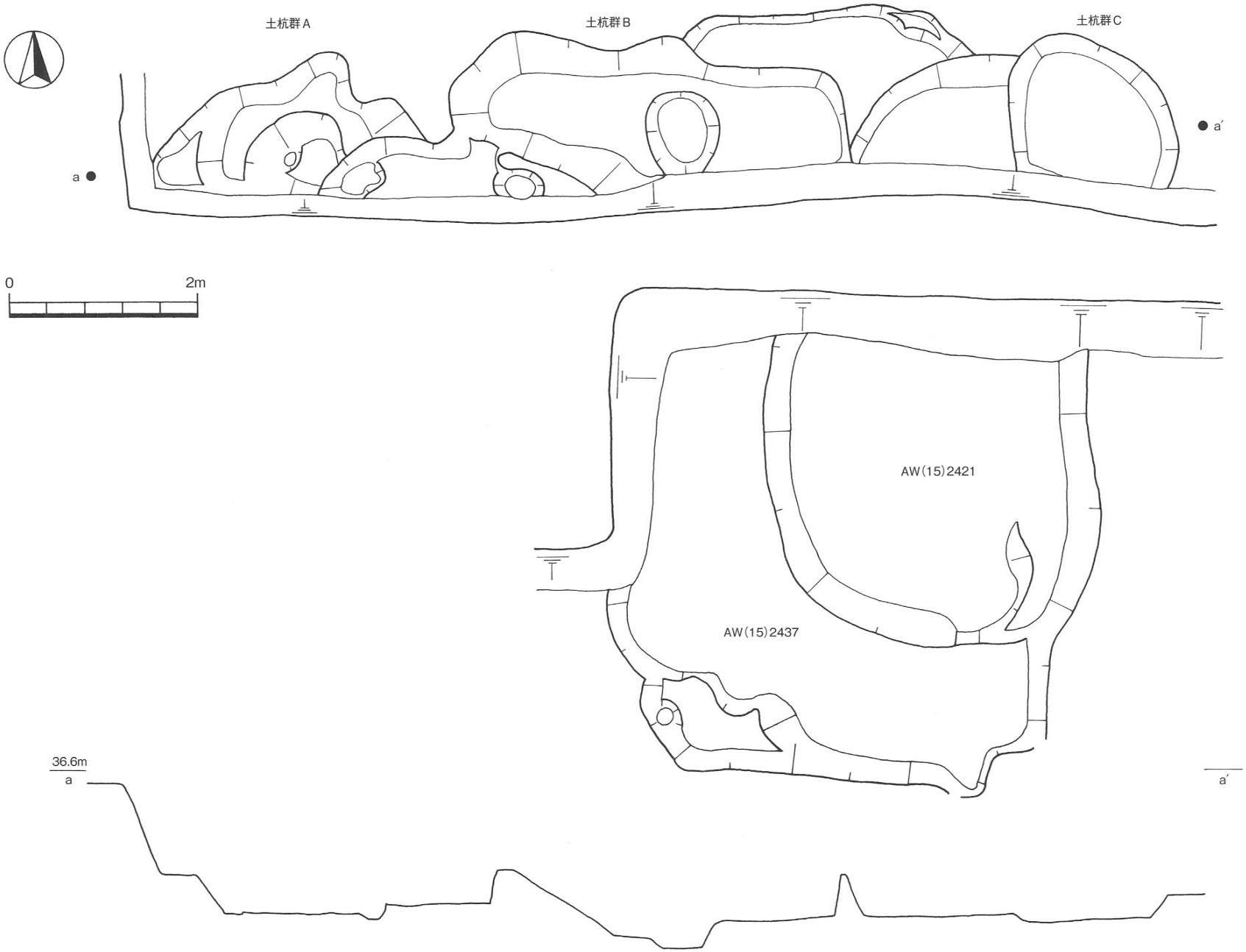
第20図　遺構実測図　竪穴状遺構 AW(13)93・95・96　(1/60)



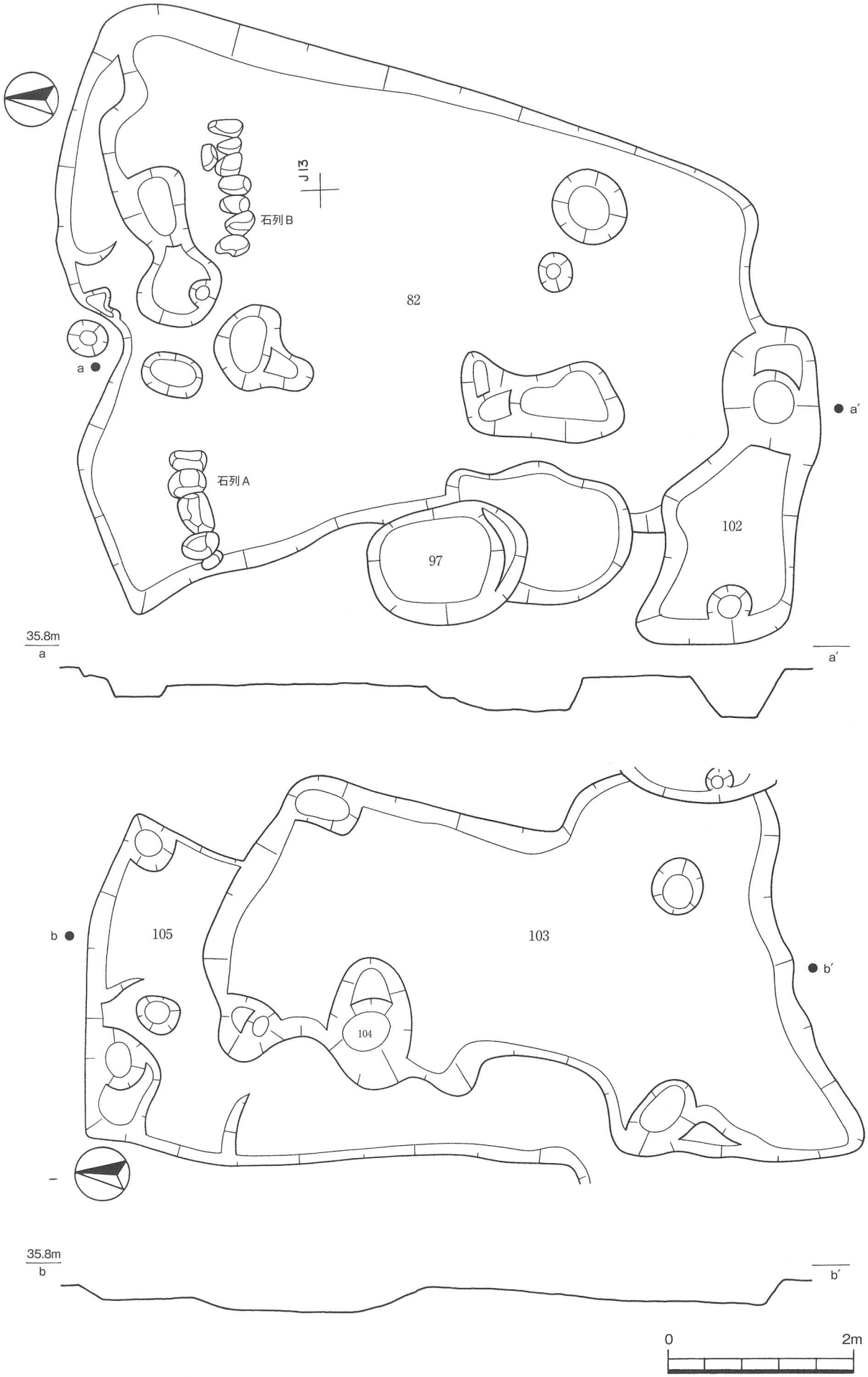
第21図　遺構実測図　竪穴状遺構 AW(13)211・212・380・459、(15)2149　(1/60)



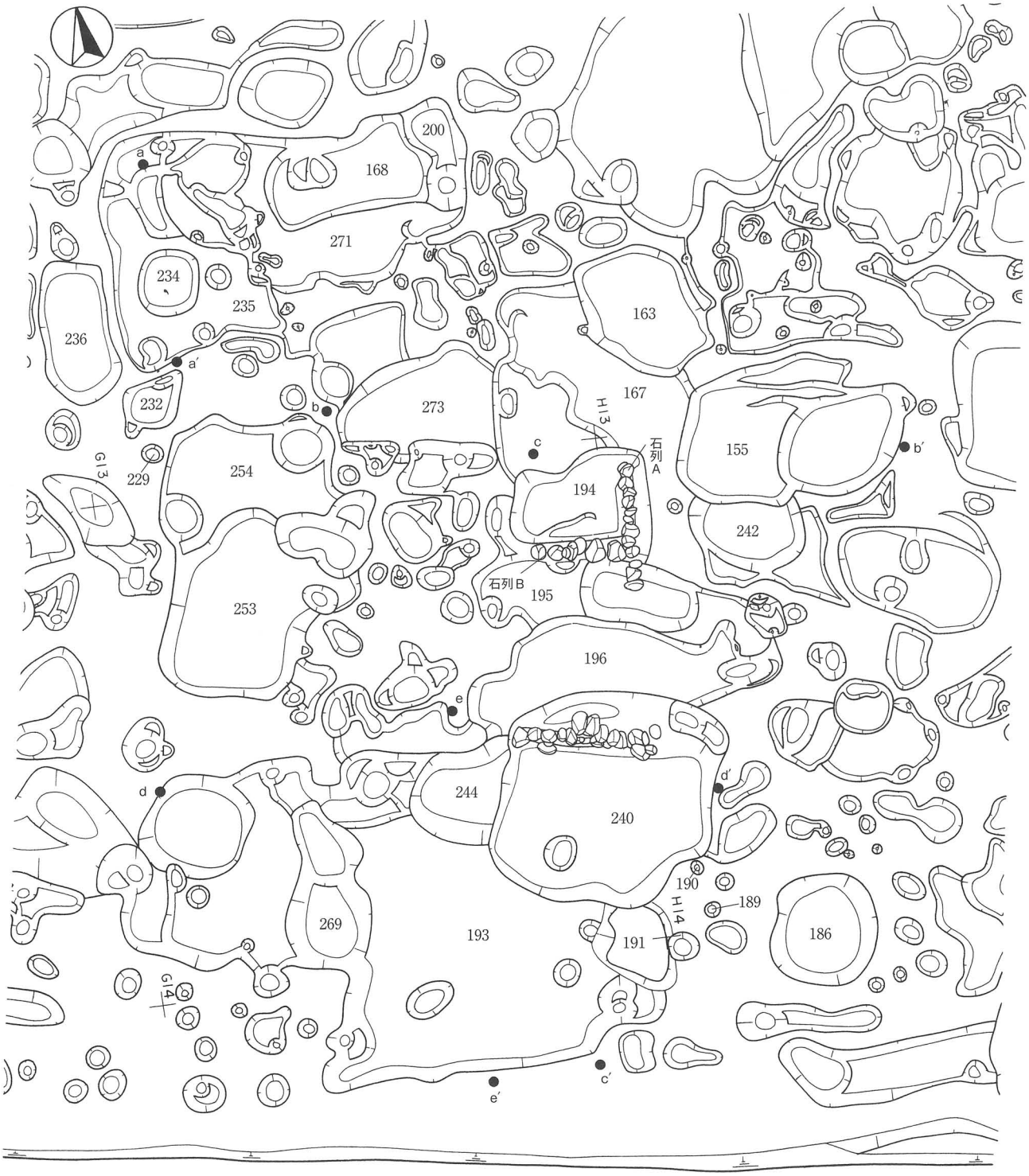
第22図　遺構実測図　竪穴状遺構 AW(13)609 周辺　(1/60)



第23図　遺構実測図　南側土杭群A～C　(1/60)

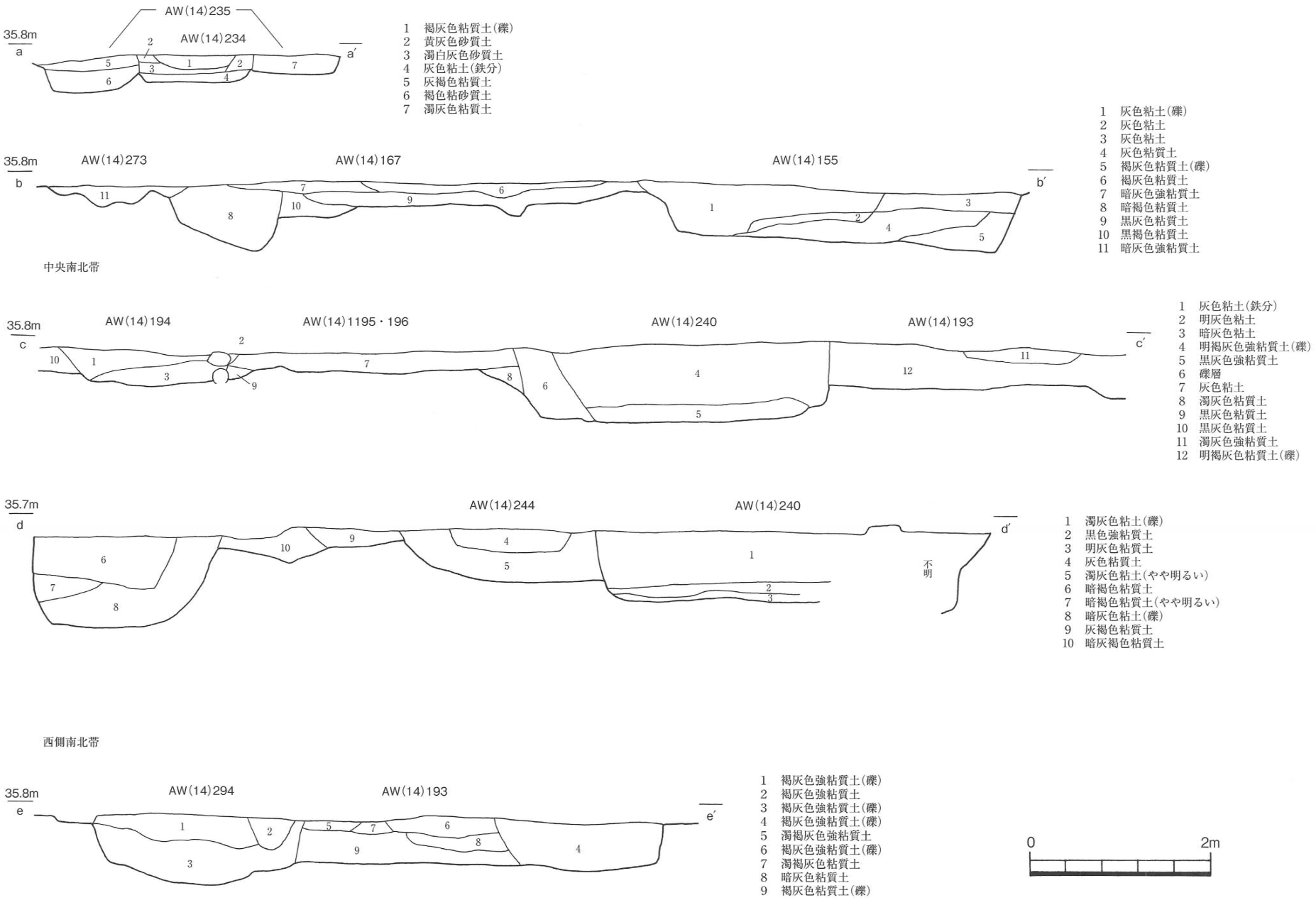


第24図　遺構実測図　竪穴状遺構 AW(14)82・103・105　(1/60)



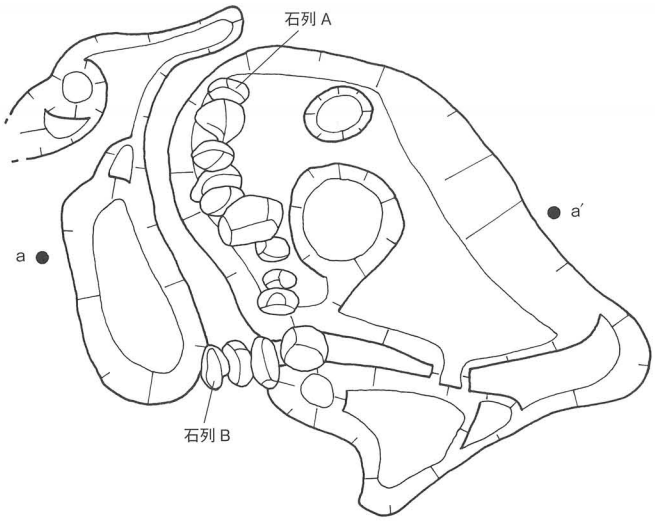
0 4m

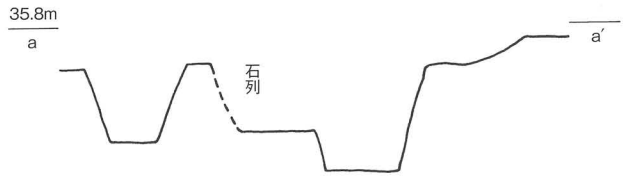
第 25 図　遺構実測図　竪穴状遺構 AW(14) 194・240 周辺　(1/60)



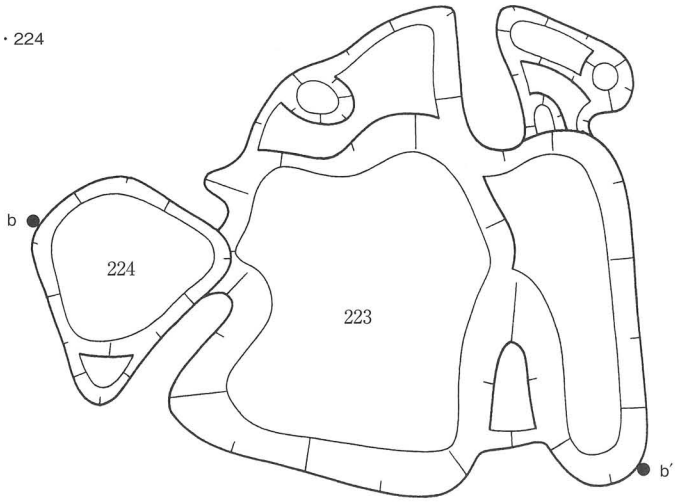
第 26 図　遺構実測図　竪穴状遺構 AW(14)194・240 周辺　(1/60)

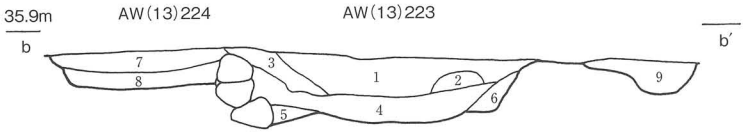
AW(14)61





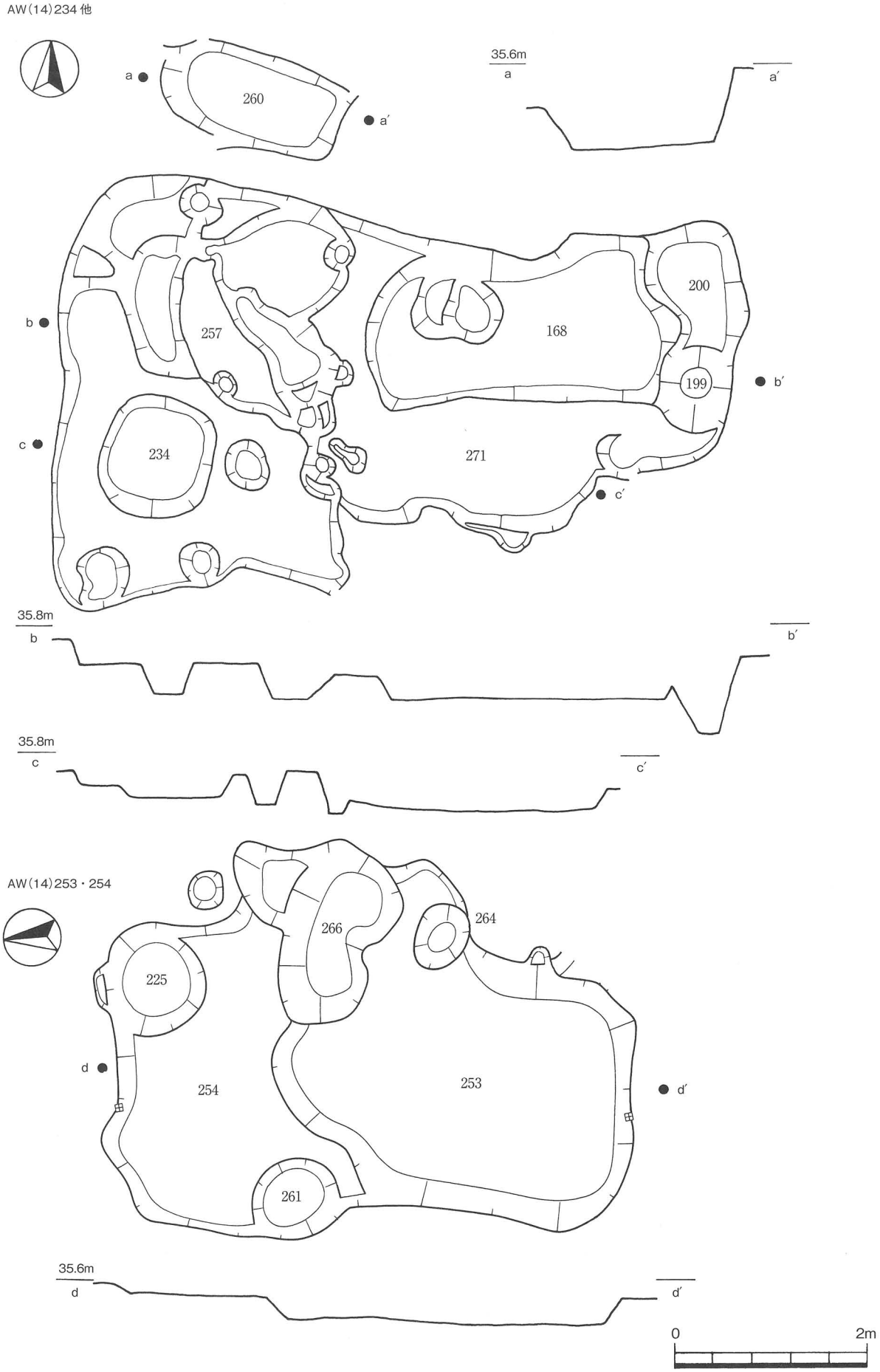
AW(14)223・224



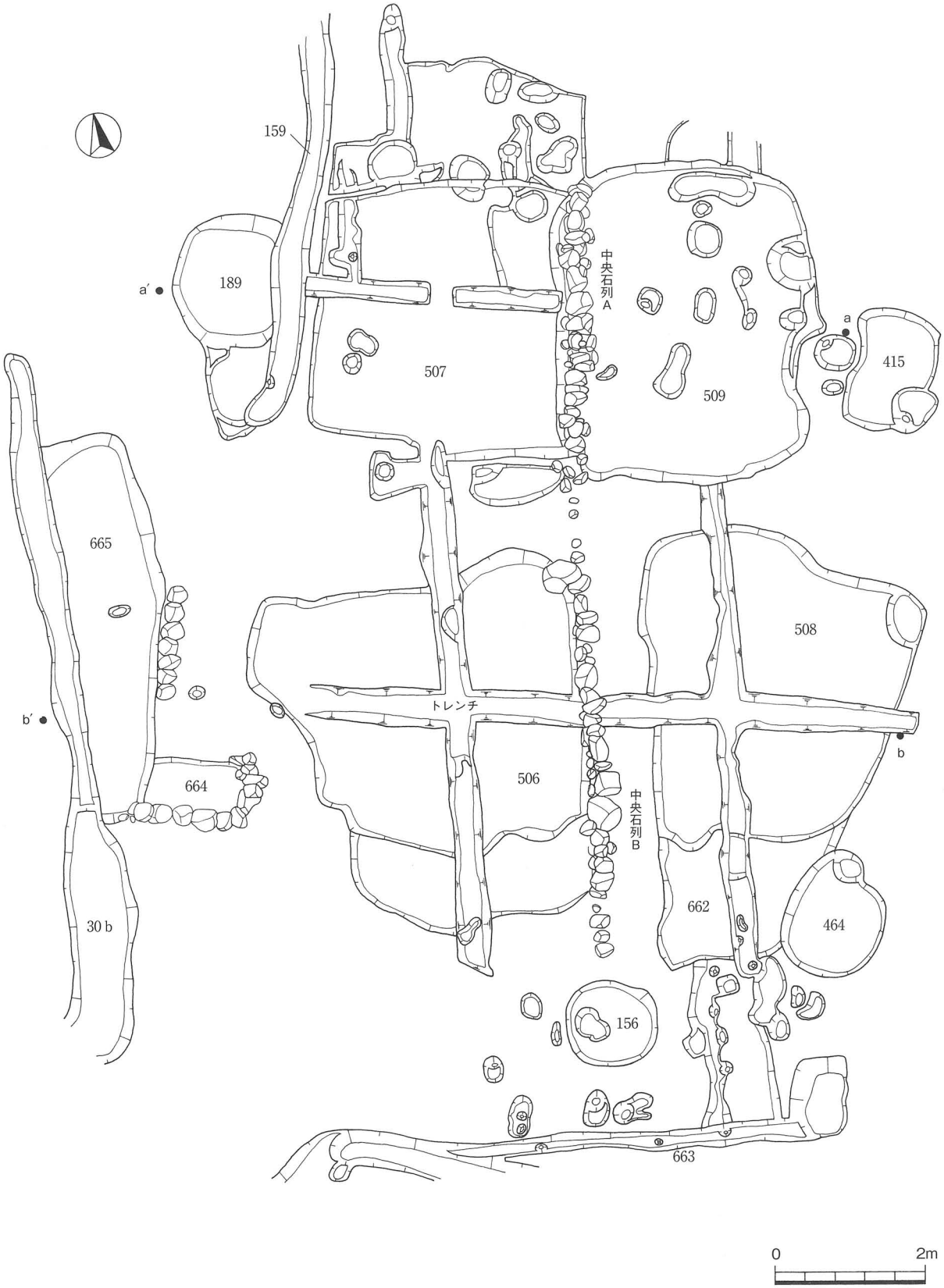


1　灰色粘土(礫)
2　暗灰色粘土(礫)
3　暗灰色粘土(礫)
4　白灰色粘砂質土
5　黒灰色粘土
6　黒灰色粘土
7　明灰色粘質土(礫)
8　濁白灰色粘質土
9　褐灰色粘土

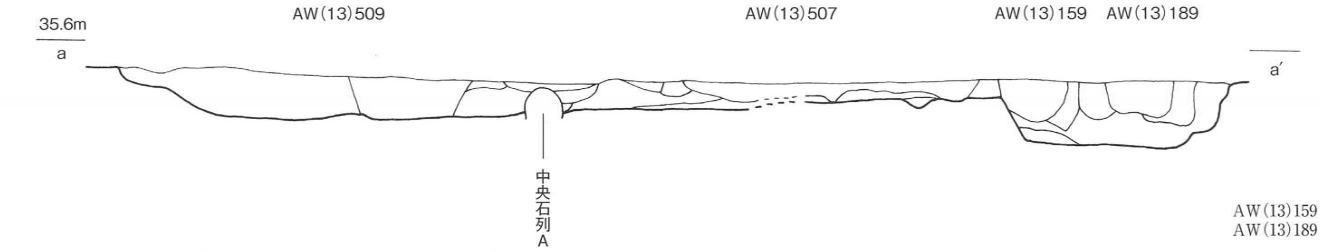
第 27 図　遺構実測図　竪穴状遺構 AW(14)61・223・224 周辺　(1/60)



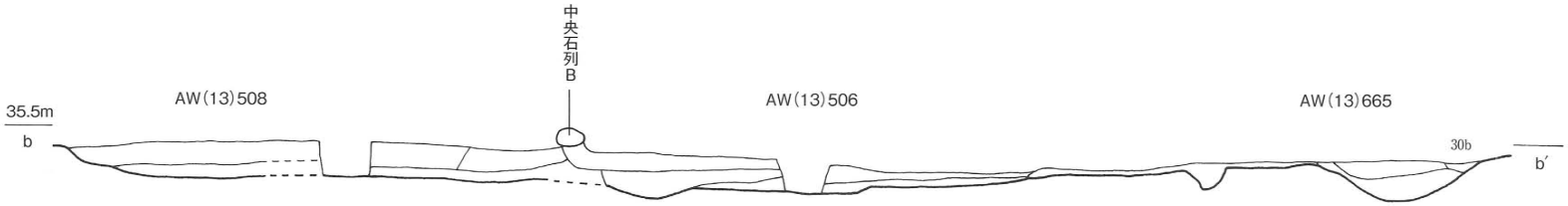
第 28 図　遺構実測図　竪穴状遺構 AW(14)234 周辺・253・254　(1/60)



第 29 図　遺構実測図　整地層 AW (13) 506 ～ 509 周辺　(1/80)

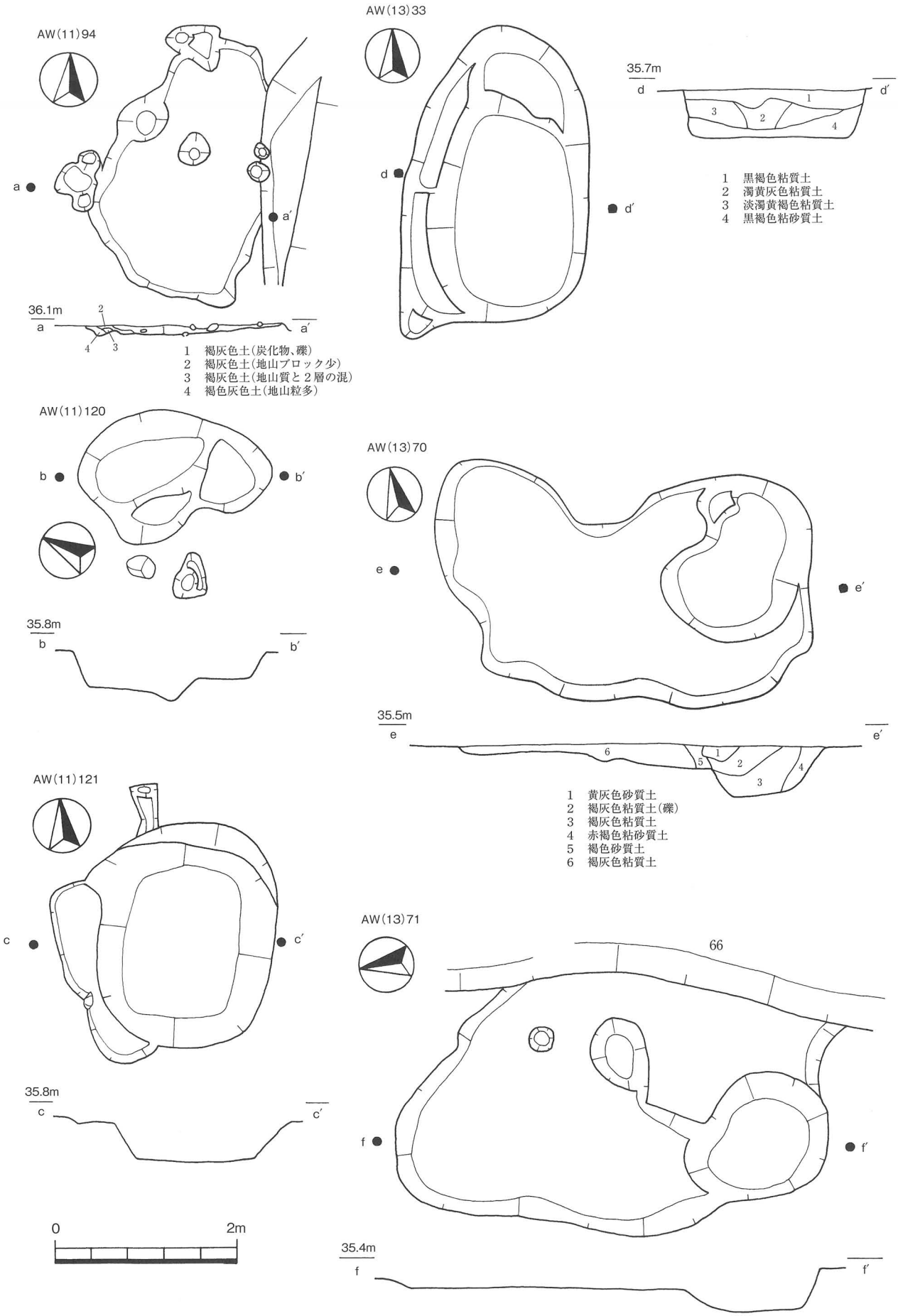


AW(13)159	1	黄灰色粘土
AW(13)189	2	黒灰色粘土
	3	暗灰色粘土
	4	黒褐色粘質土(礫)
	5	暗褐色粘質土
	6	黒褐色粘質土(礫)
	7	暗褐色粘質土(礫)
	8	灰色粘質土(やや砂質)
AW(13)507	9	灰色粘質土(やや砂質)
	10	黄褐色砂質土(灰色粘質土混)
	11	灰色粘質土(やや明るい)
AW(13)509	12	褐灰色粘質土(礫)
	13	暗灰褐色粘質土
	14	白灰色粘土(礫)
	15	白灰色粘土(礫、やや暗い)
	16	灰色粘質土(やや砂質)
	17	褐灰色粘質土
	18	黄褐色砂質土
	19	灰色粘質土(やや砂質、やや暗い)
	20	黒色粘質土

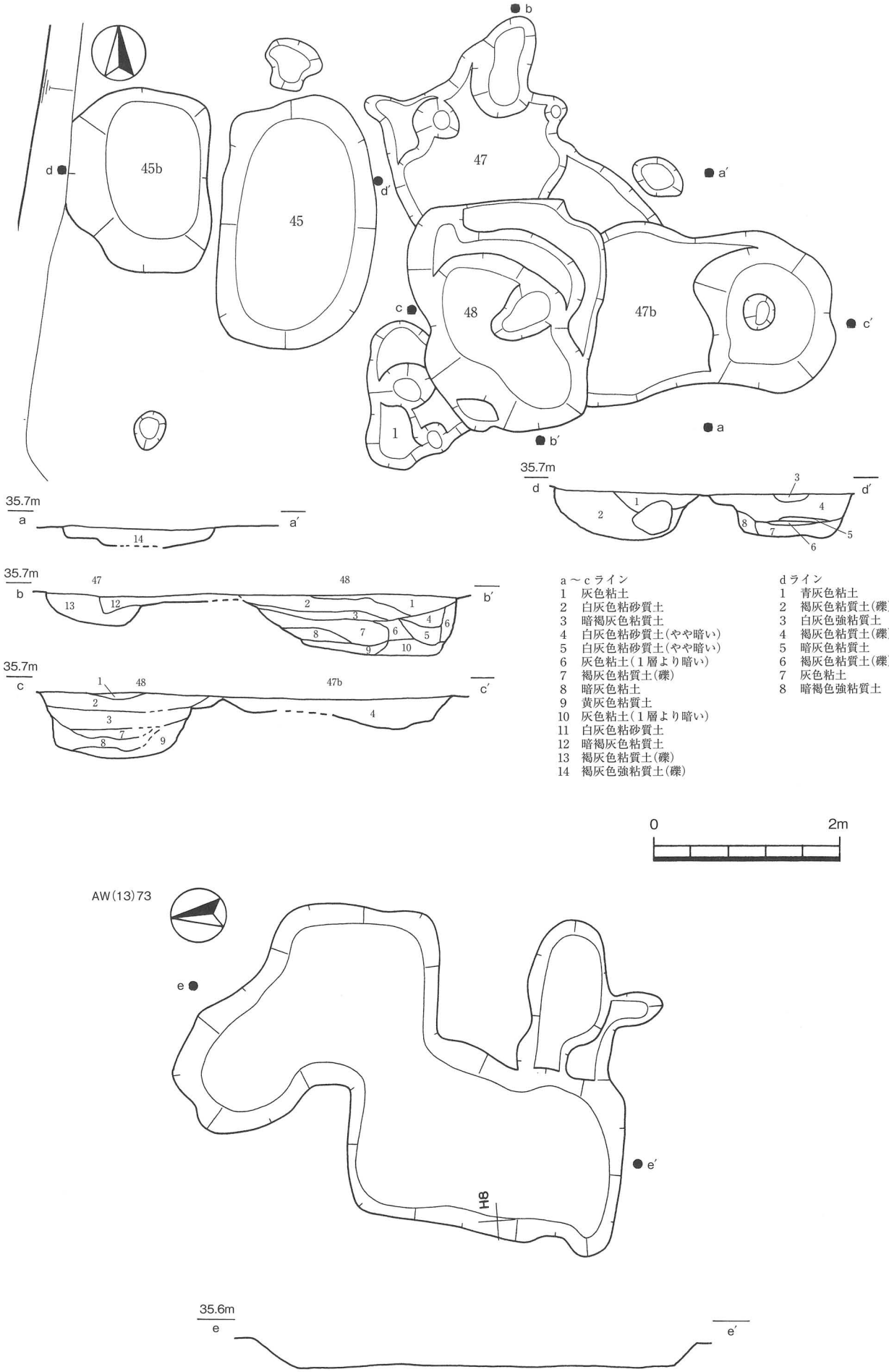


AW(13)506	1	濁白灰色強粘質土
	2	暗灰褐色粘質土(若干黄色がかる)
	3	濁灰色土・地山・土・黒色土が混じる
AW(13)508	4	褐灰色粘質土(礫)
	5	濁白灰色強粘質土
	6	暗灰褐色粘質土
	7	黒褐色粘質土
AW(13)30b	8	白灰色粘質土(鉄分)
AW(13)665	9	灰褐色粘質土(やや砂質)
	10	褐灰色粘土

第30図　遺構実測図　整地層 AW(13)506～509 周辺　(1/60)

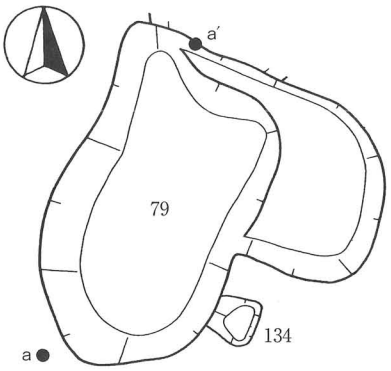


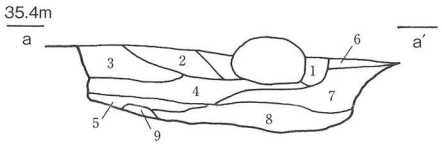
第31図　遺構実測図　土杭 AW(11)94・120・121、(13)33・70・71　(1/60)



第32図　遺構実測図　土杭 AW(13)45・47・48・73　(1/60)

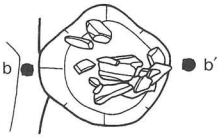
AW(13)79

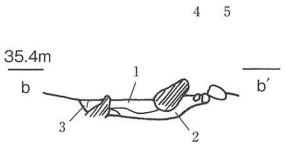




1　褐灰色粘質土
2　褐灰色粘質土(灰色粘砂質土・暗灰色土混)
3　濁褐灰色粘質土
4　濁褐灰色粘土
5　灰色粘土
6　褐灰色粘質土
7　青灰色粘土
8　暗青灰色粘土
9　黒灰色粘土

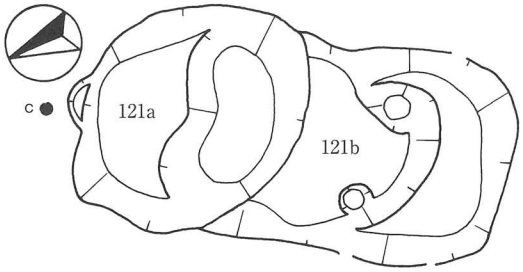
AW(13)83

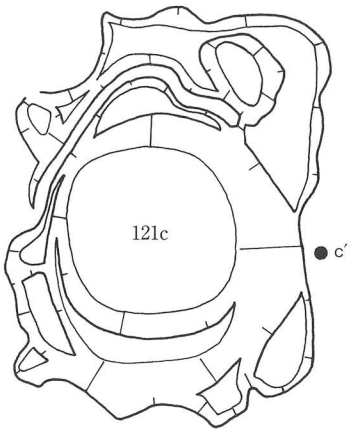


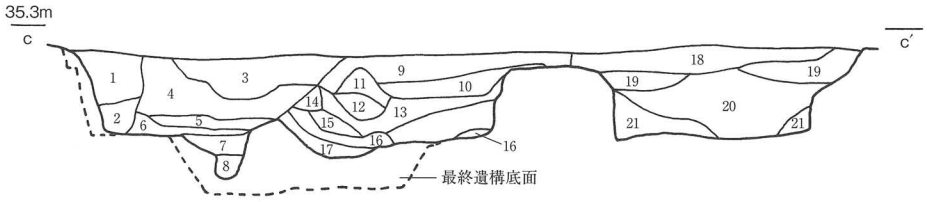


1　濁灰色粘土(礫)
2　濁灰色粘土
3　褐灰色粘質土

AW(13)121 a～c



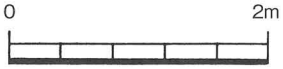




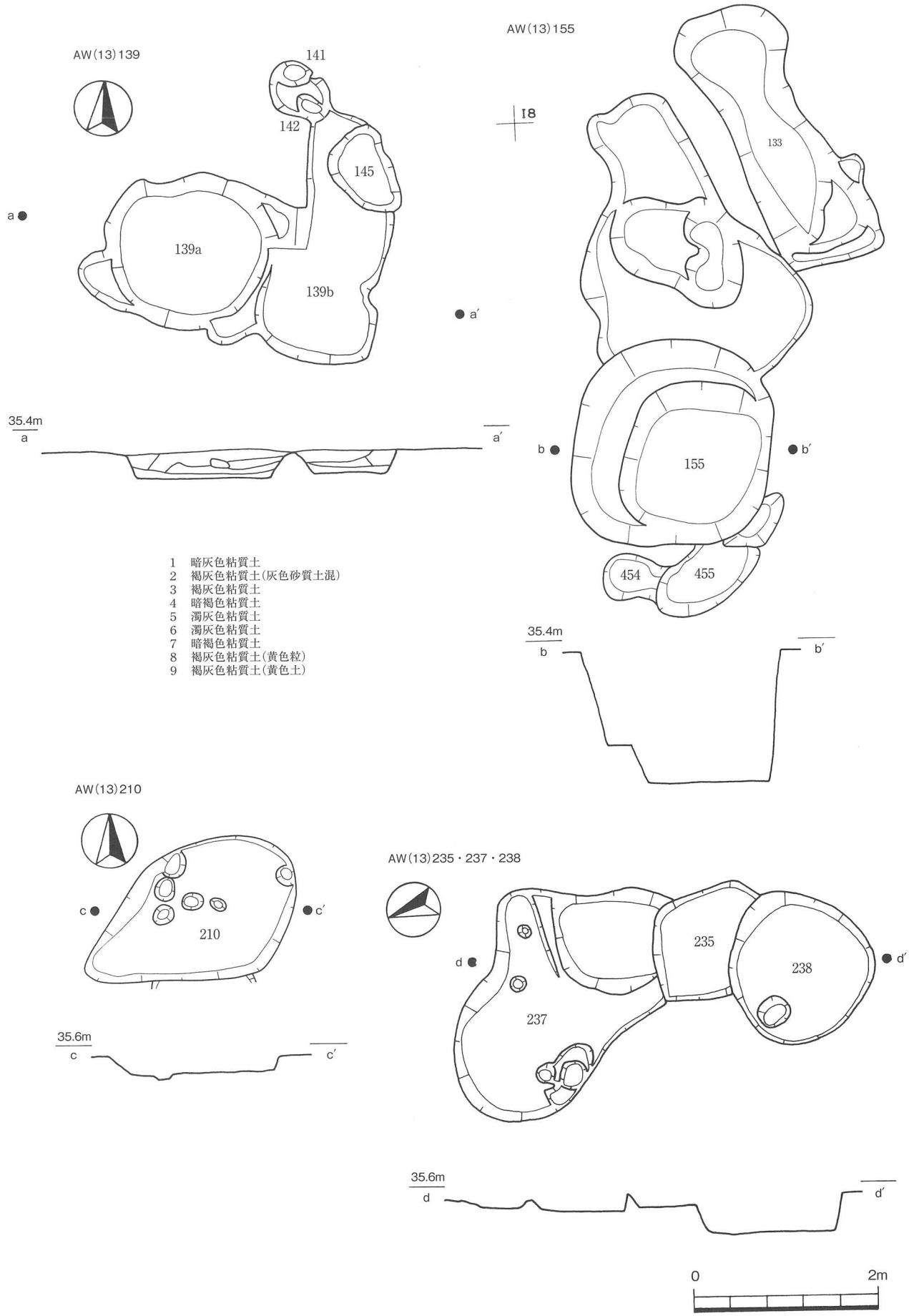
AW(13)121 a
1　濁灰色粘質土
2　暗褐灰色粘土
3　褐灰色粘質土
4　灰褐色粘質土
5　青灰色粘土
6　濁白灰色粘土
7　黒灰色粘土
8　黒色粘土(礫)

AW(13)121 b
9　灰褐色粘質土
10　青灰色粘土
11　灰褐色粘質土(やや暗い)
12　暗灰色粘土
13　黒灰色粘土(やや明るい)
14　黒灰色粘土(鉄分多)
15　黒灰色粘土
16　黒灰色粘土(黄色粒混)
17　黒灰色粘土(黄色粒混)

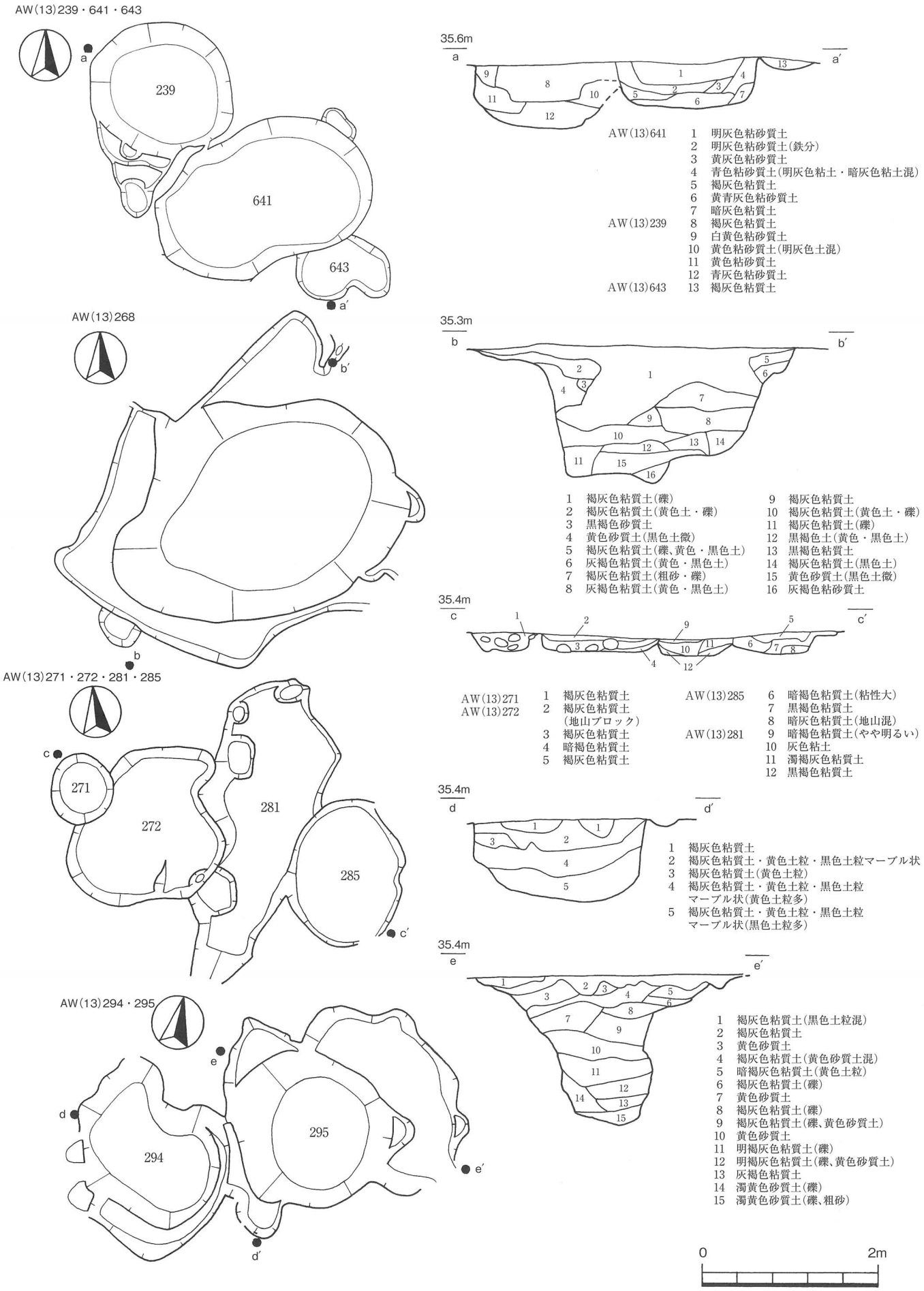
AW(13)121 c
18　青灰色粘土
19　青灰色粘土(鉄分多)
20　青灰色粘土(礫)
21　黒灰色粘土



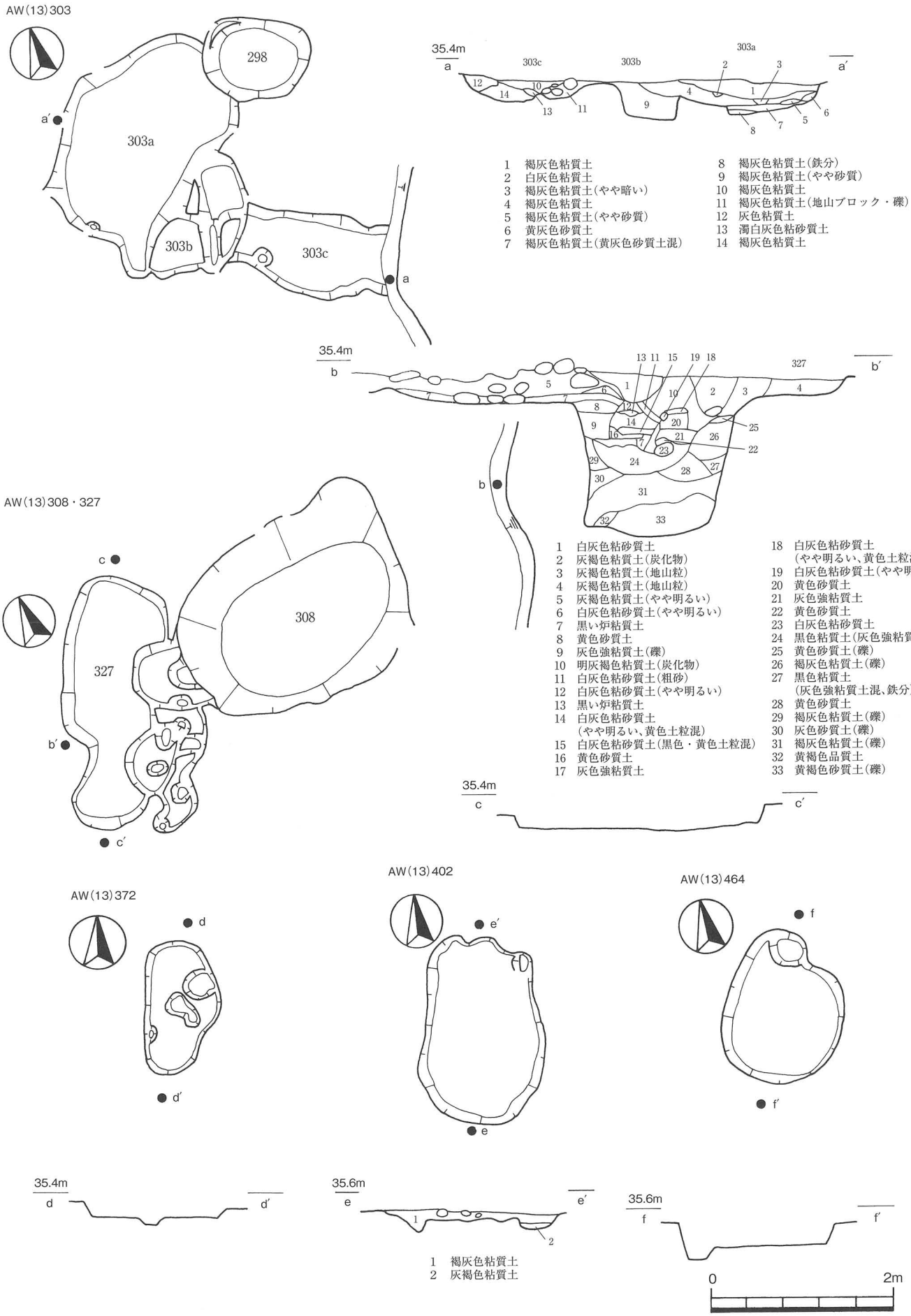
第33図　遺構実測図　土杭 AW(13)79・83・121 a～c　(1/60)



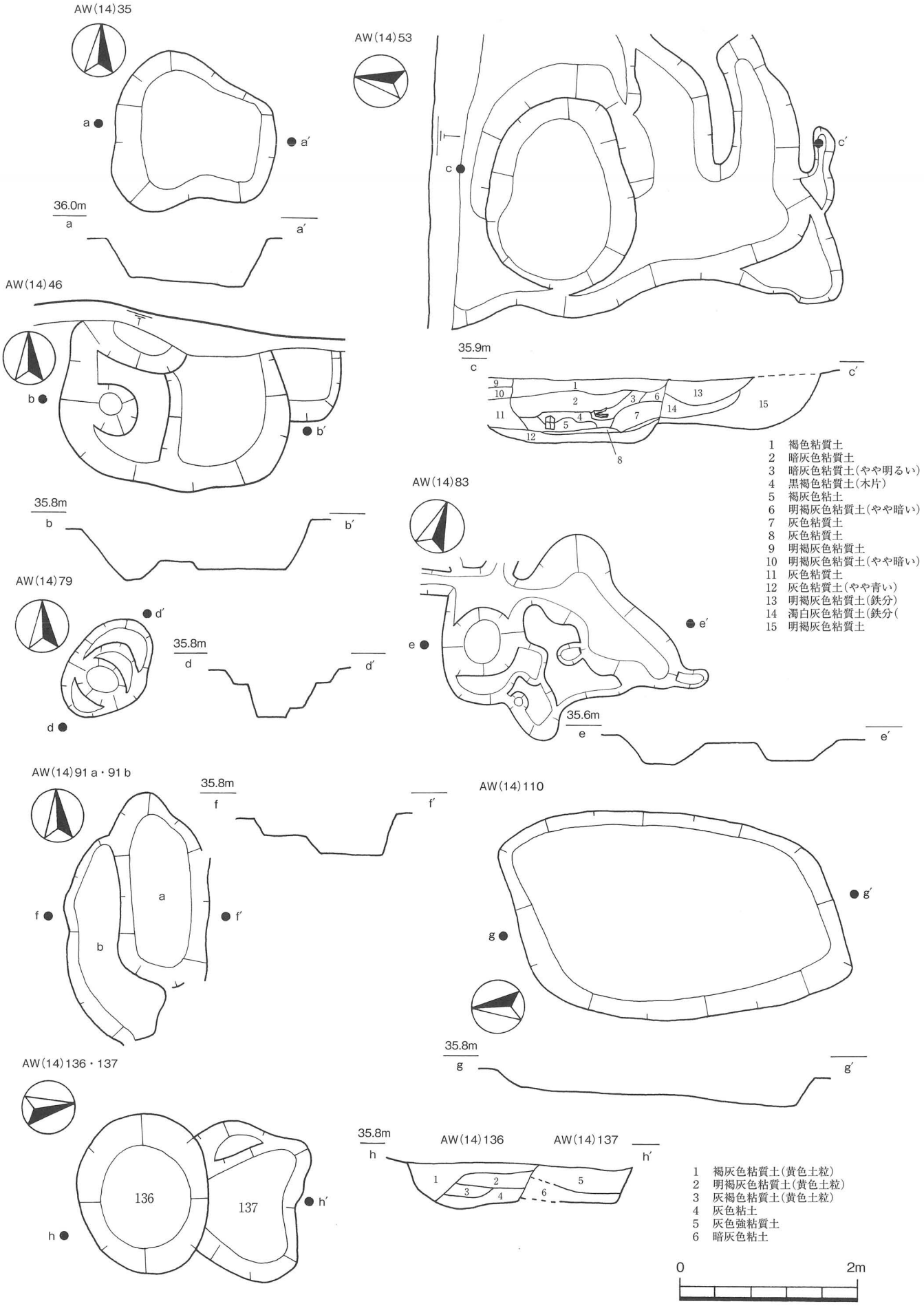
第34図　遺構実測図　土杭 AW(13)139 a、b・155・210・235・237・238　(1/60)



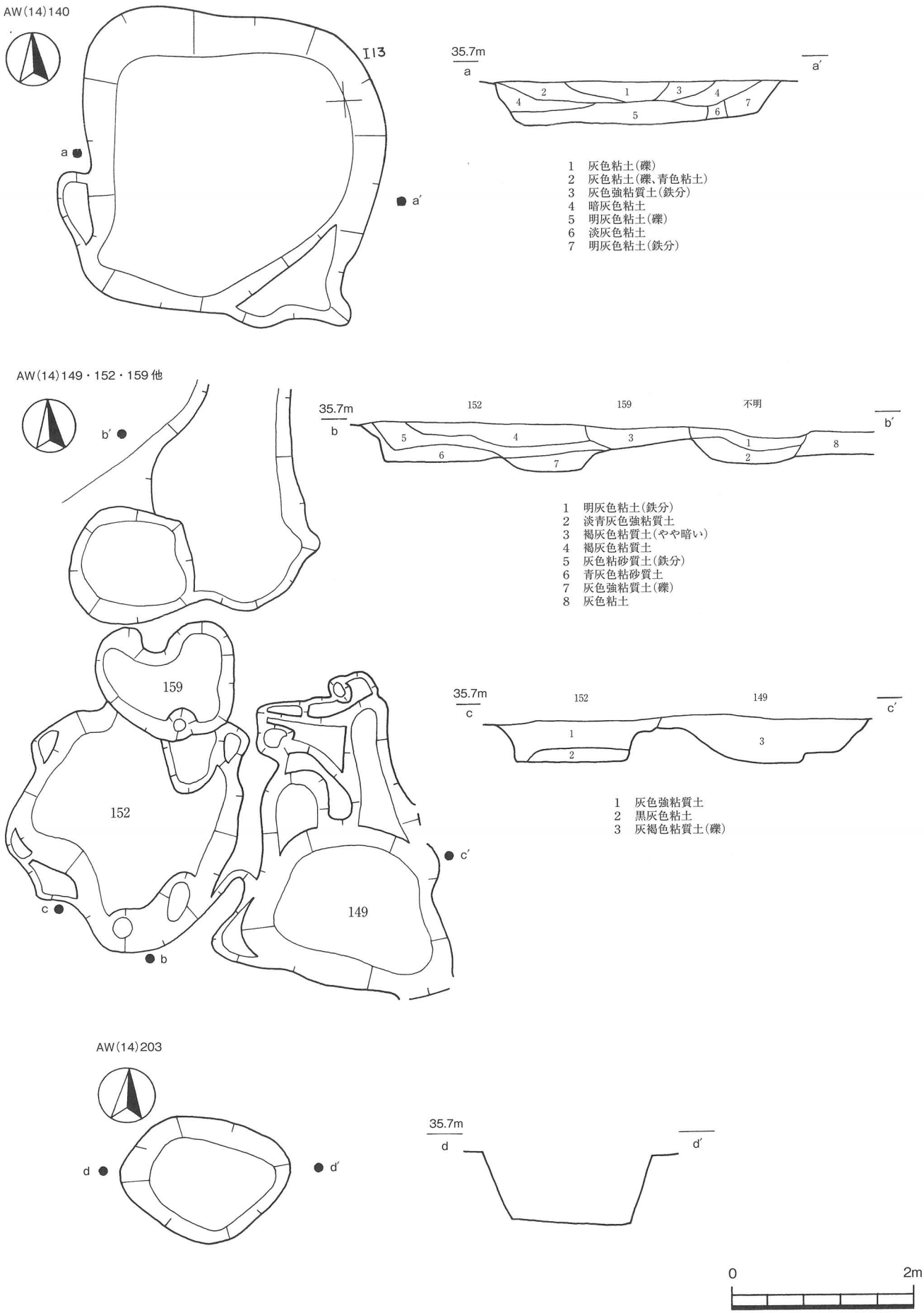
第35図　遺構実測図　土杭 AW(13)239・641・643・268・271・272・281・285・294・295　(1/60)



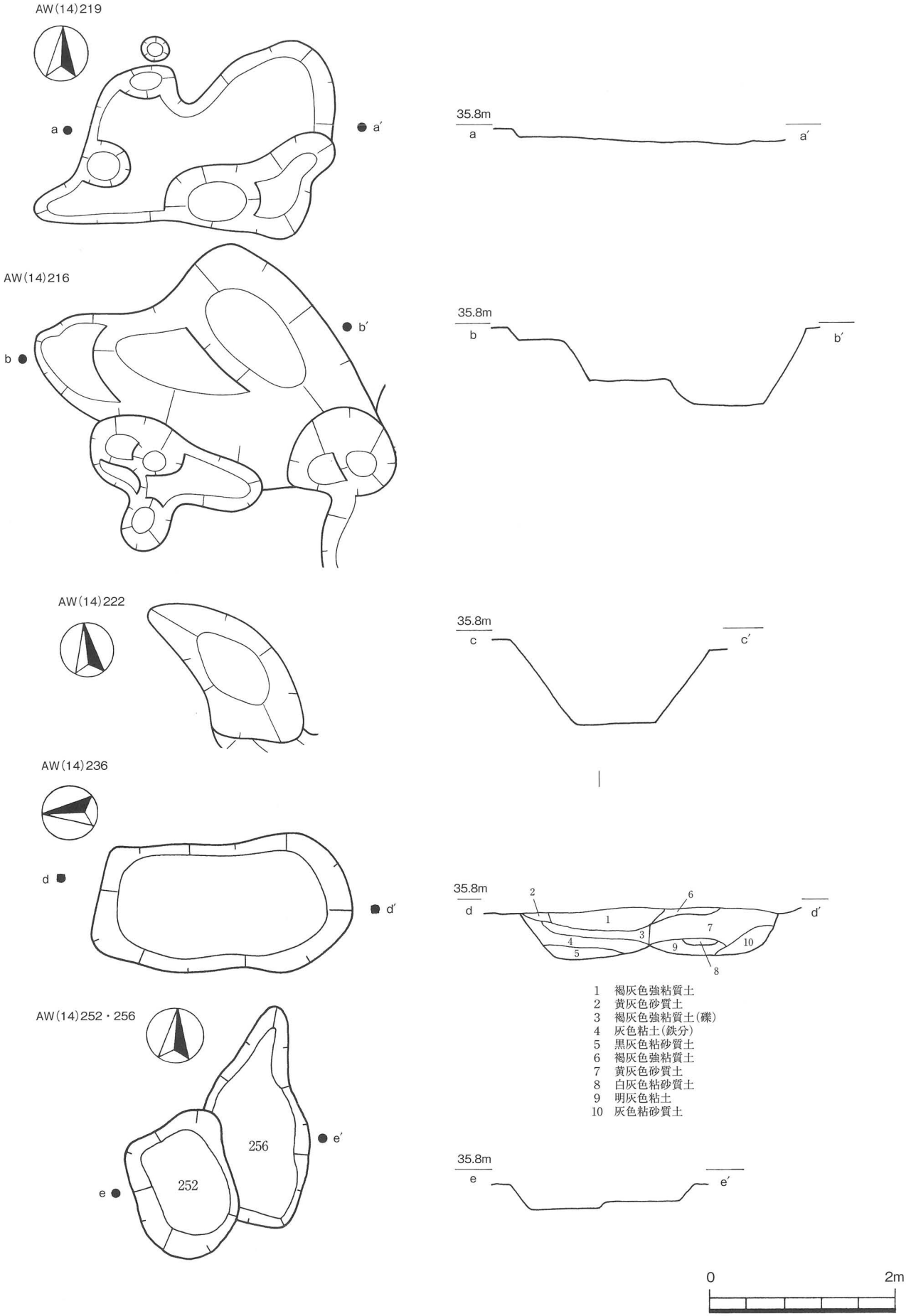
第36図　遺構実測図　土杭 AW(13)303 a～c・308・327・372・402・464　(1/60)



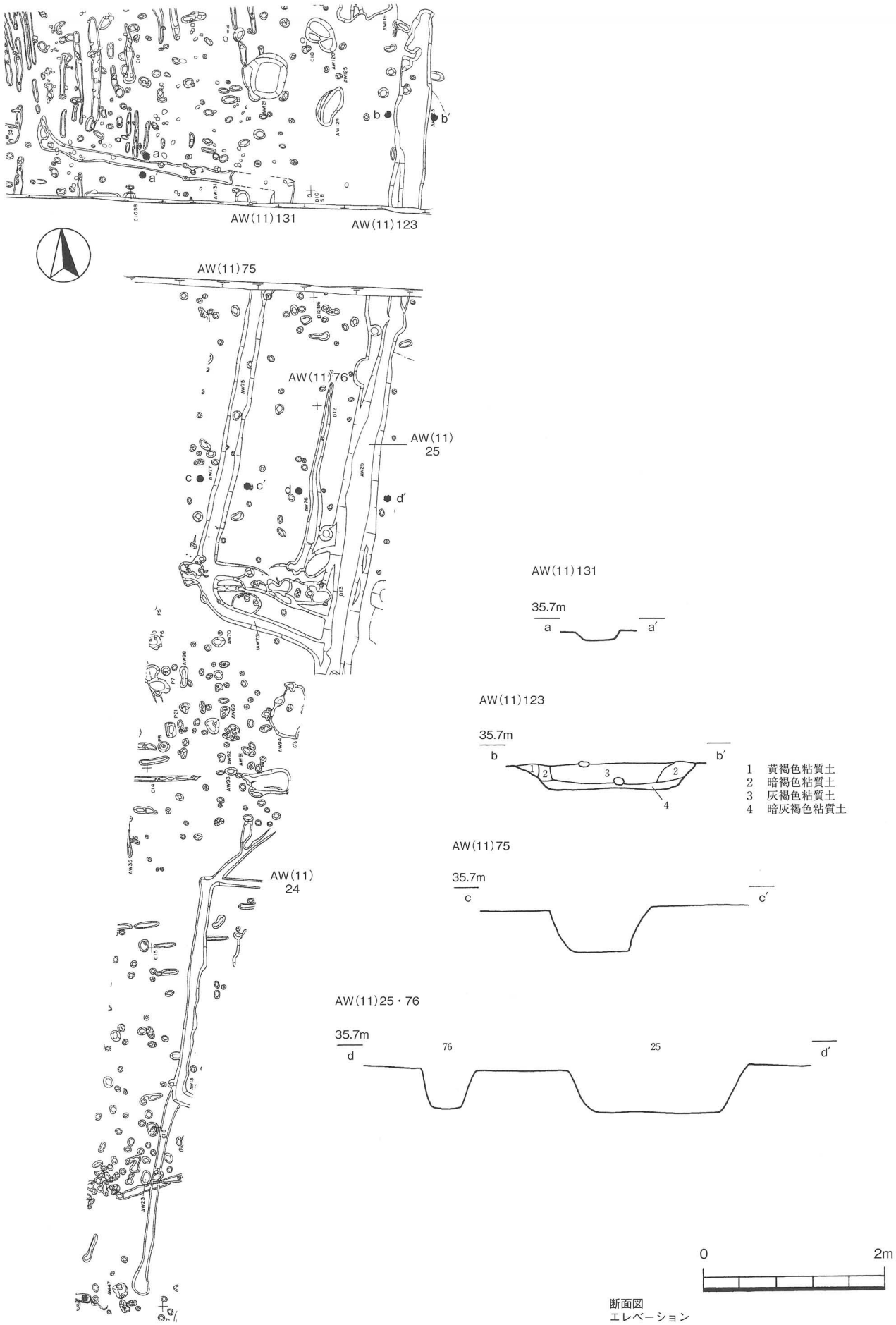
第37図　遺構実測図　土杭 AW(14)35・46・53・79・83・91 a、b・110・136・137　(1/60)



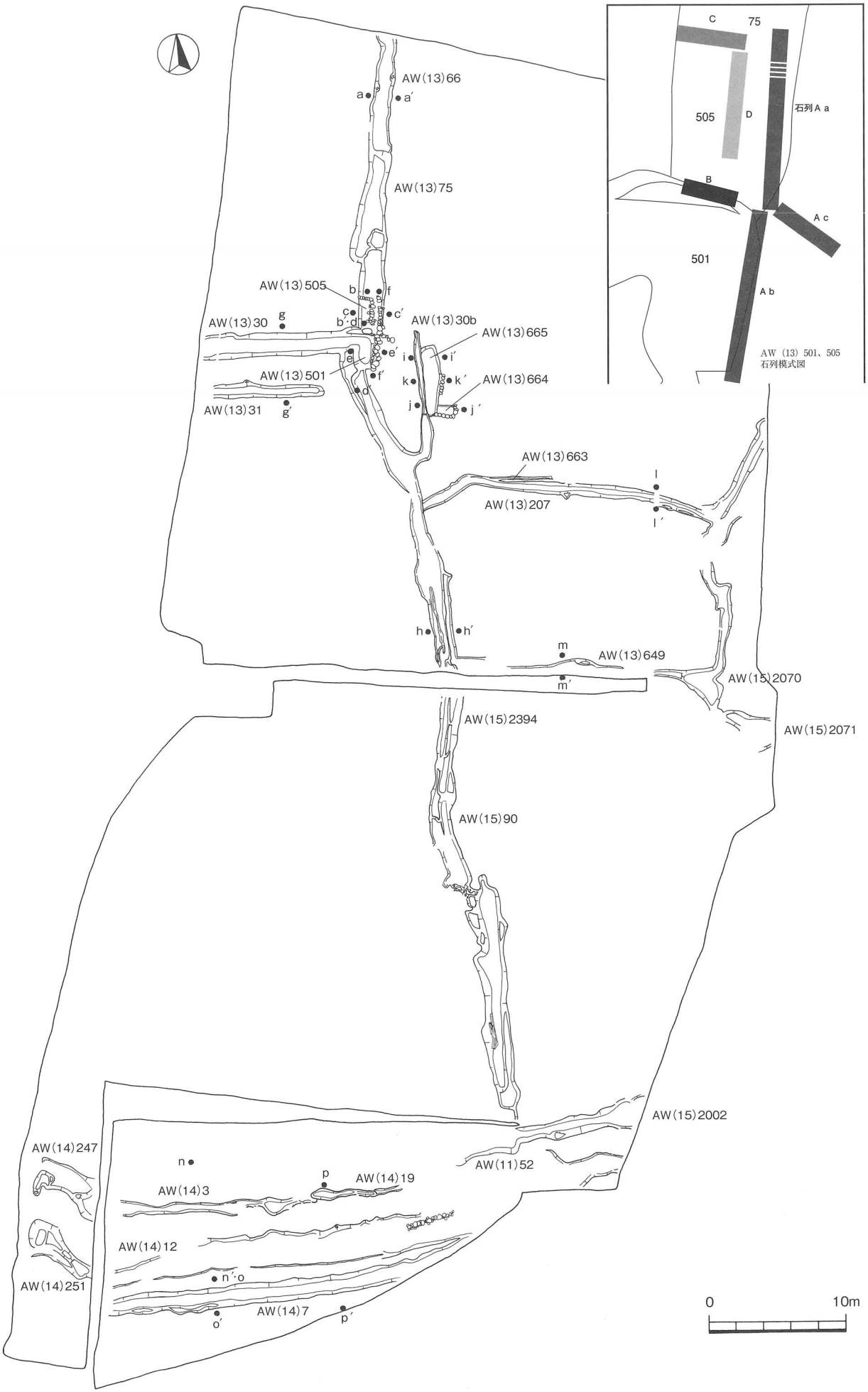
第38図　遺構実測図　土杭 AW(14)140・149・152・159・203　(1/60)



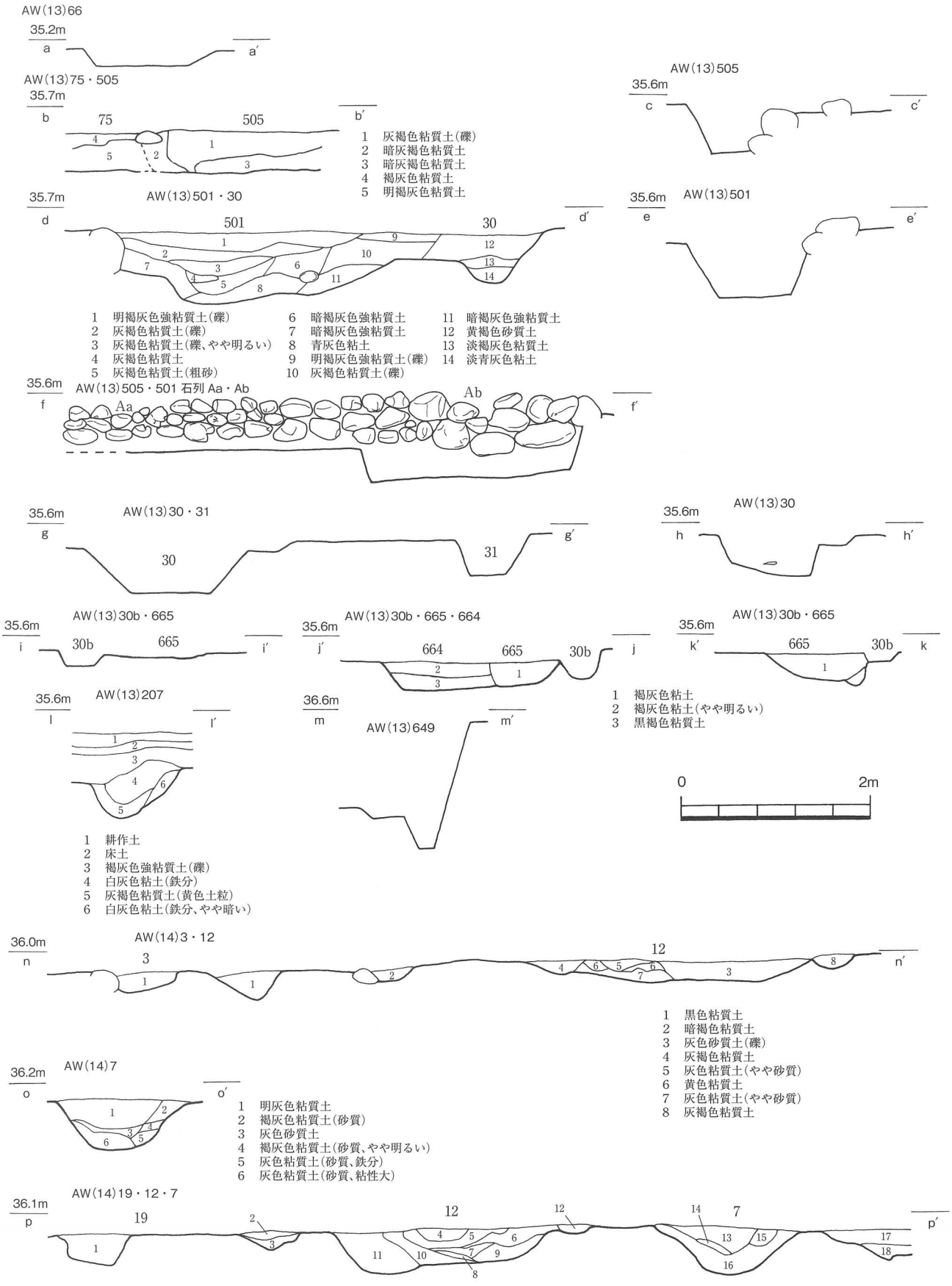
第39図　遺構実測図　土杭 AW(14)216・219・222・236・252・256　(1/60)



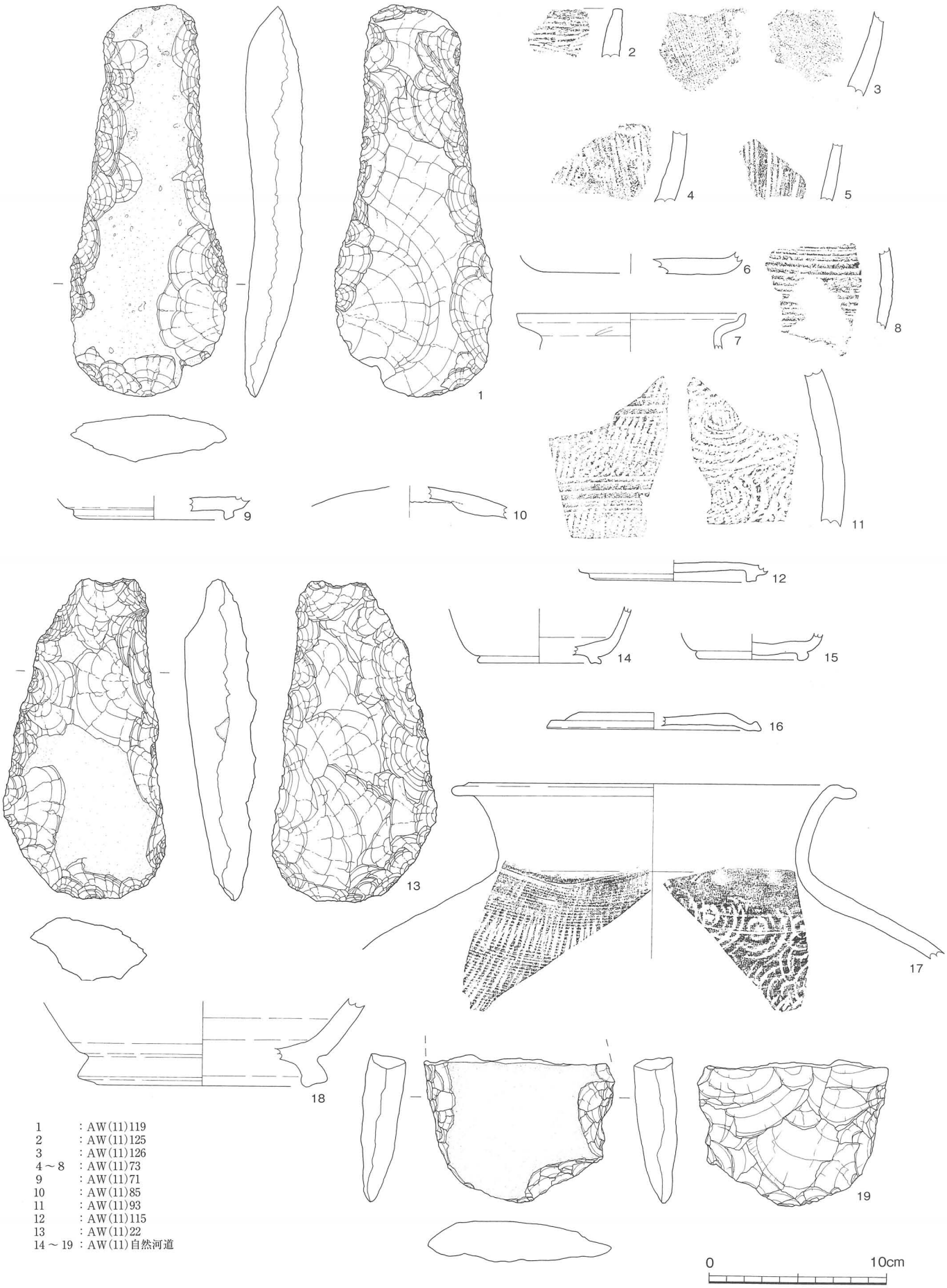
第40図　遺構実測図　土杭 AW(11)24・25・75・76・123・131　(1/300、1/60)



第41図　遺構実測図　溝 AW(13)30・30b・31・66・75・207・505・649・663・664・665
AW(14)3・7・12・19・52・247・251　AW(15)90　(1/400)

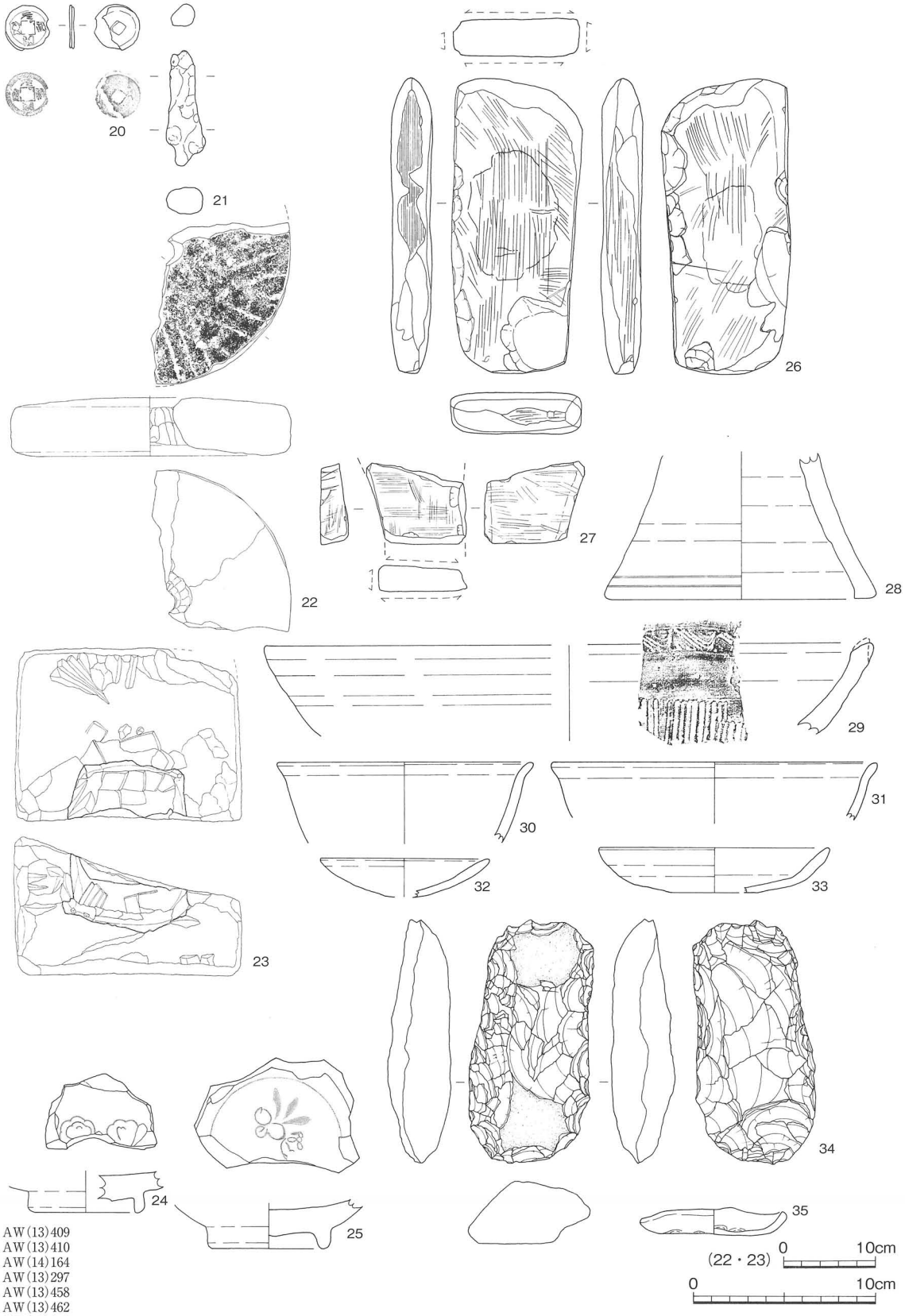


第42図　遺構実測図　溝 AW(13)30・30b・31・66・75・207・501・505・649・664・665
AW(14)3・7・12・19　(1/60)



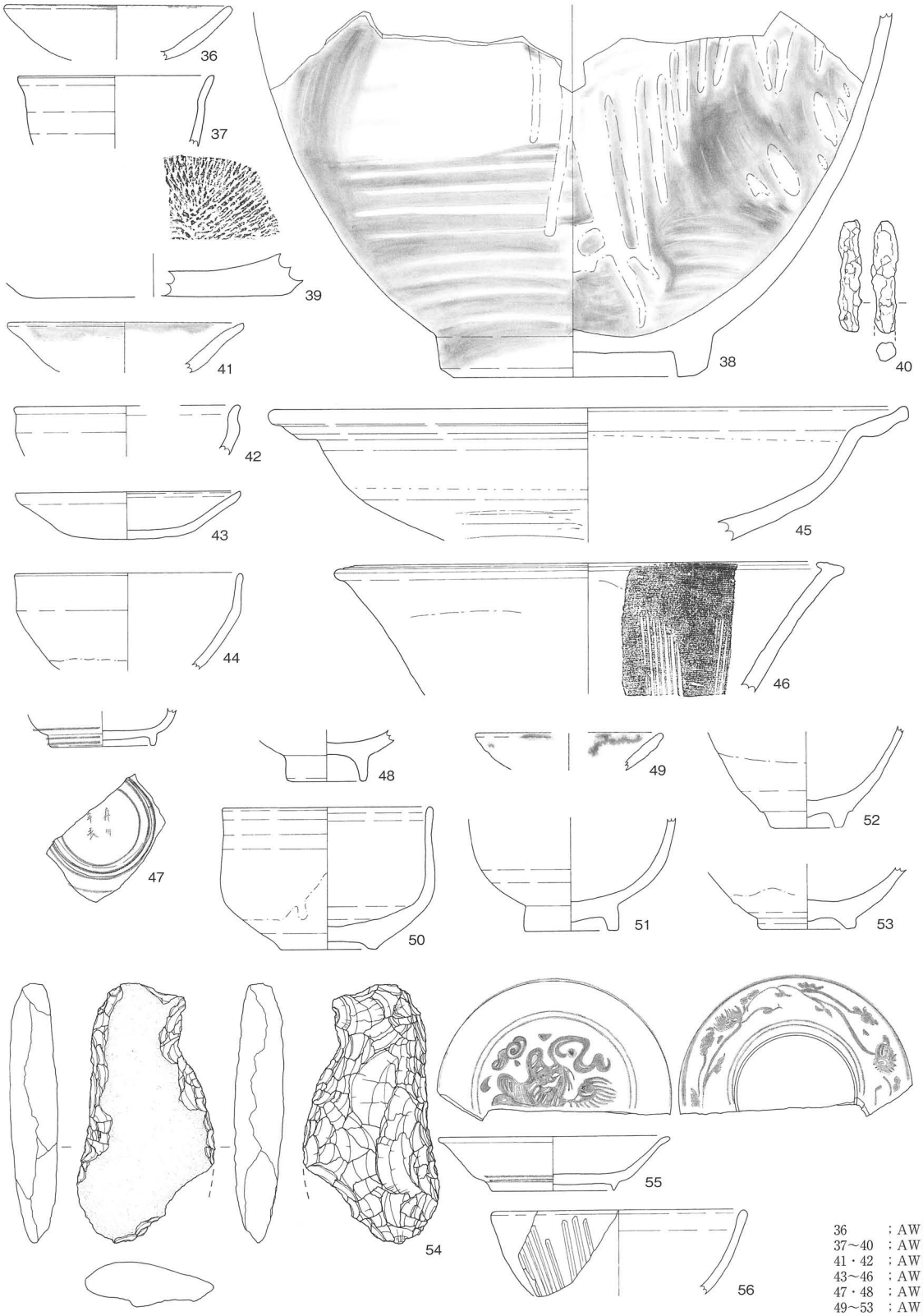
1　　：AW(11)119
2　　：AW(11)125
3　　：AW(11)126
4～8　：AW(11)73
9　　：AW(11)71
10　　：AW(11)85
11　　：AW(11)93
12　　：AW(11)115
13　　：AW(11)22
14～19：AW(11)自然河道

第43図　遺物実測図(1)(1/3)



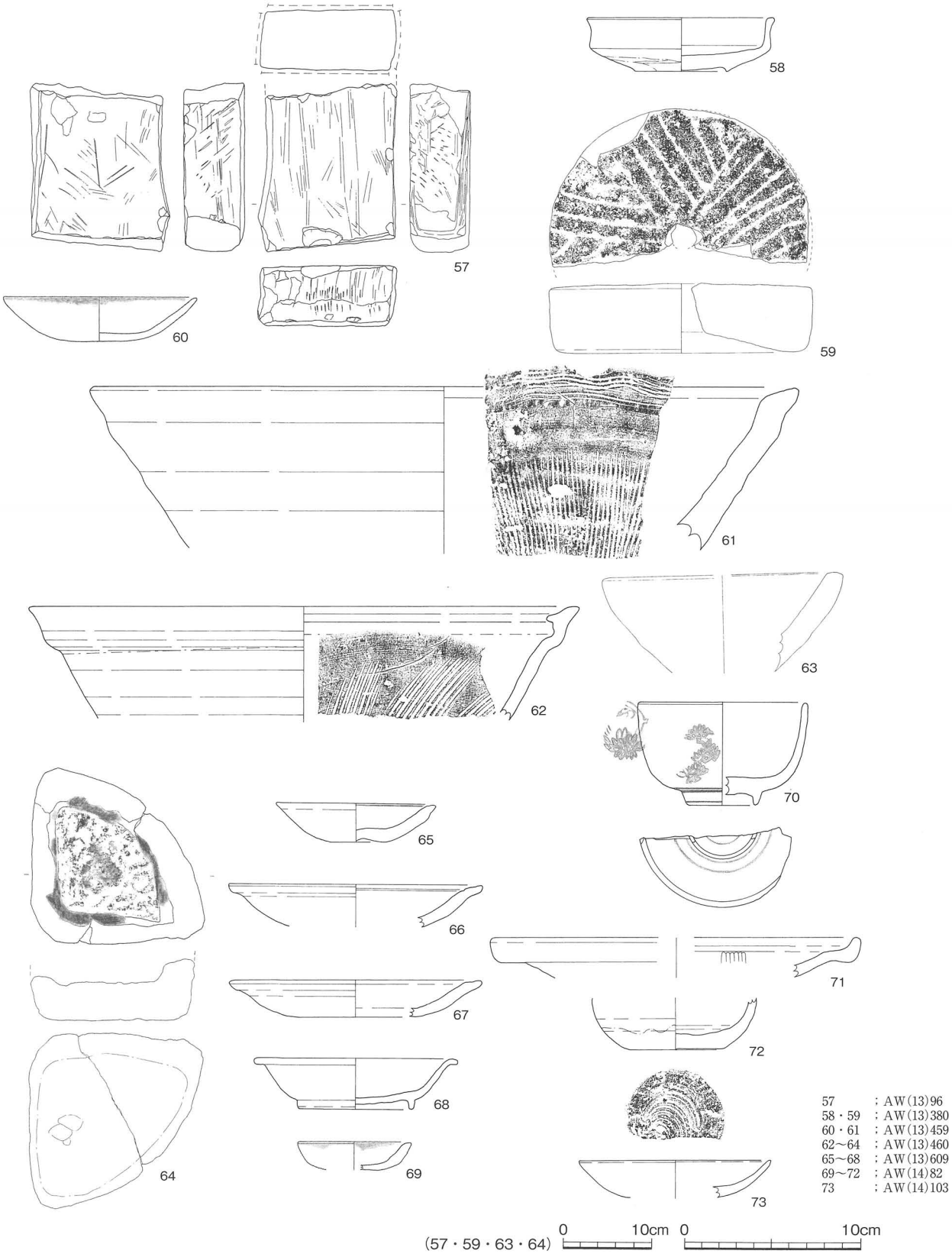
20　：AW(13)409
21～23　：AW(13)410
24・25　：AW(14)164
26・27　：AW(13)297
28・29　：AW(13)458
30・31　：AW(13)462
32　：AW(13)656
33　：AW(14)2
34　：AW(13)231
35　：AW(11)15

第44図　遺物実測図(2)(1/3、1/6)

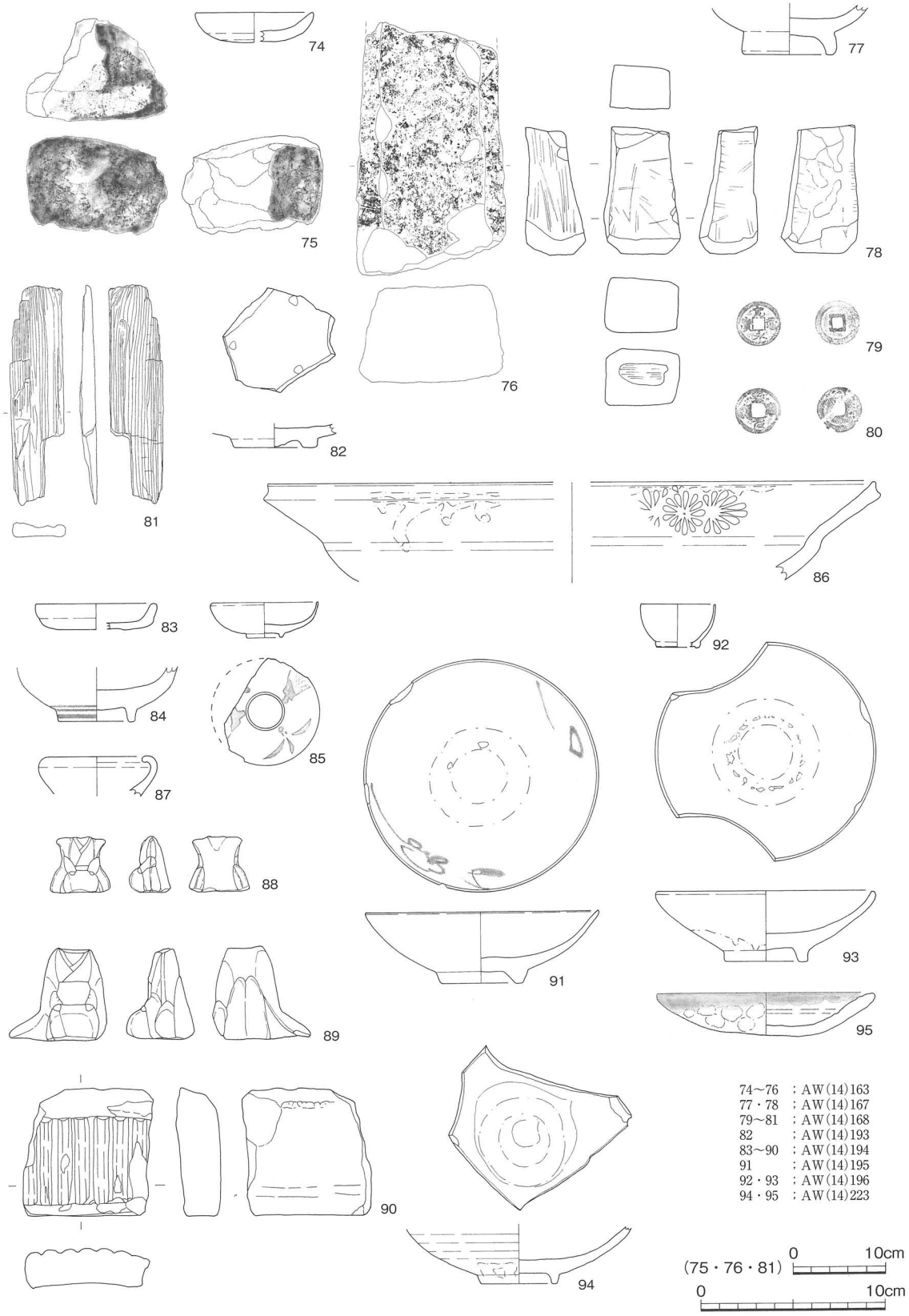


36　：AW(11)69
37～40　：AW(13)32
41・42　：AW(13)40
43～46　：AW(13)42
47・48　：AW(13)43
49～53　：AW(13)93
54～56　：AW(13)95

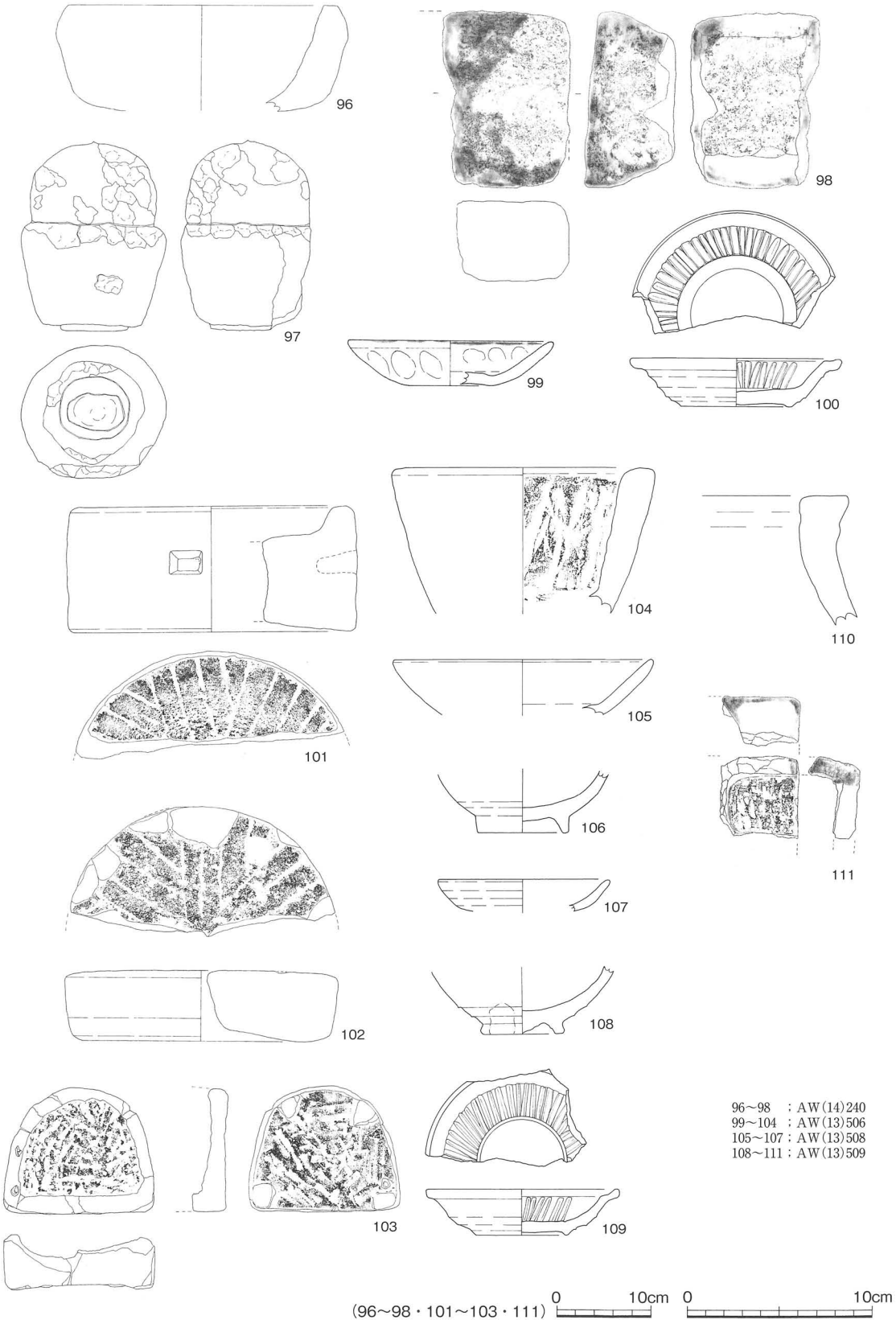
第45図　遺物実測図(3)(1/3)



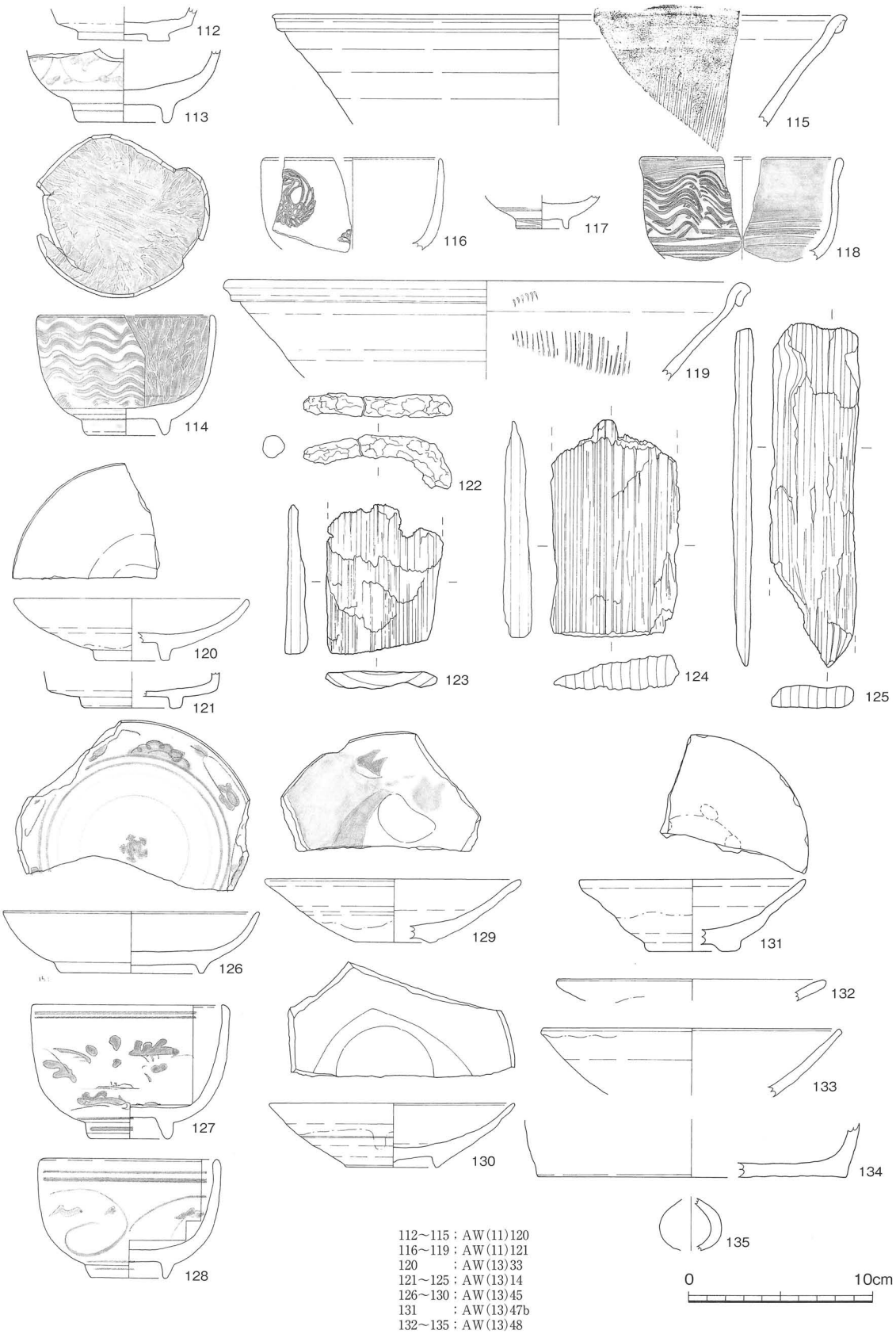
第46図　遺物実測図(4) (1/3、1/6)



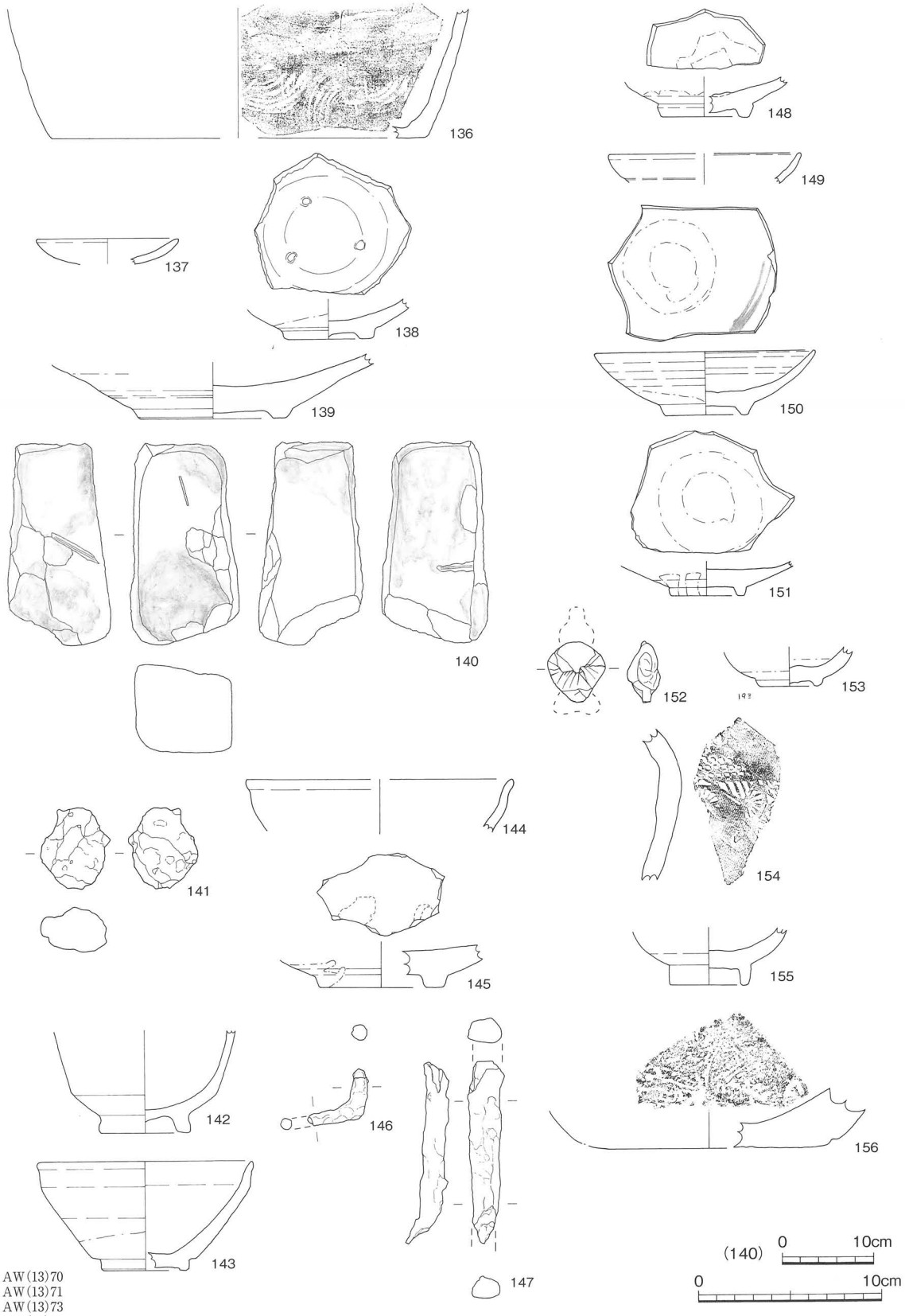
第47図　遺物実測図(5)(1/3、1/6)



第48図　遺物実測図(6)(1/3、1/6)

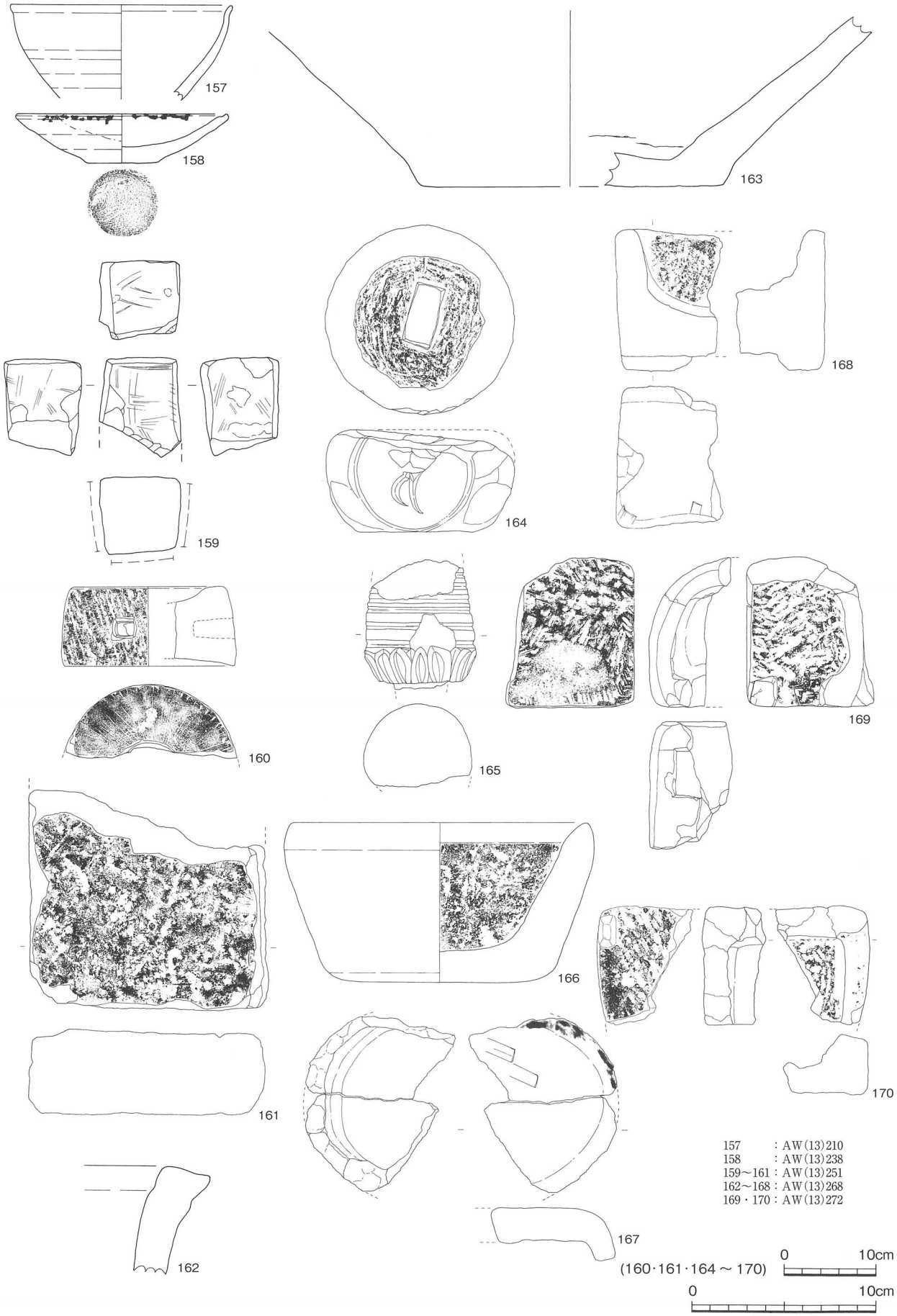


第49図　遺物実測図(7)(1/3)

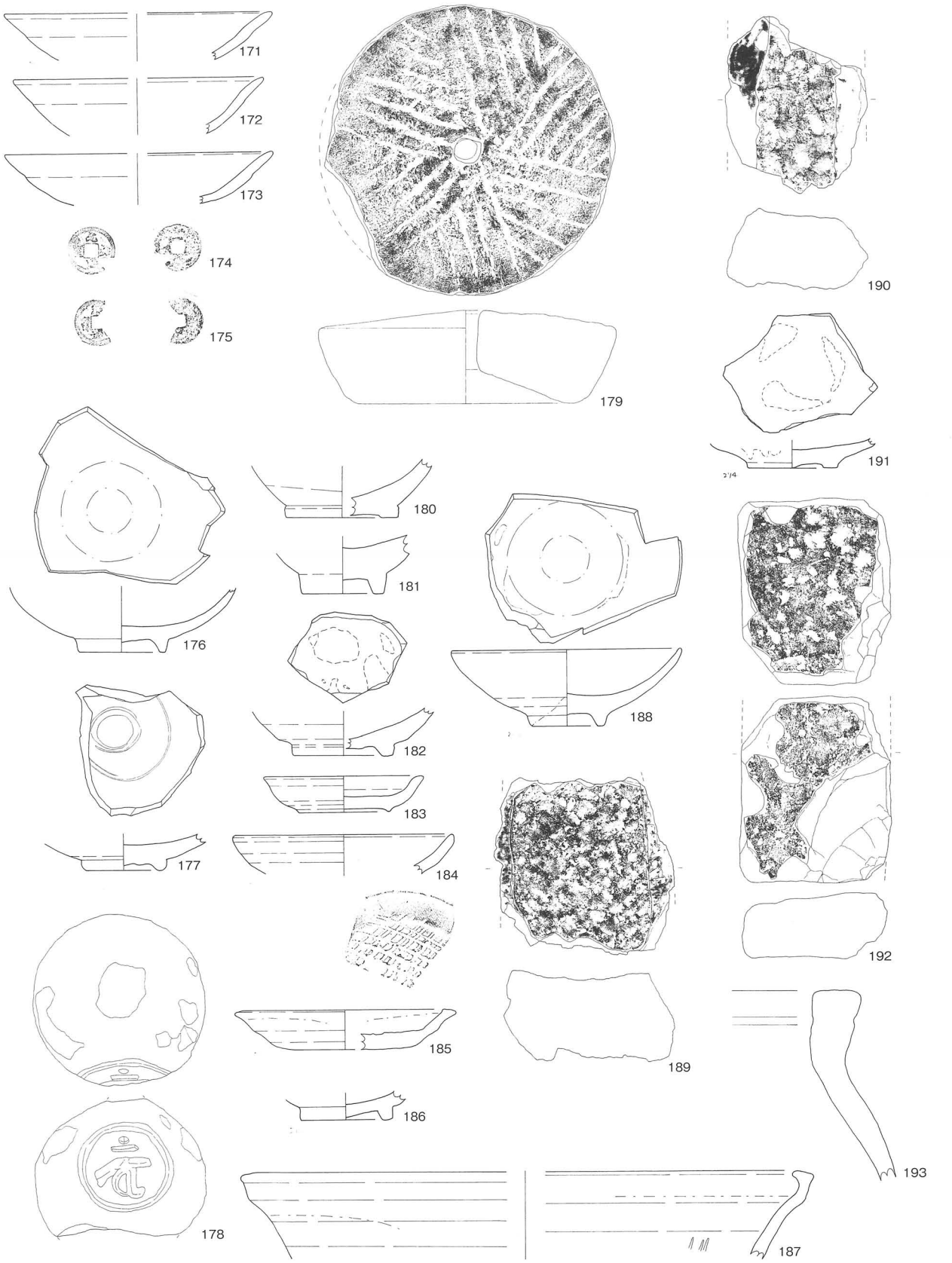


136　　；AW(13)70
137～140；AW(13)71
141　　；AW(13)73
142・143；AW(13)79
144～147；AW(13)121a
148　　；AW(13)121b 東
149～154；AW(13)121c
155　　；AW(13)139 西
156　　；AW(13)155

第 50 図　遺物実測図(8)(1/3、1/6)

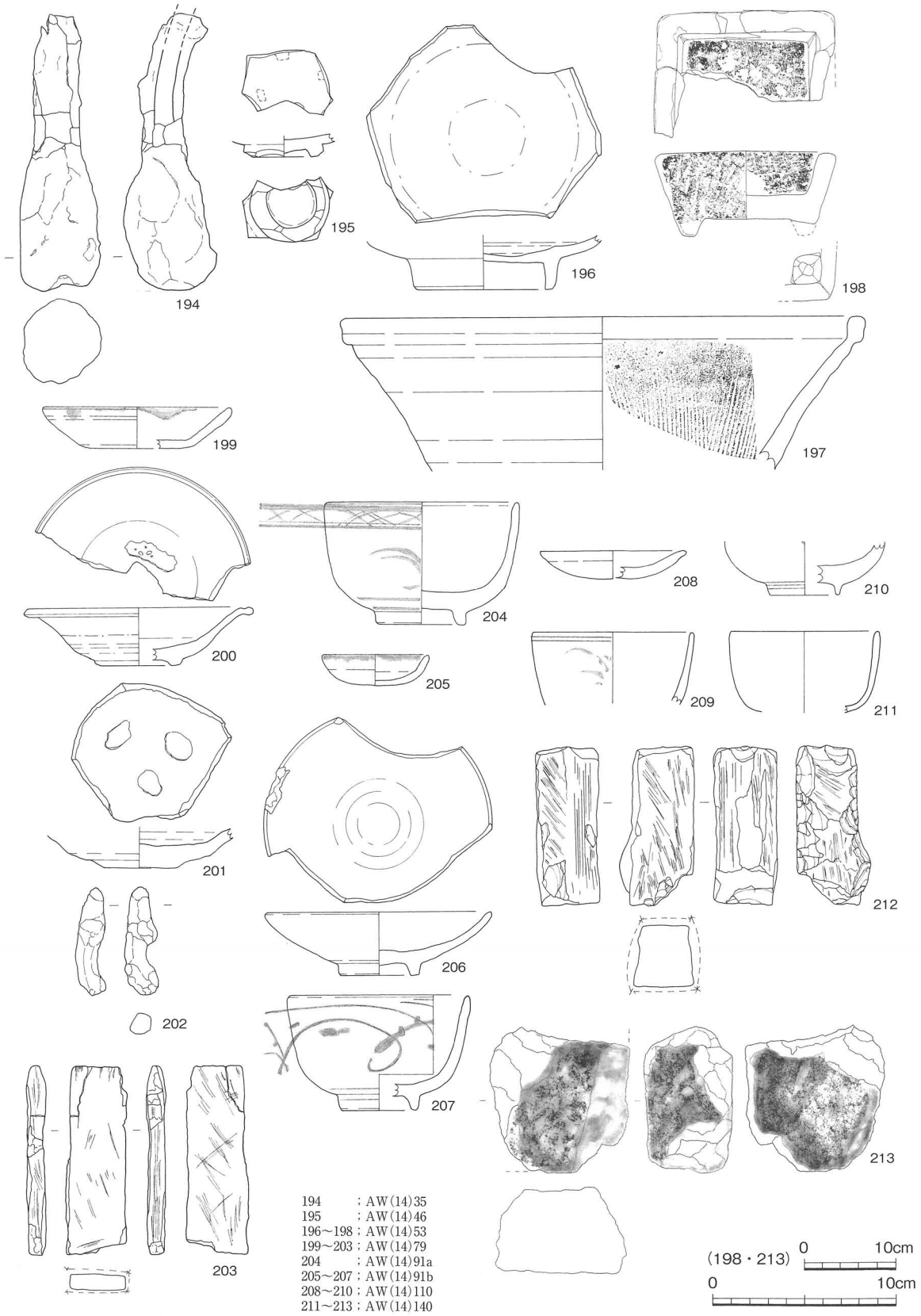


第51図　遺物実測図(9)(1/3、1/6)

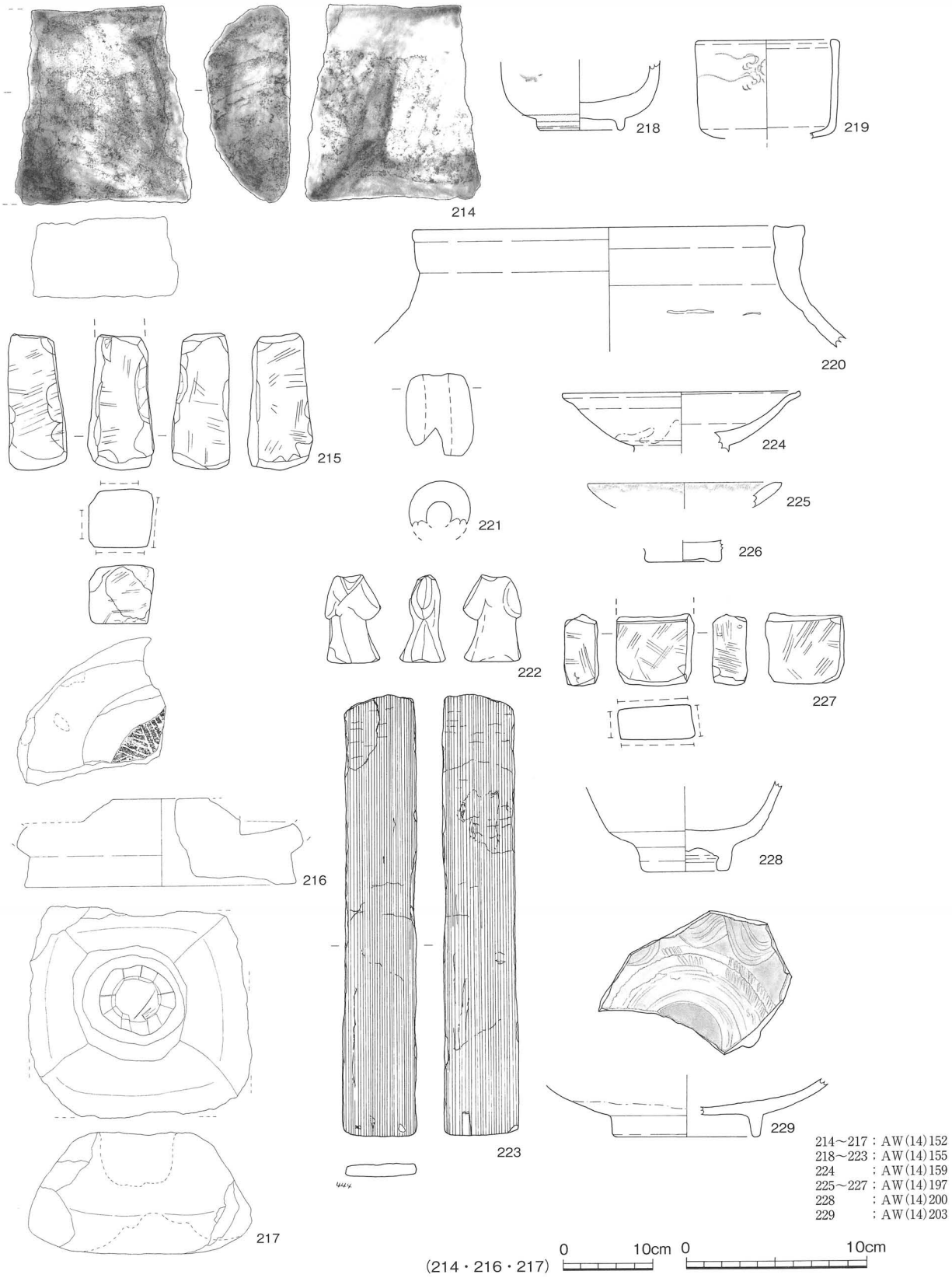


171～175：AW(13)294 下層
176～179：AW(13)295
180・181：AW(13)303 a
182～185：AW(13)303 c
186　　：AW(13)308
187　　：AW(13)327
188　　：AW(13)372
189・190：AW(13)402
191・192：AW(13)464
193　　：AW(13)607

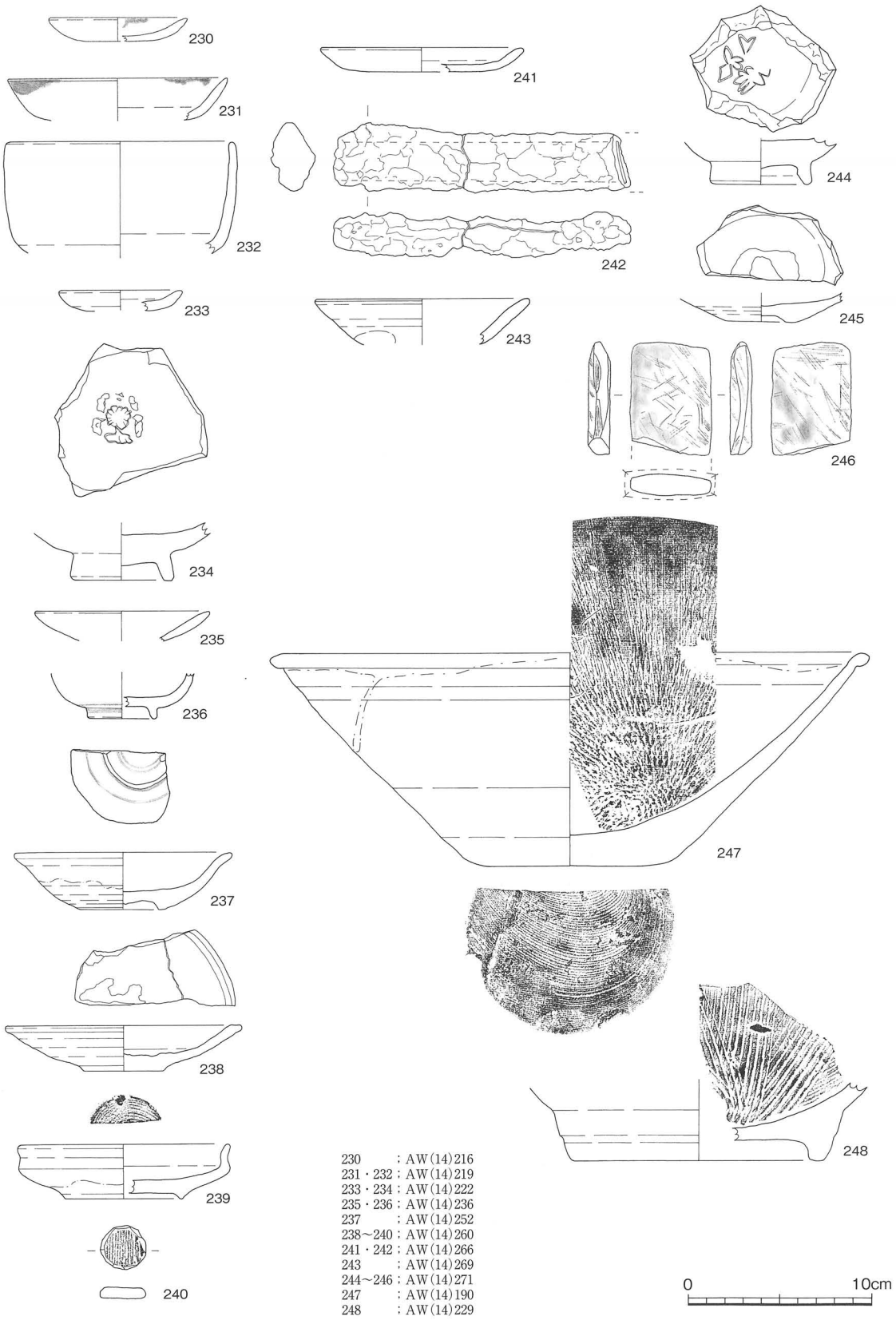
第 52 図　遺物実測図(10)(1/3、1/6)



第53図　遺物実測図(11)(1/3、1/6)

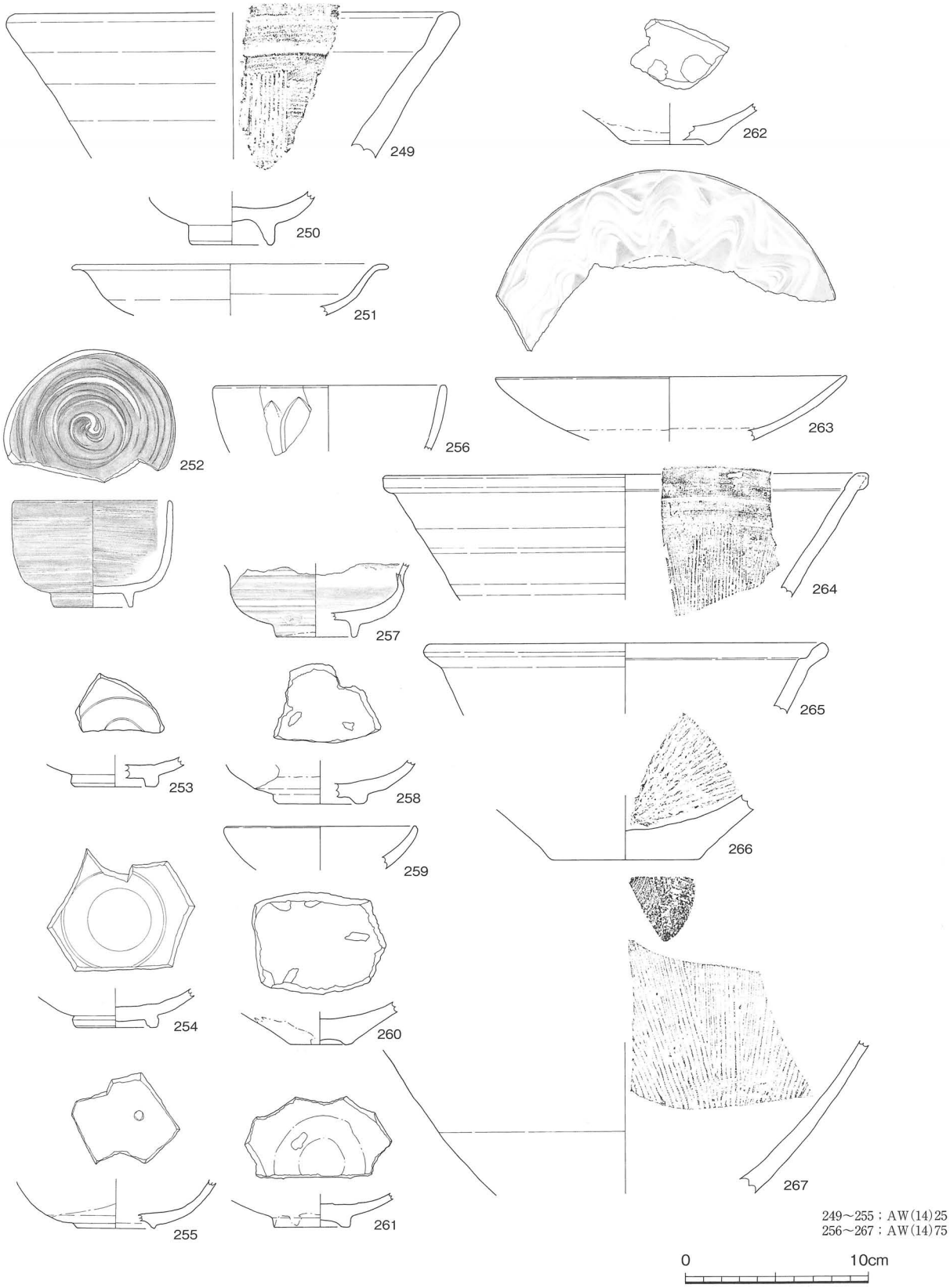


第54図　遺物実測図(12)(1/3、1/6)

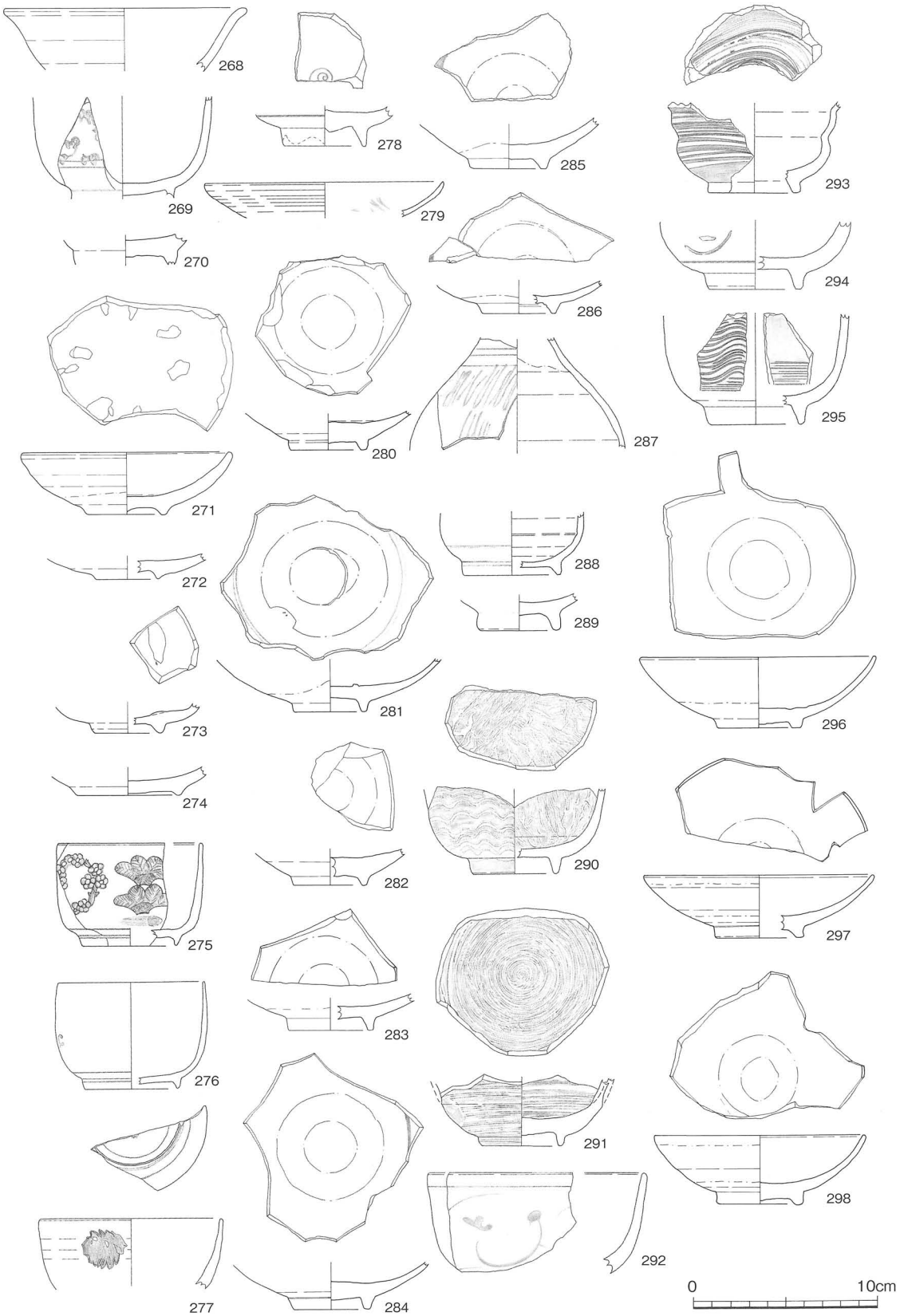


230　　：AW(14)216
231・232：AW(14)219
233・234：AW(14)222
235・236：AW(14)236
237　　：AW(14)252
238～240：AW(14)260
241・242：AW(14)266
243　　：AW(14)269
244～246：AW(14)271
247　　：AW(14)190
248　　：AW(14)229

第55図　遺物実測図(13)(1/3)

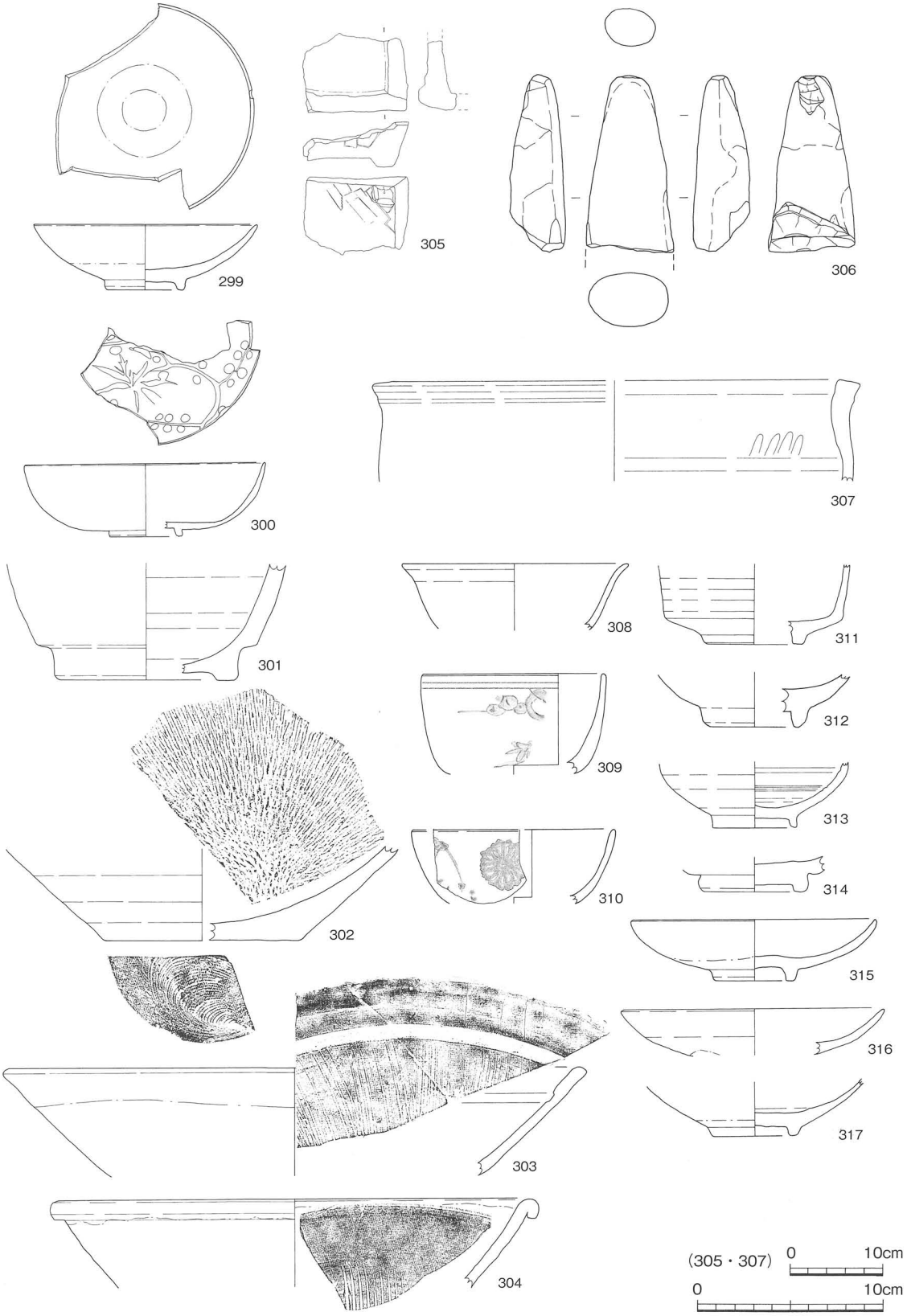


第 56 図　遺物実測図(14) (1/3)



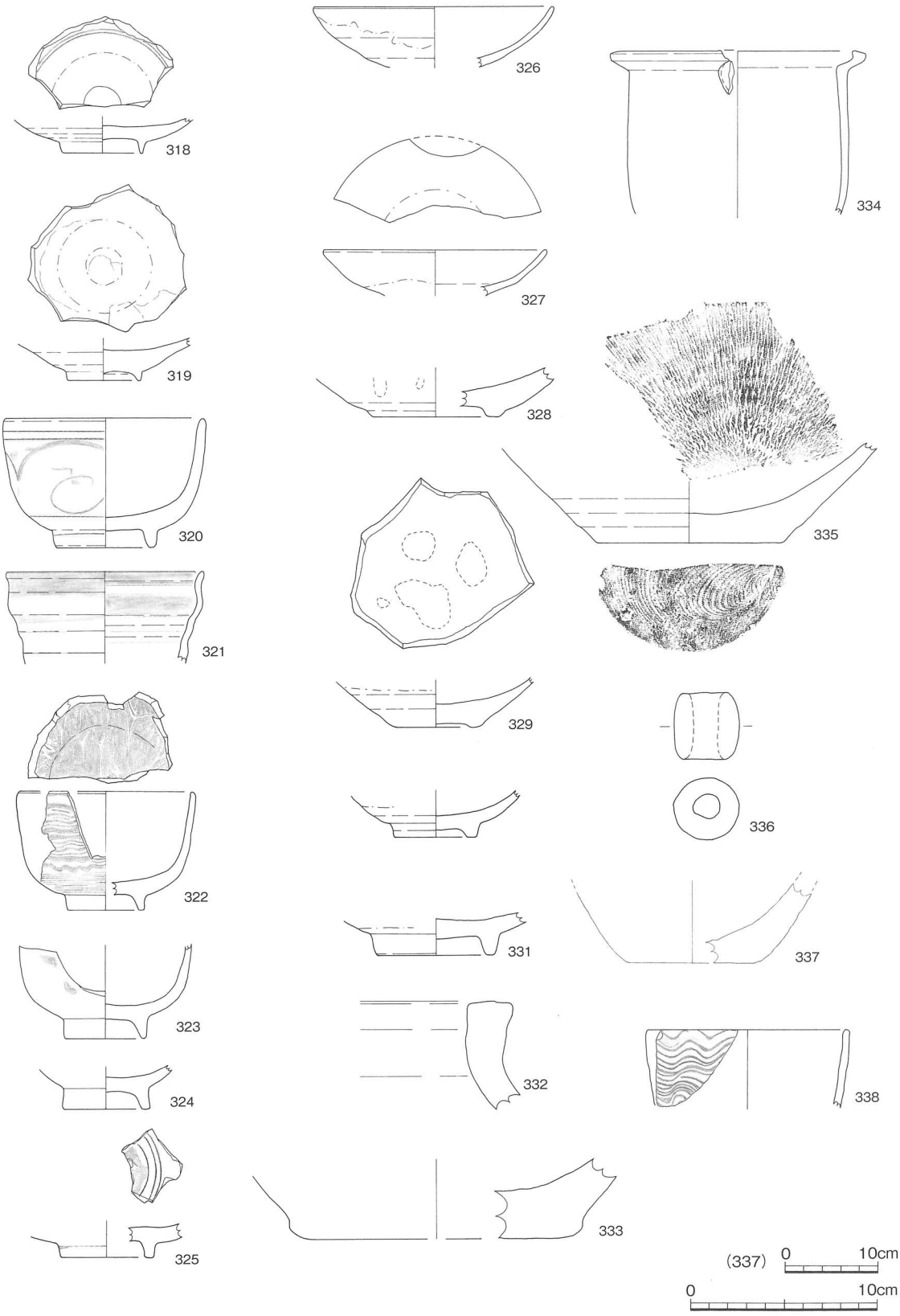
268～274：AW(10)76
275～298：AW(11)123

第 57 図　遺物実測図(15)(1/3)



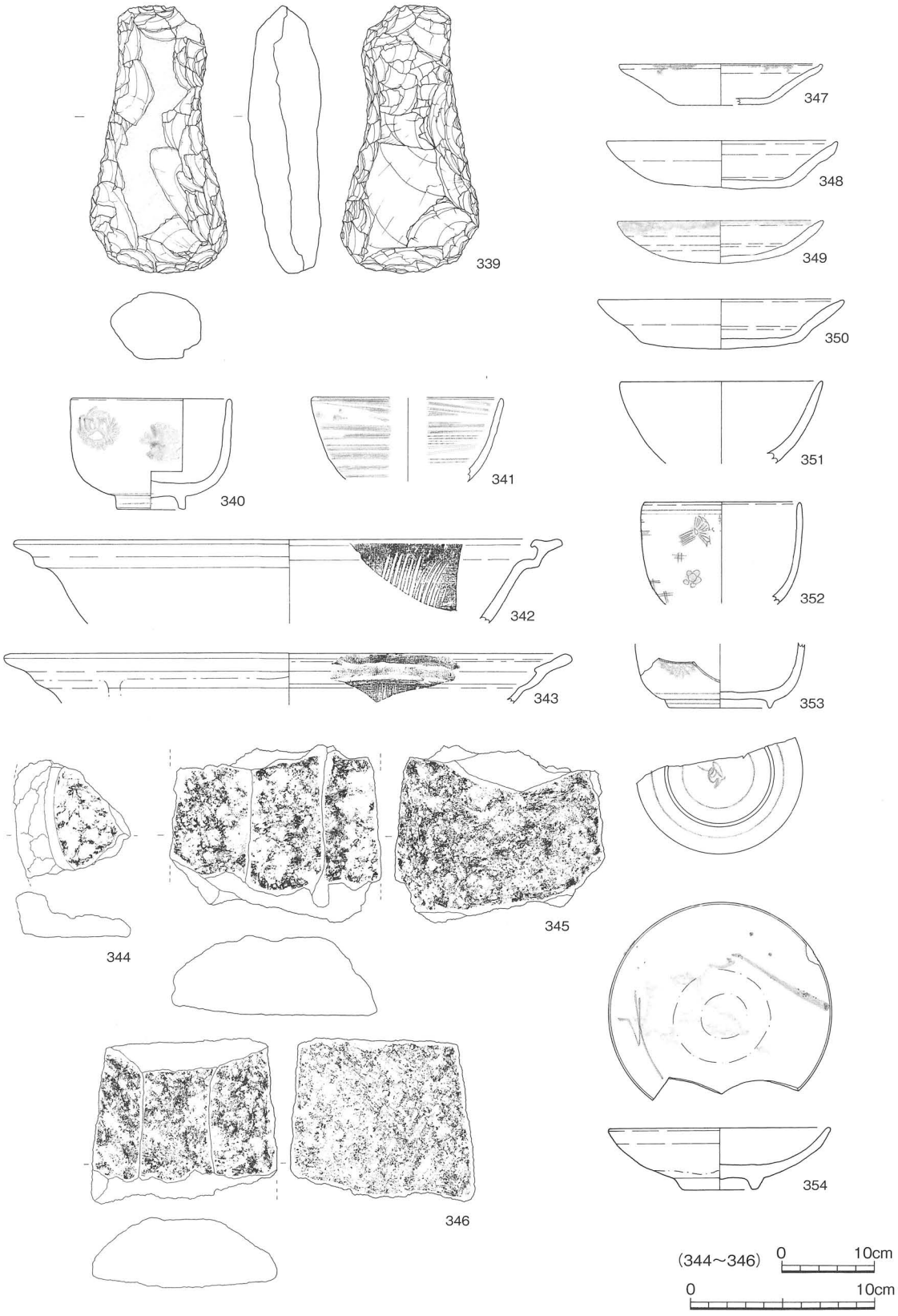
299～305：AW(11)123
306～317：AW(13)30

第58図　遺物実測図(16)(1/3)



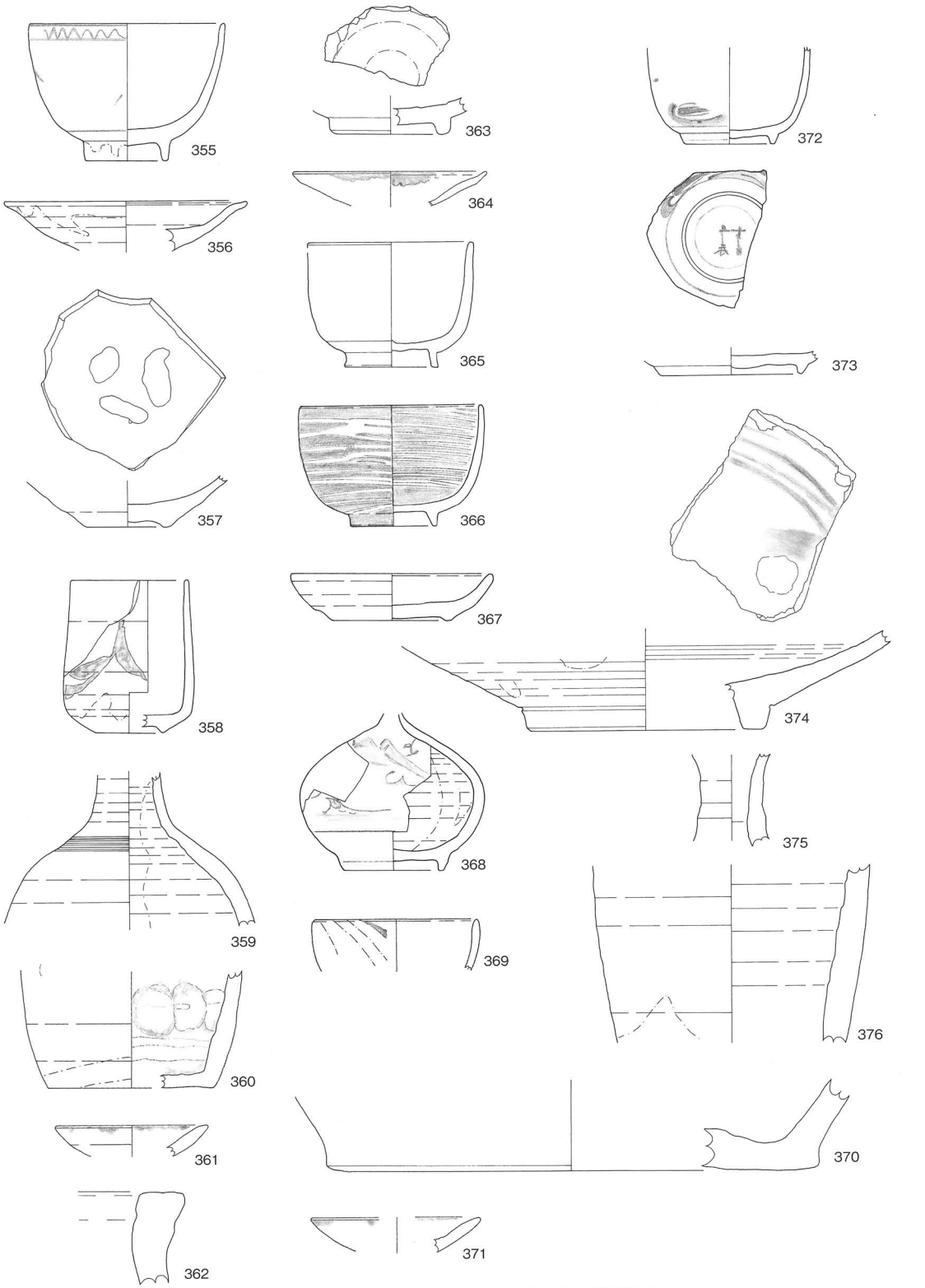
318～338：AW(13)30

第59図　遺物実測図(17)(1/3、1/6)



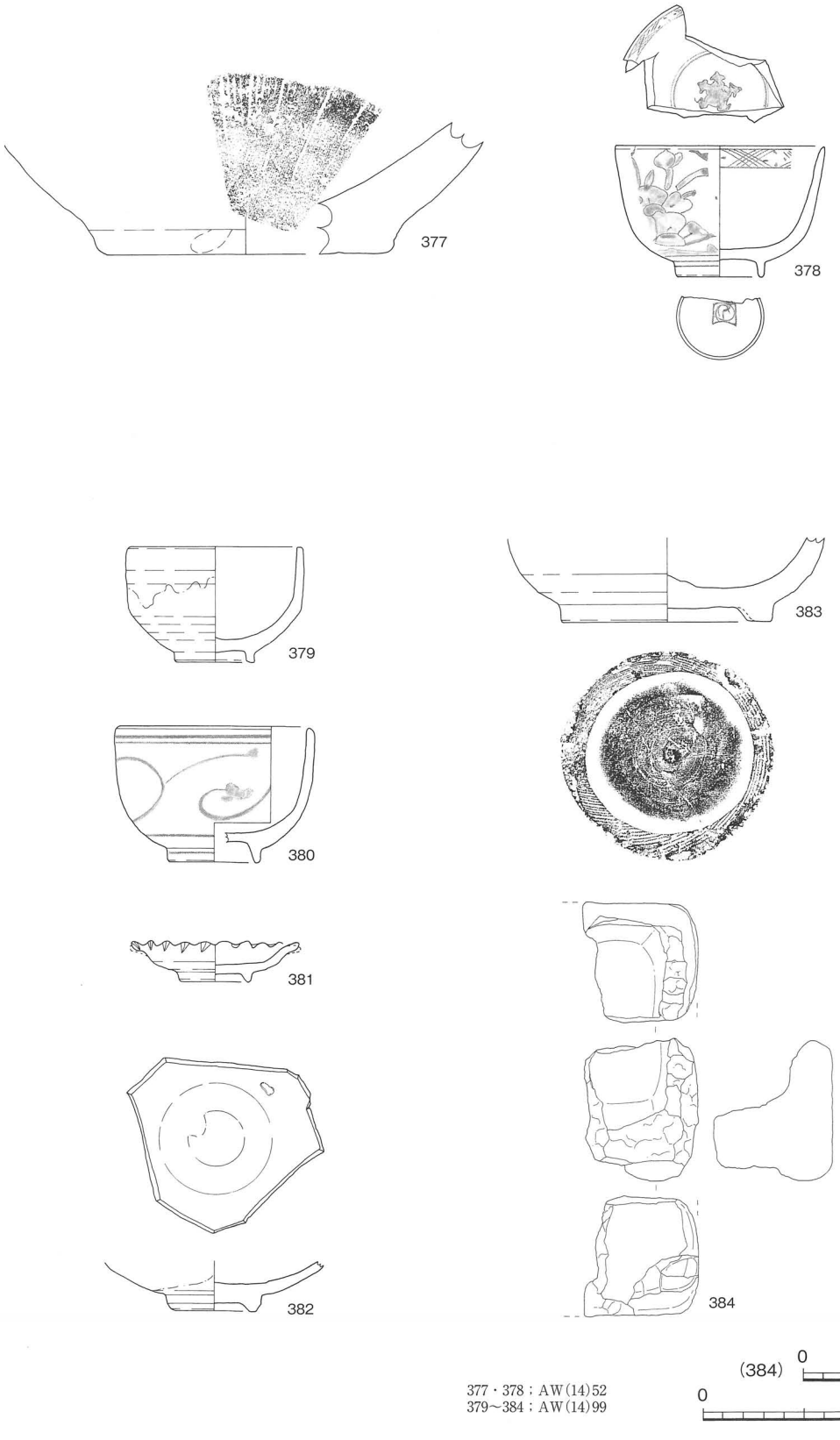
339～346：AW(13)75
347～354：AW(13)207

第60図　遺物実測図(18)(1/3、1/6)



355～360：AW(13)207
361・362：AW(13)501
363　　：AW(13)663
364～367：AW(14)3
368・369：AW(14)7
370～376：AW(14)12

第61図　遺物実測図(19)(1/3)



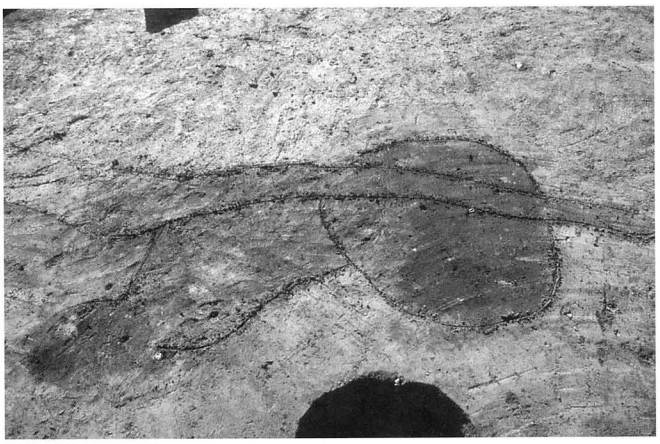
377・378：AW(14)52
379～384：AW(14)99

第62図　遺物実測図(20)(1/3、1/6)

AW（11）119完掘（南から）

AW（11）47断面（南から）

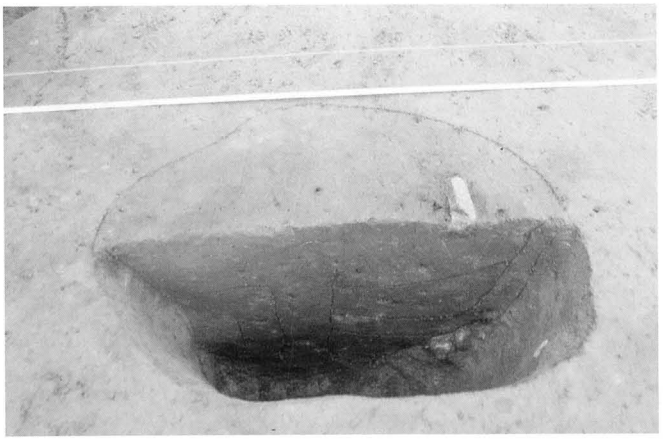
AW（11）73検出（北から）



AW（11）73　焼土

AW（11）73東西断面・西側（南から）

AW（11）73東西断面・東側（南から）



AW（11）73-P21断面（南から）

AW（11）73完掘（北から）

AW（11）21・22検出（西から）

AW（11）21・22断面（東から）

AW（11）平行溝Ａ群（南から）

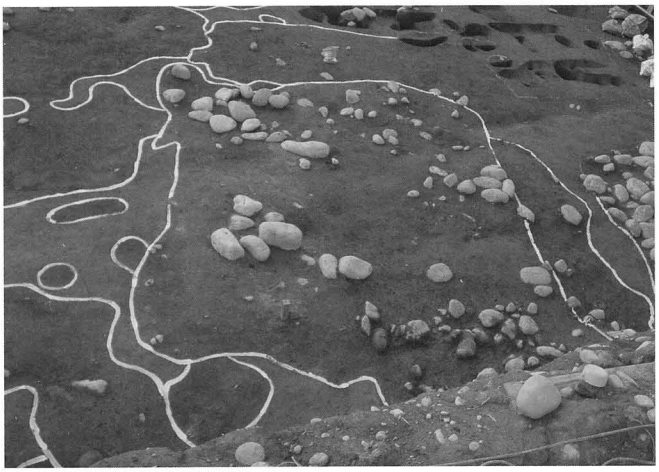
AW（11）柵列（北西から）

AW（11）128完掘（西から）

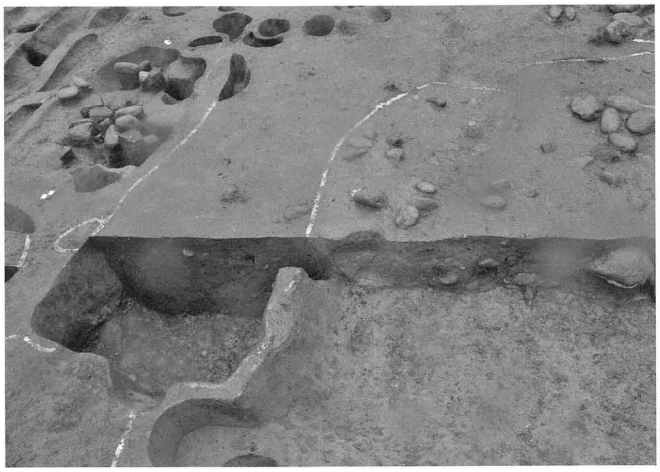
AW（11）121断面（北から）

AW（11）123（南から）

AW（11）25完掘（北から）



AW（13）410検出（東から）



AW（13）409・410断面（南から）

AW（13）410断面（南から）

AW（13）297断面（西から）

AW（13）40断面（東から）

AW（13）93東西断面（南から）

AW（13）93南北断面（西から）

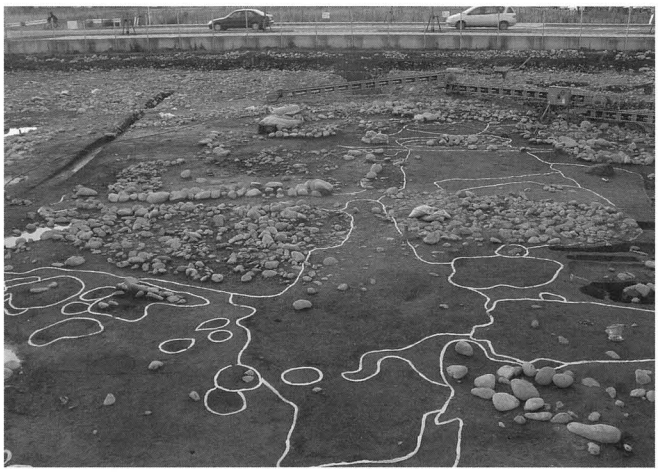
AW（13）93東側石列（南から）

AW（13）95南北断面（西から）

AW（13）459・207断面（西から）

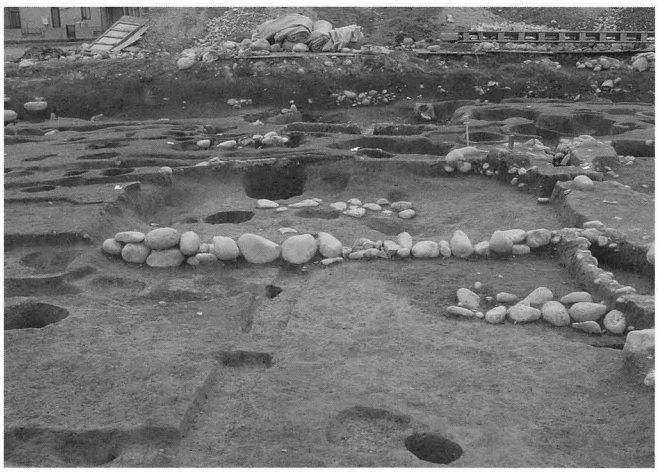
AW（13）609南北断面（西から）

AW（13）609東西断面（南から）

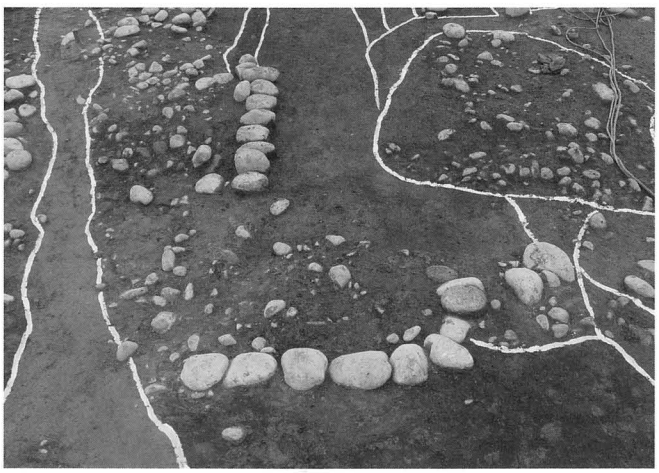


AW（13）506～509検出（東から）

AW（13）506・508石列（西から）

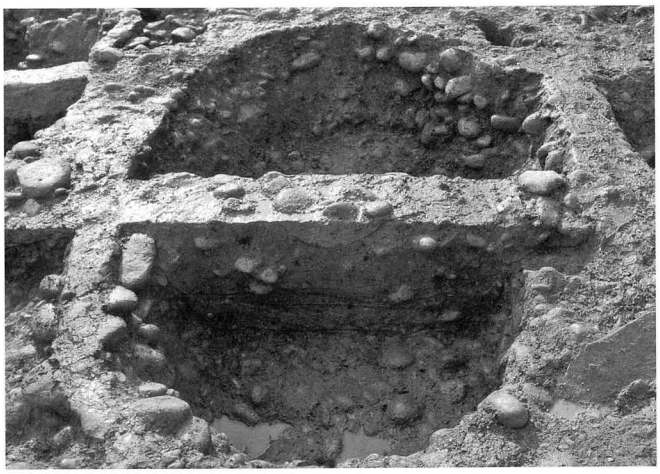


AW（13）507・509石列（西から）



AW（13）664・665検出（南から）

AW（13）41断面（南から）



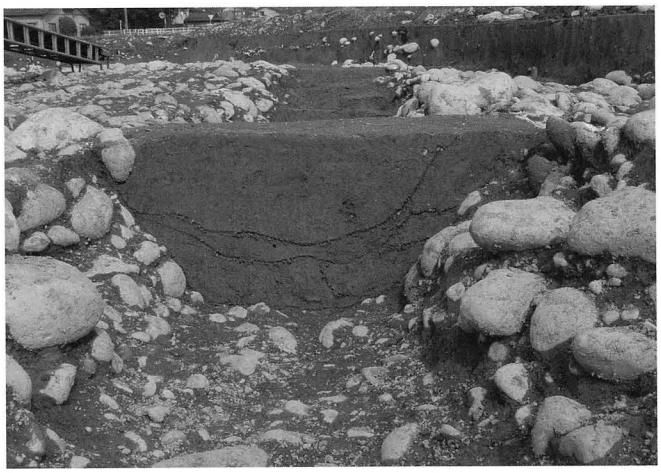
AW（13）45断面（南から）

AW（13）48断面（南から）

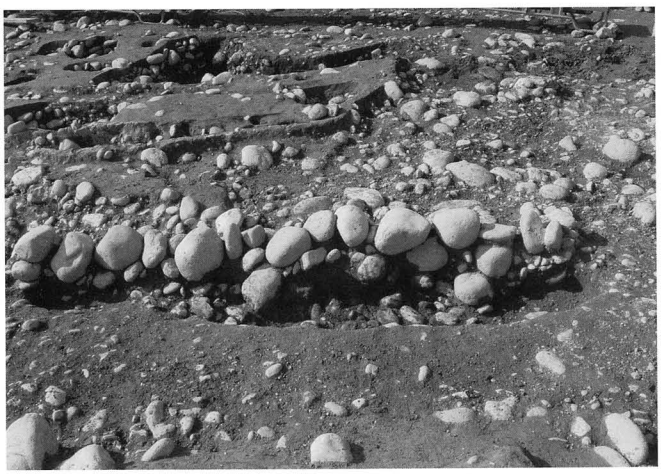
AW（13）83遺物出土状況（南から）

AW（13）239遺物出土状況（西から）

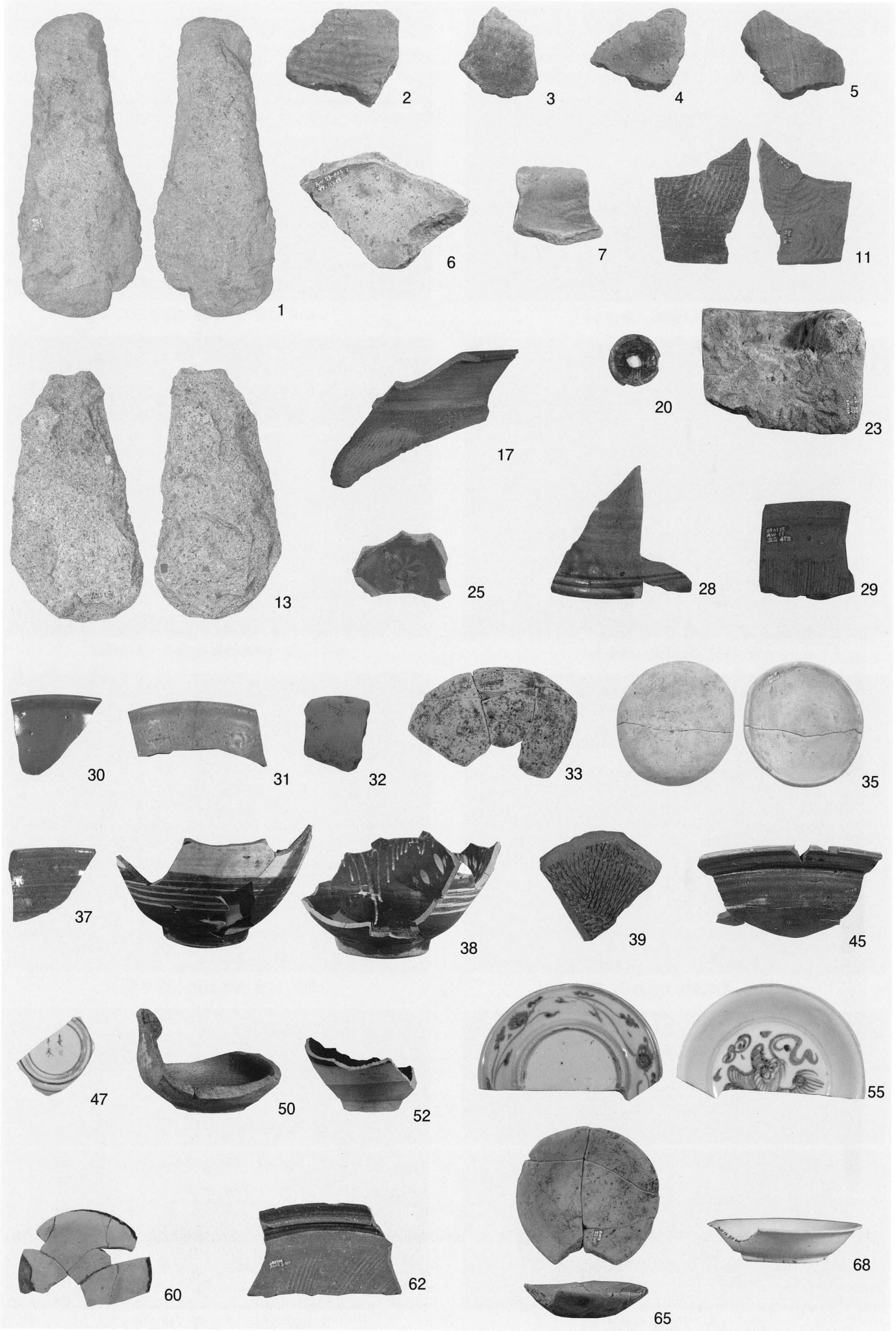
AW（13）505石列（西から）



AW（14）７断面（西から）

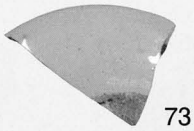


AW（14）７石列（南から）

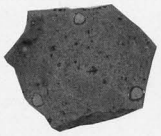

1
2
3
4
5
6
7
11
13
17
20
23
25
28
29
30
31
32
33
35
37
38
39
45
47
50
52
55
60
62
65
68

70

71

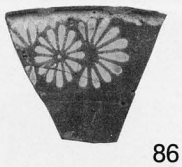

73

77



82

85


86

88

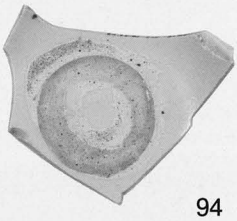
89

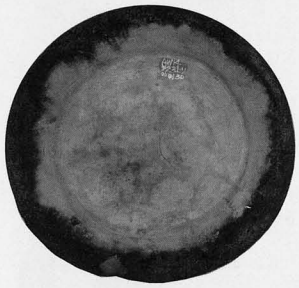
90

91

92

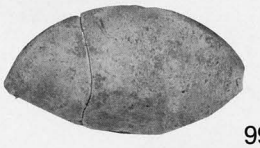
93


94



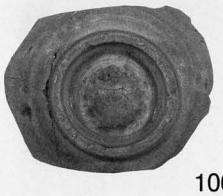
95

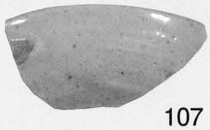
97

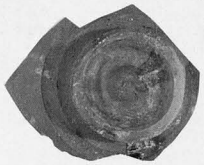

99

100

103


106


107


108

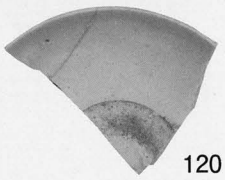
109

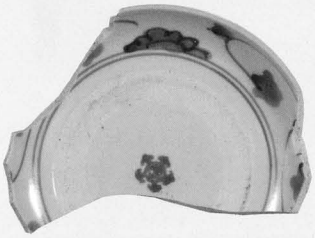
110

113

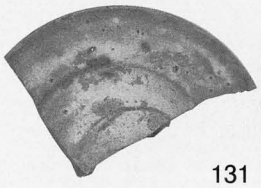
114

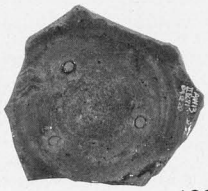
118


120

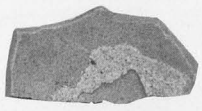

126

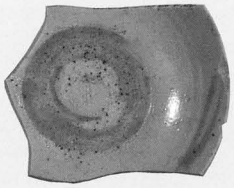
127

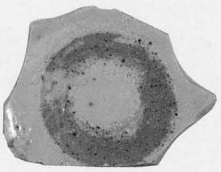

131


138

145


148


150

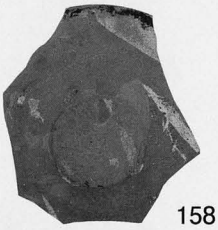

151

152

155

156

157


158

162

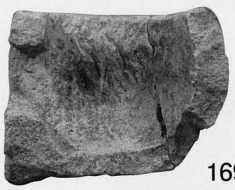
163

164

165

166

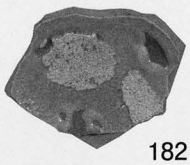
168


169

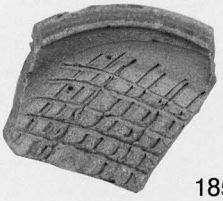
176

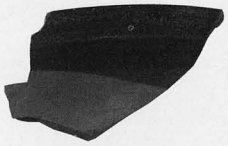
177

178

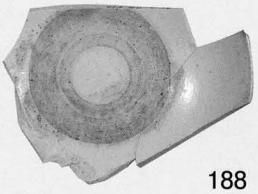

182

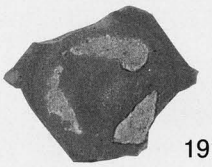
184

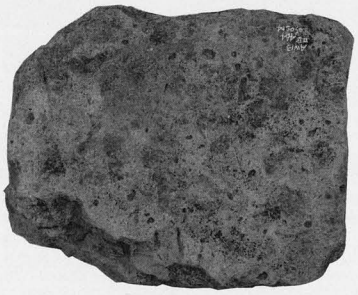

185



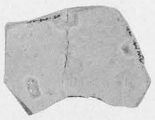
187

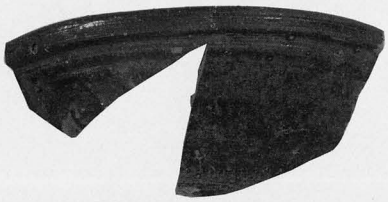

188

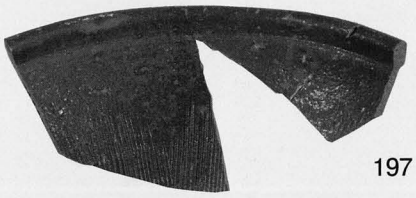

191

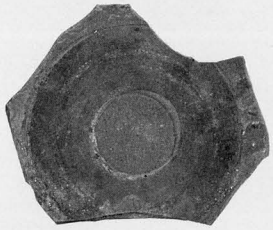

192

193

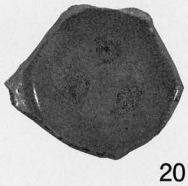

195



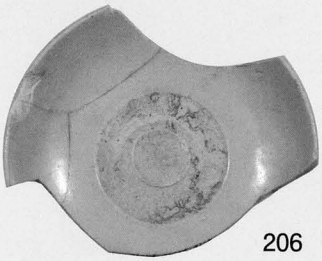

197


196

200

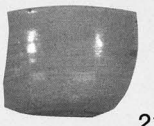

201

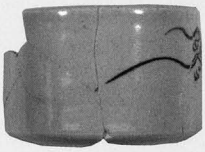
204


206

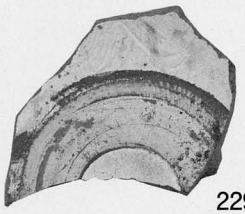
207

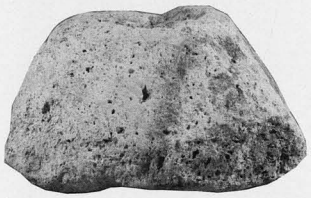
209


211

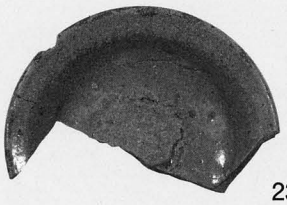

219

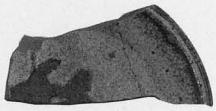
224


229

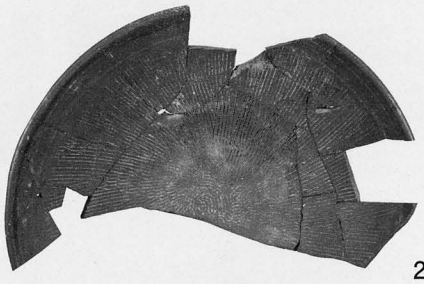

217

234


237

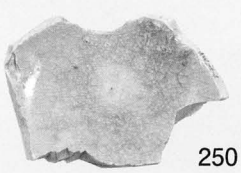

238

244


247

245

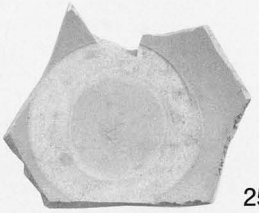
248

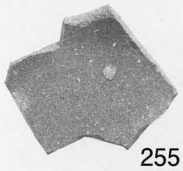

250

251

252

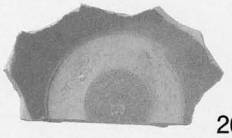
253


254

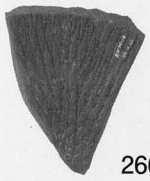

255

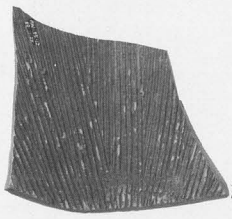
257

258


261

263


266

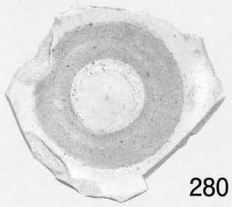

267

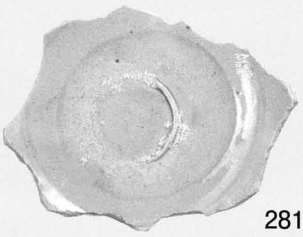
269

271

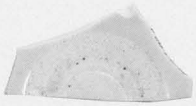
275

277


280


281

282


283

287

288

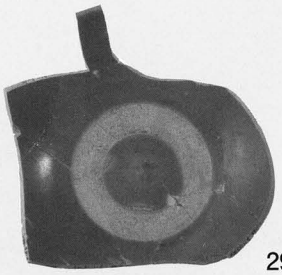
289

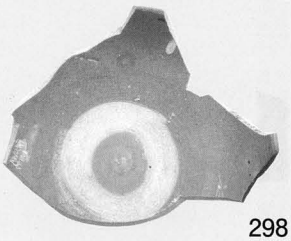
290

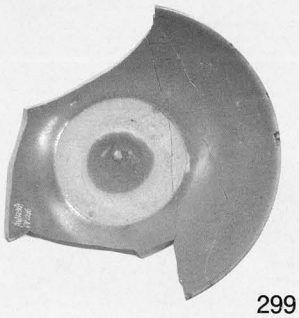
292

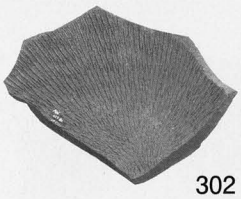
293

295

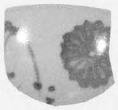

296

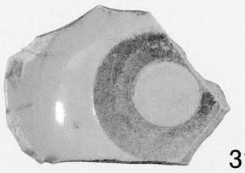

298

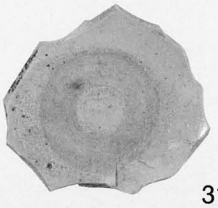

299


302

305


310

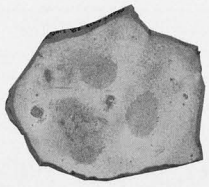

315

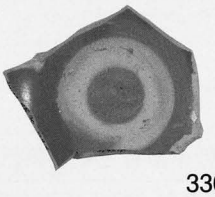

319

322

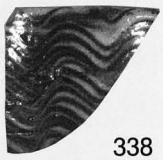
326

328

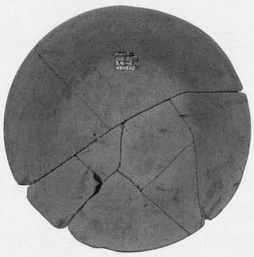

329


330

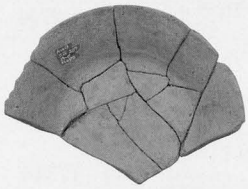
334


338

340

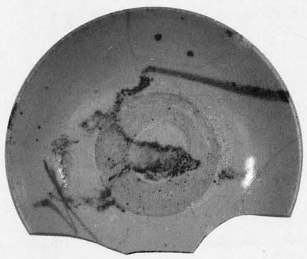


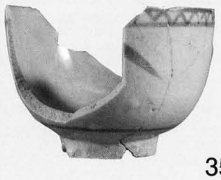
348

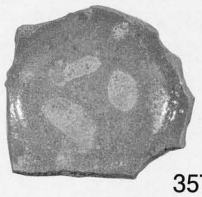


350

352

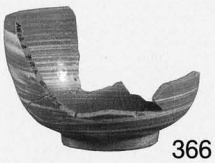

354


355


357

362

363


366

368

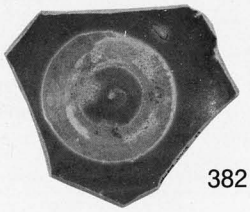
372

375

378

379

380


382

報告書抄録

ふりがな	あわだいせき
書名	粟田遺跡
副書名	野々市町中南部土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	5
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	布尾幸恵
編集機関	野々市町教育委員会
所在地	〒921－8510　石川県石川郡野々市町三納18街区1　　Tel：076－227－6122
発行機関	野々市町中南部土地区画整理組合・野々市町教育委員会
発行年月日	西暦　2010年３月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
粟田遺跡（あわだいせき）	石川県石川郡（いしかわけんいしかわぐん）野々市町粟田（ののいちまちあわだ）	17344	16008	36°30′30″	136°36′40″	19990930～20000114	1,600	記録保存調査
						20041122～20050317	2,170	
						20050404～20060215	1,409	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
粟田遺跡	集落跡	縄文、古代、中世、近世	竪穴状遺構、掘立柱建物、土坑、溝	土器、石器、陶磁器	

要約	縄文時代～弥生時代の土坑、古代の集落・耕作地、中世の集落、近世の集落を確認した。縄文時代～弥生時代の遺物は少数で、短期的な活動がなされたと考えられる。古代は竪穴状遺構を伴う掘立柱建物と、道路状遺構、畝溝群の跡が確認された。中世は竪穴状遺構が確認されている。近世は石列・石積をともなう竪穴状遺構や溝、掘立柱建物が確認された。溝の位置は近代の地籍図で記されている溝と合致する。

野々市町中南部土地区画整理事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書５

粟田遺跡

発行日　平成22年３月31日
発行者　野々市町教育委員会
〒921－8510
石川県石川郡野々市町三納18街区1
電話　076－227－6122
印刷　高桑美術印刷㈱

粟田遺跡遺構全体図